

---

# 特殊表裏清掃株式会社

MW

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

特殊表裏清掃株式会社

### 【Nコード】

N8101T

### 【作者名】

MW

### 【あらすじ】

世の中に存在するものであればどんな物でも掃除する仕事。それが宇賀神 ヒナの経営する『特殊表裏清掃株式会社』。ここには毎日様々な依頼が舞い込んでくる。ゴキブリの巣窟から生きた人間まで幅広い清掃を行うヒナ。そんな彼女が出会ったのは、生に醜く執着する1人の男だった……。

## 登場人物

### 【主な登場人物】

宇賀神 ヒナ

しつかりした常識人に見えるが、常にどこかで死を望んでいる。背が小さく童顔なのに大人っぽく見せようと必死。ちよつと弛めの夜会巻きは覚えたて。

竜崎 識

キャバクラを経営しているオッサン。良い歳してボタンを3つ以上開けちゃう。ゴツイ時計やアクセサリーを身につけているお洒落さん。

### 【特殊表裏清掃株式会社 従業員】

1：頭の悪そうな男  
よく喋る。

ダークレッドの髪をワックスで後ろに立たせている。自分で買った黒いつなぎを愛用。帽子はベルト通しに付いている。

2：良い女

グラマー。女の子には優しい。  
センター分けの長い髪を垂らしている。  
白いスーツを着ている（マイクロミニ）。

3：じーさん

何されてもニコニコして不憫な感じに見えて色々と容赦ない。  
輝く頭にはほとんど毛が遺されていない。  
会社支給のエメラルドグリーンのつなぎと帽子を愛用。

4：おばちゃん

近所の世話焼きな太つちよおばちゃん。世話焼き。  
ソバージュをあてた肩までの髪を放置。  
普段着にエプロン。お弁当屋とかやってそう。

5：今時の男

ノリだけはピザ屋のお兄ちゃんみたい。いつもニコニコの糸目。  
短く清潔感のある感じ。銀フレームの眼鏡着用。  
会社支給の青いつなぎと帽子を愛用。

6：ヒゲの男

唯一エンバーミングができる。ちよつと見た目汚い。  
黒髪癖つ毛。ヒゲも髪もボサボサ。黒ぶち眼鏡着用。  
白のよれよれTシャツにGパン。サンダル。

7：冴えない男

どう見てもリストラ社員。お腹も出てるし古い眼鏡のレンズは  
汚いし脂浮いてる。  
バーコード。その比率は1：9くらい。  
よれよれスーツを着ている。

8：人のよさそうな女

幼稚園の先生みたいな快活さをもった女。凄くまともな人に見  
える。本当に普通。  
毛先を内側に巻いたボブ。  
薄いグレーのスーツを着ている。

9：病的な男

線の細すぎる男。どもるし他人と目を合わせない。

サラサラストレートのセンター分け。隈が酷い。  
無地のTシャツにネルシャツ合わせ。Gパンにスニーカー。

10：物静かな女

クラスに1人はいる地味子。庶務二で電卓片手に事務とかやってそう。

パツツン一つ結び。でかい眼鏡着用。

濃いグレーの大きめスーツ着用。

11：態度のでかい女

気性が荒く男勝り。酒とかもグイグイ行けちゃう。意外と世話焼き。

シヨートボブ。意外とサラサラ。

会社支給の青いつなぎを着用。帽子はかぶらない。

## 第一章：出会い

「それでは名刺を見せて頂けますか？」

太って脂ぎった男から差し出された艶消しの黒い名刺。

下品な光を放つシャンデリアが箔押しをキラキラと光らせる。

「……」

差し出された名刺を確認しながら、宇賀神 ヒナ（うがじん ひな）はこっそりため息を吐いた。

商談の場所に設定されたのは、最近有名になって来たキャバクラ『ワンダーランド』。

明日は休日のためか、店内は多くの客で賑わっていた。

休日の前日は日が昇るまでやっていて、女の子の質も店の質も高いのが人気の要素らしい。

人殺しの依頼をするというのに、飲み屋とは随分馬鹿な依頼主だ。

ヒナはくるっと名刺を裏返し、内心でやはりか……と思い再びため息をつきそっになる。

「申し訳ございません、お客様。こちらは加賀野様にお渡しした名刺なのですが」

「だったらなんだ」

「名刺はお渡ししたご本人様しかご利用できません」

「なんだと！？ 高い金を払ったんだぞ！」

「加賀野様にはお譲り出来ない旨はお伝えしたのですが……」

見だ目残念そうにそう言えば、脂ぎった男は見る見る顔を赤くした。

「そんなこと知るか！ 私はその紙切れ一枚に高い金を払ったんだ  
！！」

「ですが、規則ですので」

「貴様、私を侮辱する気か！」

大きな音を立てて男がテーブルを叩けば、たまたま酒を持って来ていた店員がこちらに驚いたような視線を向ける。

そして何事も無かったかのように視線をそらし、さっさと部屋を出て行った。

「いえ、そう言うわけでは。ただ規則は ……」

言いかけた瞬間、ヒナに2つの銃口が向けられていた。

それを突きつけたのは男の後ろに控える2人のボディガードらしき男達。

「依頼を了承しないのであれば、消えてもらっほかあるまい？」

「……………」

短絡的な思考に思わず眉をしかめる。

ヒナは先程結び直したはずの夜会巻きが弛んできたため、早く直したかった。

そのせいで余計イライラが増す。

それを隠すように前髪をかきあげた。

「従業員に危害が及ぶ場合、依頼が無くとも掃除を開始していいことになっております」

「この状況でできるとでも？」

ふんつと鼻を鳴らして男は煙草に火を付けた。

口の端から煙を吹き出し、余裕の笑みを浮かべる。

「ええ、秘書とは言えプロですから」

「やってみろ」

「いえ、今すぐここでというわけには」

「できんのか」

思いつきり煙が顔にかかり、ヒナは顔をしかめそうになったものの、長年培ってきた営業スマイルを無理矢理ひねり出す。

「はい、残念ですが。お店を汚してしまうわけにはいきませんので」

暗に誰かに迷惑をかけない場所であれば即行動したとおわせる。

だが残念なことに、大抵の人間はヒナの見た目を見て「こいつには何もできまい」と判断するのだ。

恐らくこいつもそうだろう、といつも通りこちらも予測をつける。

「秘書」ごときに何が出来る」

「ご覧になれば分かるかと」

そう言つて微笑んだ瞬間、目の前に座る男の顔がヒクリと引きつった。

男は無言でコップをひつつかむと、中身をヒナの方へ浴びせる。

それをお盆で防ぐと男はいよいよ腹が立ったのか、立ちあがつて小鼻を膨らませながら鼻息荒くヒナを睨みつけ、唾を飛ばしながら怒鳴り付けた。

「何様のつもりだ!」

「交渉は決裂と言うことでよろしいでしょうか」

「決裂も何もあるか! 貴様ここを生きて出られると思つな!」

最奥のVIPルーム。

何があつても見なかったことにされる部屋。

ただ、人の口に戸は立てられない。

それに先程店員に見られた。

きつと今頃不穏な話をしていたとバックで話していることだろう。

となるとここでの掃除は不利益だ、とヒナは考えた。

一瞬店中の清掃を行おうかと思う程ヒナはイライラしていた。

長年この仕事をしてきたのに、どうしてあの時の自分は依頼を外で受けることにしたのかと思うと、今すぐ過去の自分を叱咤したい気分だ。

「それでは失礼いたします」

立ちあがって丁寧にお辞儀をすると同時に、目の前をボディーパーカーがそれを阻む。

一呼吸も置かずに引き金が引かれた。

乾いた音とともに銃弾が発せられる。

「！」

「やっぱり外での交渉は不向きだったわ。試験的にと思ったけど、試すまでもなかったし、よく考えればよかった」

そう言ってヒナは深いため息を吐く。

「そんな至近距離で外す奴があるか!!」

大声でボディガードを怒鳴りつける男。

それに相反して、ボディガード達は顔を青くしていた。

「何をしている!」

「何もできないのでは?」

イライラを隠すことなく言えば、意味が分からないのか男は再び顔を赤くした。

太ってるせいで鼻の穴の奥が狭くなってるのか、ピーピーと鼻を鳴らしながら口をパクパクさせる。

チラッと時計を見れば、ヒナの時計は午前4:40を指していた。

「なんだ、営業時間外じゃないの……」

「貴様お客様。営業時間外ですので、お帰り頂いて構いませんが」

最後の情けで言った言葉は、余計に男をイラつかせた。

「危害を加えるのであれば時間は関係ないんじゃないのか！」

「ええ、ですが興が乗らないというか……最後の情けと言うか……」

そして、ヒナもそれを理解してわざと言ったのか、男が蹴りあげるテーブルを見ながら、他人事のように「あーあ」と呟く。

自分のこう言う部分がまだ若いなと思いつながら、ドンペリやグラスが音を立てて床に散らばるのを眺めていた。

「……………」

男は肩で息をしていた。

酒臭い息が部屋を満たし、ヒナはそれをできるだけ吸わないように呼吸を浅くした。

「お帰りになりませんか？」

「……………貸せ！ 私が殺る！！」

男はボディーガードから銃を奪い取り、ヒナに向けて構えた。

そして男はようやく異変に気付く。

「……………」

あまりにも店内が静かなのだ。

まるで閉店した後の様な静けさ。

不思議に思い視線だけで辺りを見渡したものの、防音の個室内では意味がないことに気付く。

ただ、いくら防音になっているとはいえ、先程まで聞こえていたはずのBGMすら聞こえなくなっているし、人の気配が全くしないのだ。

「如何なさいましたか？」

ヒナの背後からライトが照らす。

小首をかしげるヒナを見て、男は言いしれぬ恐怖を抱いた。

「…………… 貴様、秘書じゃないのか……………」

「そうですね」

ヒナは顔をしかめて顔に垂れてくる髪をかき上げた。

「あ、お客様」

突然上げた声は、対して大きくないのに男を驚かせた。

びくりと巨体を揺らして男が後ずさる。

「4：44です。営業時間となりました」

「……！」

男はヒュッと喉を鳴らすと、さらに後ずさった。

そこでようやくボディガードが床に倒れていることに気付く。

「何をした……」

「眠って頂きました」

「何をしたと聞いている……！！」

「ええ？ ですから、眠って頂いたと……」

ヒナの言葉は最後まで聞かず、男は一気に部屋から飛び出した。

「……あー」

男が店のドアを開けて向こう側へ消えて行った。

ドアが閉まった瞬間、再び店に活気が戻る。

男を見送りながらヒナはため息を吐き、たまたま通りがかった店員に店長を呼ぶよう言いつければ、店員はちらりと部屋の中を除いて一瞬驚いた表情になった。

「酒に酔って暴れた拳句、寝てしまったようで……お手数ですがついでにタクシーを呼んで頂きたいんです」

それでも店員は商売根性で無理やり微笑むと、「畏まりました」と言って小走りでバックへ戻っていく。

「あ、支払い……」

店の支払いもせずに出て行った男を思い、ヒナは小さく舌打ちした。

「ピンドン2本にフルーツ盛り……2本もいらないじゃん！ 片方栓開いてないし！」

ドカッとソファに身を沈めると、天井を仰いで頭を抱えた。

これで店員の脳裏には今日という日が激しく印象づいたに違いない。酔っ払って寝る人は珍しくないにしろ、不穏な話も聞かれてしまったしあの男も逃がしてしまった。

本当に店ごと清掃しようかと思った頃、人の来る気配を感じて立ち上がると同時に、閉じられたドアがノックされた。

「はい」

そう言ってドアを開ければ、受付にいた細い若者が顔をひきつらせて立っていた。

「お呼びでしょうか」

「はい、申し訳ございません……ちょっと部屋を汚してしまいました」

男はヒナの肩口から部屋の中をのぞき、顔を青くした。

どうやら破損したテーブルや絨毯は相当高価な代物だったらしい。

壁紙も一部剥がれ、酒はひっくり返って絨毯はグシヨグシヨだ。

「本当に申し訳ございません。弁償させて頂きたいので、責任者の方をお呼びしたのですが……」

「……お客様……その……失礼ですがそう簡単に弁償できる値段では……」

「いえ、ですがこちらの不手際ですし……」

「しかし……」

店長は遠慮気味にヒナを上から下に長め、困った顔をする。

ダークスーツに身を包んだヒナは、どう見てもただのOLと言った出で立ちだ。

「お金だけなら無駄にありますから、大丈夫です」

そう言ってヒナが困ったように笑えば、店長は本気で困った顔をした。

「軽く見積もって2000万弱だ。本当に払えるのか？」

後ろから声がし、2人がそちらを振り向けばホストの様な男が立っていた。

軽くウェーブのかかった黒髪を後ろに撫でつけ、カラーシャツは4個もボタンを開けていた。

チンピラのような金のネックレスにゴツイ形のロレックス。

さしずめ『お守』の人間だろうとアタリを付けたヒナは、軽く微笑んで頭を下げた。

「ご迷惑おかけして申し訳ございません。今すぐにも支払い可能です」

「じゃあ頼もうか」

「しかしオーナー……」

焦ったような店長の声に、ヒナはこの外面も頭の中身も軽そうな男はオーナーだったのかと驚いた。

「こちらのオーナー様でしたか。本当に申し訳ございませんでした」

ヒナはテーブルに近づくと重たいそれを気合いで起こし、カバンの中から小切手の束を取り出した。

流れるような手つきで金額を書き、名刺入れから黒の名刺を取り出して再びオーナーと呼ばれた男へ近づく。

「特殊表裏清掃株式会社の宇賀神と申します」

「なんだって？」

男は少し眉をひそめると、驚いたような声を出した。

「特掃か」

「はい。」ご存知で？」

「最近よく聞く名前だぜ？　ここいらの界限で知らねえ奴はいねえだろうな。俺も初めて見たけどよ」

軽く微笑むと、小切手と名刺をオーナーへ手渡す。

「ご迷惑をおかけしましたので、もしご依頼される場合は初回無料でさせていただきます。それと金額が足りない場合はお手数ですがこちらへご連絡下さい」

「これだけありゃ十分だ。釣りが来る」

チラツと小切手を見たオーナーは再び驚いたような声を出す。

「いや、驚いた……アンタみたいな若い人がな。秘書か。俺は竜崎だ。竜崎りゅうせき識し。ここのオーナーをやってる」

「竜崎様ですね。黒の名刺は譲渡不可となっておりますので、ご注意下さい」

「譲渡したらどうなる?」

竜崎が名刺を裏返すと、金色の箔押しでナンバーがふってあった。

恐らくこれで管理しているのだろうとぼんやり考えながら、向こう側が見えないのを分かっていてシャンデリアの明りに透かす。

「ペナルティ的な意味では特に何もありませんが、再び黒の名刺をお渡しするのに審査が必要となります」

「審査?」

ヒナの方を見れば、相変わらず貼り付けたような微笑みを浮かべていた。

「ええ。詳細はお教えできないのですが、お渡しした名刺を別の方が使用された際には、所持を放棄するかどうかのご確認のため、こ

ちらから伺わせて頂きますので、あらかじめご了承ください」

「そうか。わかった。気を付けよう」

ヒナは頭を下げると帰り支度を始めた。

「で、こいつらは」

アゴで床に倒れるボディガードを指す竜崎に、ヒナは「ああ」と面倒臭そうな声を上げると、額にかかった髪をかき上げながら眉をひそめる。

「その方達はタクシーに乗せてやって頂けますか？ 代金はそこにあります。巣鴨にある小州商事の方ですので、そちらに……重ね重ね恐縮なのですが」

「……こいつらはタクシーに乗せられる状態なのか？」

暗に生きてるのか？ と聞けば、ヒナは苦笑しながら竜崎を見た。

「ええ……今は寝ているだけです」

「………』今は、ね」

引きつった笑顔を見せる竜崎の横で、店長が小さく呻き声を上げた。

「あ、飲み代はこちらに置いておきます。それでは」

「因果な商売だな、アンタんトコも。あのオッサンの依頼を聞いたとしても、アンタ恨まれてたと思うぜ？ アンタ一体誰に感謝されたくて仕事してんだ？」

「恨むなら勝手に恨めばよろしいんです。感謝されたくてやってるわけではありませんから」

そう言うと、ヒナは夜の闇へと消えて行った。

その後ろ姿を呆然と見つめながら店長が携帯を手にすると、竜崎がその手をつかみながら笑う。

「野暮な真似すんな。掃除されなくなかったら」

その一言で店長の顔からサッと色が消える。

「今日のごとは忘れる。な？ 女共にも言っとけ」

そう言った竜崎の笑顔は、目だけ死んだ魚のような表情をしていた。

**P r o j e c t F i l e N o . 0 0 0 0 ( 前 書 き )**

**業務担当：頭の悪そうな男**

**業務内容：体液の除去と消毒**

「家内がこんなにあっけなく逝くとは思わなかったよ」

依頼人の男は寂しそうな顔で笑い、掃除道具を眺めていた。

そのすぐ横ではでかいビニールシートが風に吹かれてガサガサ音を立てる。

「死ぬなら私先だとずっと思っていた。年齢的にもね」

そう言っただきなため息を吐き、椅子を引き寄せてゆっくり座る。

「なあ、キミ、名前なんて言うんだ？」

「野暮なこと聞くんじゃないやねえよオッサン。俺らにや名前なんてねえ。ま、『頭の悪そうな男』とか呼ぶ奴もいるけどよ。正直嬉しくはねえよな？ いや、全くその通りなんだけど。俺、小学校から既に行っただねえし。それにしても本人を前にそりゃねえと思わねえか？ 正直者すぎるってのもどーかと思うんだけどな。俺は。言われた方がどんな気持ちになるか考えるってのは、小学校行ってねえ俺にだって分かる事だぜ？」

血のように濃い赤髪をワックスで立たせた頭の悪そうな男が、床に

着いた赤をこすりながら視線を上げようとせず一気に喋る。

頭の悪そうな男は、本当に気にしてるのかなと思うほどあっけらかんとしていた。

時折シュッシュと床に何かを拭きつけているが、それが洗剤の類なのか消毒の類なのか依頼人の男には判断が付かない。

ただジツとその作業を眺めているのが、なんとなく死んでしまった妻への手向けのように思われた。

「そうか……ところで金はどこに入れればいい？」

「金？ そりやお前………え？ 契約する時に聞いてねえのかよ？ 言っただけだよ。たぶん。たぶん言ってるはずだ。うん。契約したの俺じゃねえから自信はねえんだけど。口座……ヒナから口座番号とか聞いてねえのかよ。あ、ヒナって契約した女な。あの新卒っぽいダセエ恰好した奴。いや、俺は知ってるぜ？ 口座番号をさ。俺は知ってるけどよ、そうホイホイ教える訳にやいかねえんだよ。前それで面倒くせえ野郎と揉めてな。揉めたつっても何で揉め事になるんだってくらい小せえ揉め事なんだけどよ。野郎のケツの穴も小さかったって話だな。でもお前見た目良い人っぽいし教えてもいいのか？ つーかよ、大体口座番号なんて誰にいくら教えようがこっちの不利になったりするか？ しねえだろ。たぶん。そこら辺のセキユリテイー的な話は俺にや全然わかんねえんだけど。うん、マジで分かんねえ。俺じゃ判断つかねえな。待ってる。ヒナに確認するから」

頭の悪そうな男は清掃の手を止めて立ち上がると、携帯電話を操りだした。

携帯電話を耳に当ててしばらく、「あ、俺だ俺」とまぬけな声を出してどっかり床に座り込む。

「ヒナ、お前よお、オキヤクサマに口座教えたか？　なんか知らねえっぽいんだけど」

携帯電話からかすかに女の声がする気がして、依頼人の男はこっそり耳を傾けた。

「ああ？　知らねえよ。俺は契約書なんて見せて貰わねえし。いや、だってよ。仕事始めに見せて貰わなくて掃除が必要かどうかくらいは部屋にあがりや分かるぜ？　そもそも俺の担当はそういう現場しかねえじゃねえか。ま、それが決まりだっつーのはわかるけどよ、そういう余計な手間は省きてえだる普通。だって面倒くせえし。面倒くせえあまり説明すらしてねえよ。お前が作ったマニュアル意味ねえーな！　ハハハ！　いや、挨拶ぐれえはしたけどよ。『掃除屋です。お邪魔します』って」

依頼人の男は契約書と聞いて「そう言えばどこに仕舞ったかな」と思い棚を探しだした。

ようやく契約書の束を見つけ、よれよれのそれを頭の悪そうな男に渡す。

「あ、待て切るな。今、オキヤクサマから契約書貰った。どこだよ。どこに書いてあんだ？ 見たことねえから分かんねえよ。下の方？ 下の方ってどのくらい下の方だよ。コウオツつてのがやたら書いてあつて読みにくいんだよ。漢字だらけじゃねえか。難しい言い回しばつか使いやがって。カツコつけか？ え？ 数字がある所？ 数字……すう……じ……すう、あ、これか。いや、違い。これは日付だ。間違えた。あ、こつちだ。なんだ書いてあんじゃないか。おい、オツサンここに書いてあるぞ。え？ あーあー！ わーかつてるようっせえな！ オキヤクサマだろ？」

ここで人が死んだとは思えない賑やかさに、依頼人の男は思わず微笑む。

差し出された契約書を覗き込めば、確かに口座番号が書いてあった。

「ああ、本当だ。すまないね」

「全くだぜ。ちゃんと読め。書いてあるんだからよ」

本来は自分も読まないといけないのでは、と思いつながら依頼人の男はもう一度謝罪した。

自分より遙かに年下の頭の悪そうな男を見つめる。

ブツブツと文句を言いながら電話を切ると、再び床をこすり始めた。

\* \* \* \* \*

「……………」

「……………」

頭の悪そうな男は先程のお喋りが嘘の様に静かになり、1人黙々と床を磨いていた。  
依頼人の男もそれをジッと見ている。

赤がどんどん消えて行き、窓から差し込む光や吹き込むそよ風が、穏やかな時間を作りあげていた。

「本当にここで人が死んだのか分からなくなる」

「死んだから俺がいるんじゃないのかよ」

「……………そうだね」

依頼人の男は可笑しそうにクスクス笑うと、目を閉じた。

「終わったぜ。オッサン」

「実に素晴らしいね。まるで何もなかったかのようだな。さすがプロだ」

「嘘つけ。オッサンそんなこと思ってなかっただろ。俺のこと見た瞬間、『コイツで大丈夫か？』って思っただろ？ 分かんだよ。そう言うのは。そういう視線やコソコソ話してのはな、言った方思った方は相手に伝わらないと思ってんだろうけど、悪意あるモノこそ伝わってたりすんだよ。本当に伝わってほしいことはなかなか伝わらねえっつーのによ」

依頼人の男は思わず苦笑した。

「やはり次もキミに頼むとするよ」

「嫌なこった。俺は部屋の掃除は苦手なんだ。本業じゃねーし」

「これが本業じゃないのか？」

不思議そうな顔をする依頼人の男を振り返りながら睨みつけ、頭の悪そうな男はニヤリと笑った。

「俺は人間掃除の方が得意なんだ」

「キミが言つと洒落に聞こえんなあ」

冗談と受け取つた依頼人の男は、再び困つたように苦笑した。

「上司の方に伝えてくれ。』とても満足した』と」

「気が向いたらな」

「まあ、そう意地悪しないでくれ」

「気色悪いこと言うな。ただでさえ部屋の掃除は『インガナシヨウバイ』って言えねえのによお。決め台詞言えねえのに興が乗るか？ 乗らないね」

「『因果な商売』？」

「俺の本業は恨まれこそすれ感謝されるようなことは1個もねえからよ。そう言うのを『インガナシヨウバイ』って言うんだと。ヒナが言つてたんだ。なんか恰好よくねえか？ 『インガナシヨウバイ』って響き。最近気にいって使ってるんだよ。使いどころ合ってるかなんてのは分からねえけど」

「そうか……まあ、今日は本当にありがとう。最後にちょっと聞いてほしいことがあるんだけど、どうだろう？」

そう言つて時計をコンコンと指さし、人のよさそうな笑顔を向ける。

「俺は女の『最後の話』しか聞かない主義なんだよ。可愛いだろ？  
女は。去り際に『行かないで』『もつと一緒にいたい』『離れた  
くない』くるねえ〜！」

それもそうだ、と言いながら笑う依頼人の男を尻目に、頭の悪そう  
な男は家を出た。

玄関の門を超えたあたりで、ポケットの中の携帯が震えた気がして  
耳に当てれば、ヒナの声が聞こえてきた。

『終わったの？』

「おう。今終わった。疲れたぜ」

『何か言われた？』

「あ？ あー、言われたかもな。言われたきがする。』とても満足  
した』とか言ってた気がすんな」

『そう』

頭の悪そうな男は煙草に火を付けると、ため息とともに煙を吐いた。

門に寄りかかって上を向き、煙が空へとけていくのを眺める。

「……なあ、お前さー」

『じゃあ、次の依頼なんだけど』

「人使い粗すぎねえか!? 俺言ったよな? 今終ったって言ったよな? 疲れたって! 無視かよ!」

『大丈夫、今日すぐにじゃないから。次も部屋の清掃業務で、開始日は明日の午後ー』

「無視か! お前よお、俺を無視するのはお前くらいだぞ。マジでミカちゃんもカナちゃんも、セナちゃんも、ちゃんとな俺の話し聞いてくれてんだからよ!」

『貴方をご指名だから、絶対行ってね。奥様の死体とご主人の死体込みで。奥様の方はいくらか腐乱しているようだから。電気付かないし水道出ないからよろしくって言った。あと出迎え出来ないから勝手に入って来ていって』

「は!?! どこまで迷惑かける気だよ! 余計に金取れ! 搾取しろ搾取!」

『場所は ……』

ガ

タ

ン

何か倒れる音が聞こえ、頭の悪そうな男は先程まで掃除をしていた部屋の窓を眺めた。

「全く……嫌な商売だぜ。裏掃除の方がまだマシだ」

業務終了

Project File No.0001(前書き)

業務担当：良い女

業務内容：人間の清掃

「じゃあ、こっちにサインしてね。貴方が自首しない限り露見しないとは思っけど、自首した所で私は痛くもかゆくもないから、安心して」

そう言って契約書を差し出した。

それを目の前に座る女子高生がおずおずと受け取る。

ジッと眺めて、何度も何度も内容を確認しているようだった。

「あの、この担当者の名前……」

「ああ、『良い女』？ 私のことよ。」

「いや、あの……」

確かに10人中8人9人は良い女だと認めるほどのスタイルと顔立ちだ。

ワイシャツの隙間からは豊かな胸の谷間を惜しむことなく披露している。

ただ、そういうことが聞きたかったのではない女子高生は、困惑したような表情で挙動不審な動きをした。

「フッフ、冗談よ。私達ね、本名書かないの。ほら、仕事柄書いちやうと色々困るのよ。でも名前なんて識別番号みたいなものだから大丈夫よ」

何が可笑しいのか良い女はずっと笑っていた。

「それにしても貴女みたいな若い子が黒名刺持つてるなんて意外ね。社長もどこでこんな可愛い子ひっかけてきたのかしら」

「あ……あの……偶然こちらの秘書の方と街で会って……それで……」

そこまで聞いて良い女はため息を吐いた。

「あの子、貴女にご迷惑を？」

「迷惑……っっていうか……喧嘩に巻き込まれたというか……」

良い女はため息を吐きながら悪態をついた。

「あの子いつもそう。トラブルメーカーなの。でも私は迷惑かけたからって易々と黒名刺配るのはどうかと思うのよ」

そう言いながら「そう思わない？」と女子高生に話しかける。

「なんせ危険なものじゃない。持つてるだけで命狙われるなんてぞらよ?。」

女子高生は顔を青くして黒い名刺を見つめた。

「あら、ていうことは今回の依頼、無料じゃないの?。」

「あ、いえ……無料分はもう……。」

「ええ? 使ったの!?。」

良い女は幾分か驚いたような顔をした。

「あ、いやっ……! 使ったって言うか……喧嘩に巻き込まれて……それでその、終わったあとに名刺をもらったんですけど、話してるうちに人が来ちゃって。たぶん、仲間の人だと思っんですけど。」

焦ったように手を振りながら女子高生は話します。

「それで、えーっと……怖かったのでもうにかしてほしくて、無料って言うし……殺さなくていいから……その」

「どうにかしろって言ったのね」

「……はい……すみません……」

謝る女子高生に「謝らなくていいのよ」と言って額に手をあてた。

恐らくその『仲間』とやらはもう生きていないだろう。

女子高生は何も知らないようだから、先に帰したのかもしれない。

「まあいいか。じゃあ、依頼内容の復唱をするから、間違いが無いか確認してね」

「はい」

女子高生は泣きだしそうな不安げな表情をする。

それに気付かないフリをして、良い女は資料をペラペラとめくった。

「清掃対象は担任の先生。清掃方法は刺殺。要見学、ね。珍しいのね？ 普通は見たくないって人が多いんだけど」

「……」

「見張つてなくても失敗しないわよ？」

「そういう訳じゃ……！」

女子高生が焦つたように顔を上げる。

それを見て良い女はクスクス笑つた。

「依頼金は月給の4倍。36万 ……だったかしら。他に質問は？」

「……今のところ、大丈夫です」

「一括払いなんだけど、大丈夫？」

「はい、今持つてきてます」

女子高生は慌ただしく鞆を漁り、封筒を取り出した。

差し出された封筒を受け取り、手早く中を数える。

「………はい、丁度」

「………」

「後は当日またここに来てね。PM13:00だけど、学校大丈夫?」

「……はい、今、休み期間なんです」

「そうなの。良いわね。社会人になってからそう言うワクワクした休日ないものだから、すっかり忘れちゃったわ。さて、じゃあ今日はもう帰っていいわよ」

サツと書類をかき集めると、良い女は片付けを始めた。

その様子を不安げに見ながら、女子高生はモジモジ居心地が悪そうにしている。

「何か質問あった? あ、黒名刺処分する? 持ってもいいことない物ね」

そう声をかければ、びくりと肩を揺らして女子高生と目が合う。

「いえ……これは……」

「使わないけど取っておく?」

「……はい」

改めてじっくり見れば、結構可愛い子なのだ。良い女は思った。

大きな目は不安げにユラユラと揺れ、未だに何かを迷っているようだ。

「あの、本当に私が……その……」

「バレないかって？」

「……はい」

女子高生は下唇を噛んで下を向く。

「そうねえ、こちらからバレることは無いわ」

「そう……ですか……」

女子高生は小さくため息を吐くと、再び視線をあちらこちらへと彷徨わせた。

良い女が片付けを再開させても、一向に帰る気配がない。

「貴女、自分に値段を付けるとしたらいくらだと思っ？」

「え!？」

いきなり声をかけられたからか、それとも質問の内容にか。

驚いたような声をあげた女子高生は、顔を上げて良い女を見た。

「外国じゃ1000円とかで奴隷の売り買いがあるらしいのよ。今時1000円じゃハムスターも買えないんじゃない？ よく分からないけど」

「……」

「36万って安いと思う？」

「……え？」

女子高生は話の意図が分からず、困惑していた。

「貴女にとっては高いわよねえ。学生さんでしょう？」

「……それ、私が学生だから止めるって言ってるんですか」

「あら、そんなつもりではなかったのだけど」

「そうとしか聞こえません」

「それは貴女に迷いがあるからじゃないの？」

「別にないです。貴女はあの人のこと、知らないからそんな風に言えるんです」

先程まで真っ白だった顔色は、今ではすっかり血色がよくなって小さく震えていた。

悔しそうな顔で良い女を睨みつけ、小鼻を膨らませながら荒い息を吐いている。

「あの人がいなかったら、ユミだって幸せに……」

「言わなくていいわよ。興味ないもの。まして他人の恋愛事なんか聞いたってつまらないわ」

女子高生の言葉をさえぎって良い女が鼻で笑う。

さえぎられたことに腹を立てたのと戸惑いとで女子高生の怒りが爆発し、思わず立ち上がってその拍子にコーヒーをこぼした。

貴女も野暮なことに首突っ込むのね、と苦笑しながら良い女は布巾を探す。

「興味ないならそんなこと言わないで……」

「何をそんなにツンツンしてるの？ 興味なんて持つわけないじゃ

ない。だって、興味持って殺せなくなっちゃったらどうするのよ」

「!」

啞然とする女子高生に「まあ、そんなへましないけど」と可笑しそうにつぶやいた。

「因果な商売だと思わない？ 例えばいくら情熱を持って仕事をしていたても、苦労した割に全く感謝されないのよね。むしろ恨まれるっていうか。戦争が拡大すればするほど儲かる企業とかの方がまだマシよね。あれは感謝してくれる人がいるもの」

「……」

「自分から依頼してきたのに、私を恨むのよ。『何で止めてくれなかったんだ』とか『お前がそのかさなければ、たった1000千万で人を殺したりしなかった』とかね。可笑しな話だと思うのだけど、そうでもないと自分を保てないんでしょうね」

こぼれたコーヒーを拭きとりながらクスクス笑う。

「『たった1000千万』って……『たった』なんて言うくらいなら、もつと払えば良かったのになって思うんだけど。『たった』なんて思えないくらいだね。金額の下限は決まってるけど、上限は決まってるんだもの。こっちだってハイリスクローリターンなんだからくれる物は貰うわよ」

黙って聞いていた女子高生は、ゴクリと唾を飲み込んだ。

「……貴女にとって『36万』は高いのかしら？ それとも安い？」

切れ長の目はまるで獲物を狙うかのように輝きを放っていて、女子高生は視線をそらすことができなかった。

「要は何があっても私のせいにはしないでね、ってこと。あ、でも貴女に不利益になるようなことはしないけど。不利益が出たとしたら、本人のせいか別の人間のせいね。私は失敗しないわ。依頼成功率100%が売りですもの。失敗した時点でクビよ」

女子高生は、その言葉をどこか遠くで聞いていた。

「まあ、まだ時間はあるわけだし。よく考えてみなさい。人の心は移り変わりやすいように見えて、根強く何かが残ってるものなのだから」

特に女はね、という声が、やたら耳に残る……。

\* \* \* \* \*

気が付いたら、女子高生は電車に揺られていた。

いつも通学で使う路線の電車に乗って、目的の駅まであと2駅の所を走っている。

「……」

明日、PM 13:00 ……。

36万で人が一人この世から消える。

そう思うと女子高生は急に怖くなった。

「……」

もう後戻りはできないと言い聞かせ、長い溜息を吐く。

実際、件の依頼内容は実にくだらなかつた。

似たような経験がある女なら口をそろえて「女の敵」と言つてある

う人物。

それが掃除の対象だ。

簡潔に言えば『騙された恨みを晴らす』。

それも自分ではなく友人の。

ただ女子高生にとってその友人はかけがえない人物であった。

何カ月もバイトをして貯めたお金を丸ごと使ってもいいくらいに。

36万稼ぐのは大変だった。

でもその友達の為だと思つと頑張れた。

「……………」

なぜかスッキリしない気持ちを抱えたまま、女子高生は電車を降りると反対側のホームへ向かった。

\* \* \* \* \*

「こんばんは。時間通りね」

「……こんばんは」

「緊張してる？」

小さくうなずけば、子供に接するように頭を撫でられる。

他に従業員はいない。

女子高生は、そう言えば昼間もいなかったなと思った。

「今日は久しぶりに事務所でお仕事だから静かなの。私しかいないから鍵預かってきちゃった」

「……え？　じゃあ、誰が……」

「私よ」

そう言われて、思わず目を見開く。

この男に媚を売るしか能が無さそうな女があつた男を殺ると言つたのか、という考えに到り、思わず言葉に詰まってしまう。

確かに担当と言っていたが、それは仲介役としてのことだと思っていた。

「全然そんな風に見えない？」

女子高生が困ったように頷けば、ニッコリ笑って「大丈夫よ」と言  
った。

「さ、そろそろ来るからあそこに来てくれる？」

良い女が指をさしたのは大きな鏡。

横には「TOILET」と書かれた扉がある。

「入ったら分かるけど、奥にある掃除用具入れのそのまた奥がマジ  
ツクミラーになってるから。電気は付けないでね。付けるとこっち  
から部屋の中が見えちゃうの」

まるで忍者屋敷のような仕組みに思わず感嘆の声を出す。

言われた通りトイレの中に入ると、確かに掃除用具入れの奥に小さ  
な扉があった。

パツと見ただの通気口の様なそれを開けると、4畳半の狭い部屋広  
がる。

壁は窓の様になっており、そこから先程の事務所内が見渡せた。

「……」

ほどなくして、事務所のベルが鳴る。

「！」

開いたドアの向こう側には、笑みを浮かべた男が立っていた。

『いざっしやい』

薄い壁で隔てられたせいか、少しこもったような声がする。

『随分凝った趣向だね』

『休日出勤するって嘘付いちゃったの』

『じゃあここは本当にキミの勤務先かい？』

少し驚いた声を出す男に対し、良い女は恥ずかしそうに笑う。

『あまり詮索しないで』

『ああ、そうだったね……僕が上司ってことでいいのかな』

『社長……お願いしますわ』

『社長か。良いな』

そう言うと男は良い女を抱きよせ、キスをした。

『わざわざ自分の会社でやるなんて、キミはとんだ変態だな』

ニヤニヤと笑う男を見て、女子高生は怒りのあまり吐き気がした。

『最初は美人局か何かかと思ったよ。キミがあまりに………』

『社長、お喋りはそれくらいに………』

そう言って同性から見ても魅力的な笑みを浮かべると、ゆっくり男の手に自分の手を絡ませた。

『いや、でも気になるね。わざわざ社長を選ぶってことは……もしかしてこの会社の社長のことが?』

『貴方って本当に意地悪な人』

クスクス笑って軽く男の肩口を叩く。

『騙されてくれればいいのに』

『キミみたいな美人には意地悪したくなるんだ』

気持ちの悪いことを言いながら何度もキスをする2人。

まさかずっとこの馬鹿共を見なければいけないのか、と怒りで震えた瞬間、良い女が小さく声を上げた。

『あら、残念』

『何が？』

『時間だわ』

『何の ……』

言いかけた言葉が発せられることはない。

男はヒュッと息を吸い込むと、驚いた顔をした。

『おま……え……』

男はハッハッと犬のように短い呼吸をして床に座り込む。

何事かと思って女子高生が男を見れば、胸から1本のナイフが生えていた。

「ひっ………!!」

女子高生は思わず口元を押さえてへたりこむ。

『てめえ………何の真似だ』

『そついう仕事なのよ』

『ああ!?!』

『あまり時間をかけるつもりはないの』

そう言って胸のナイフを無理矢理抜き、呻き声を上げて逃げようとする男の首をかき切った。

思ったより勢いよく血が噴き出す。

心臓の鼓動に合わせて手の隙間からドクドクと溢れだす血を見て、  
一気に体温が下がるのを感じた。

「…………ツ！」

押さえた喉の奥からコポコポと胃液の上がる音がする。

女子高生は胃液をグツと飲み込むと、部屋のドアに手をかけた。

まさにその瞬間、良い女がぐるりとこちらを振り向き、まるでこちらが見えているかのように視線を合わせてきた。

『キャンセルは無しよ』

その言葉に、びくりと体が震える。

「…………あつ…………あ…………」

今まさに、部屋を飛び出そうとしていた。

飛び出して、「もういい、キャンセルだ」と言つつもりだった。

あんなに憎かった男が死ぬというのに、何故か全然嬉しくない。

『もう遅いの。キャンセルは4分前までだもの』

「そんなの聞いてない!!」

『言っていないわよ。聞かれなかったから』

こちらの声がハッキリ聞こえているかのように返答する良い女。

良い女はまるで当たり前のことを言ったかのような顔をしていた。

『契約書に書いてあるんだけど、読まなかったのかしら？ それにちゃんと考えなさいって ……』

そこまで言っつて、良い女は小さく「あら」と不快そうな顔をした。

『往生際の悪い男は嫌われるわよ』

そう呟くと、携帯を握ってボタンを押していた男の頭にガラス製の灰皿を振り下ろした。

鈍い音がして男の足が痙攣する。

女子高生は、今度こそ胃の中身をぶちまけた。

\* \* \* \* \*

新学期、1人の教師の死が生徒達に伝えられた。

ハチの巣を突いたような騒ぎに、思わず女子高生は鼻で笑う。

そう言えば、大切なあの子はどうしてるだろうと振り返った瞬間、女子高生は持っていたカバンを取り落とした。

「……」

視線の先の友人は、目を見開いて涙を流している。

小さく「嘘……何で……」と繰り返し呟く友人をみて、どこかで「何で」はこっちだと思った。

「！」

不意に、友人と目が合う。

驚愕から疑念に代わり、時折恐れたように口をパクパクさせる。

表情の変わらない女子高生を見て、その友人は核心したような顔をした。

友人の表情が、恐れから憎しみに変わる。

「……………」

何でそんな顔をするのか。

何で36万も出して人殺しになったというのに怨むのか。

「……………」

自分の中で『たった36万』から『36万も』に変わったことに気が付き、女子高生は自嘲の笑みを浮かべた。

「なるほど、因果な商売ね」

業務終了

## 第二章：依頼

「お電話ありがとうございます。特殊表裏清掃株式会社でございます」

『俺だ』

誰だ、と思いながら、ヒナは「いつもお世話になっております」と返した。

『依頼をしたい』

「ありがとうございます。どう言ったご依頼でしょうか」

『ブラックカードの方だ。詳細は店で聞きたい。できるか?』

そこまで聞いて、ようやくこの間のキャバクラと竜崎という男を思い出した。

わざわざ『ブラックカード』とぼかしてくれる辺り相手の配慮が伺えるが、店に来いと言う辺りよく分かってないのではないかと思った。

何より警視庁にでも盗聴されてたら……なんてことに頭が回る程ではなかったらしい。

でも盗聴の心配はないし、二度と外での商談はしなれなかつたにも関わらず、あそこまで露骨にやらかした店ならもういいかとも思ったりする。

「畏まりました。いつ伺えばよろしいでしょうか」

『今日は大丈夫か？』

「はい、終日あいております」

『じゃあ22時に来てくれ』

「畏まりました。22時、お店の方へ伺います」

\* \* \* \* \*

「お待ちしておりました。どうぞこちらへ」

表情と言葉が全く一致しない店長の案内で、きらびやかな道を歩く。

何十種類もの香水やら酒の臭いが混じった中を歩き、最奥のスタッフルームのそのまた奥にある部屋へと向かう。

どう見てもこの手の店に来るような格好ではないヒナを見て、客が興味ありげに視線を送ってくるのを感じた。

明かに他とは作りの違う扉をノックをすると、中から「入れ」と聞こえる。

ドアを開ければ、成金趣味の代表の様な光景が広がった。

奥に置かれたデスクの周りには、ヒナがイメージするサーバールームのような配線やらモニターやらが積みまれている。

恐らくこれで店内の監視をしているのだろう。

ヒナが初めて来た時も観ていたに違いない。

「わざわざ悪かったな」

「いえ、構いません」

椅子に勧められるまま腰掛けると、ウイスキーの瓶を持って竜崎が向かいに座った。

「電話でも言ったが黒名刺とやらを使いたくてな。飲むか？」

「いえ、仕事中ですので」

そうか、というと竜崎は瓶を棚に戻す。

「何か特別なことをしなきゃいけないのかな？ なんせこつ言つのは初めてで」

「基本的には契約書にお名前を書いて頂くだけです。あとは指定日や清掃方法のご希望があればそちらにそって仕事致します」

「なるほどな」

竜崎はヒナが取り出した契約書をしばらく眺めると、アゴを撫でながらソファに深く腰かけなおした。

「月給の4倍か。いくらだ？ よく分からねえから切りあげ勘定でいいか？」

そう言いながら源泉徴収票を引っ張り出して来て、電卓片手に計算を始めた。

「あ！ 申し訳ございません、契約書を間違えました……竜崎様は初回無料となっておりますので、こちらの契約書になります」

慌ててヒナが契約書を差し替えると、竜崎は再びサツと目を通した。

「無料？」

「はい、今回はご迷惑をおかけしたということですので……」

「ああ、そんなようなこと言ってたな……別に気にしねえでもいいんだけど」

「いえ、こればかりは」

「そうか、真面目だな。こんな仕事してる割に」

竜崎の歯に衣着せぬ物言いに思わず苦笑が漏れる。

「じゃあ日程は1週間以内。いつでもいい。殺り方は任せる。時間はPM13:00」

ヒナはメモを取りながら短く返事をした。

「ターゲットは『俺』だ」

\* \* \* \* \*

カタカタとキーボードで情報を打ち込みながら、ヒナはいつ竜崎を殺しに行こうか考えていた。

( 1週間の内いつでもいいと言ってもねえ…… )

『俺はアンタがいつ来るか、大体分かるぜ』

そう言って竜崎はニヤニヤ笑う。

カレンダーを見た瞬間この日しかないと思っていたヒナは、思わず眉をしかめた。

「なんだか腹立たしいけど……」

思いつつぼになってしまつのだろうか、この日以外に仕事をする気にはならなかった。

『俺はアンタの会社の従業員がどのくらい凄いか見てえんだ』

そう言った竜崎は、心底可笑しそうに笑った。

例え死ぬことになってもかと思えば、死ぬわけではないと自信満々に答える。

店のボディーガードは一流の男達だし、自分も喧嘩は強い方だと。

人知を超えた力でもない限り、返り討ちにしてやると笑った。

「自惚れで溺れなければ良いのだけど」

なんだったら店の見取り図を持たせようか、という竜崎に丁寧に断りを入れて帰って来た次第だ。

誰が行くかは特に指定されなかった。

男がいいのか、女がいいのか、若い方がいいのか、年を取っていた方がいいのか。

よくは分からないが、どうせ驚かされるのであれば度肝を抜かれるくらいの方がいいのだろう。

「自分の命を賭けて楽しむなんて、どうかしてる」

まして死が確定した遊びだ。

竜崎は依頼達成度100%を売りにしていることに気付いているのだろうか。

「しょうがない人」

ヒナは成金の楽しみは一生理解できない、と小さくため息を吐いた。

\* \* \* \* \*

週末。

店はいつもの賑わいを見せていた。

「オーナー……その、本当に今日なんですか……？ 明日かもしれ  
ませんよ」

「いや、今日来るだろ。なんてたって13日の金曜日だからな」

店長は意味が分からないと言った表情で竜崎を見つめた。

「契約書見たか？ 4とか13とか。『ごっこ遊び』みてえな設定にこだわってやがる。本気でやってんのか遊びなのか……因果な商売やってる人間ってのは考えることが俺らとは違うのかね」

楽しそうに笑う竜崎を、店長は奇特な人間を見るような目で見ていた。

「あと10分か。お前はこっから出てる」

巻き添え喰らいたくなかったらな、という言葉に、店長は顔を青くして部屋を出て行った。

扉が閉まるのを確認してからモニターに視線を移す。

モニターには店のあらゆる場所が映しだされており、1人1人の顔まで分かるようになっていた。

竜崎が初めてヒナを見たのも、このモニター越しだった。

問題を起こした時にわざわざ出向いたのは、女1人相手に男達が動揺していたように見えたから。

どれ様子でも見に行くかと重い腰を上げてVIPルームまで行けば、

ちよつと廊下を移動するくらいの短い間に何があったんだ、と言いたくなるほどの展開が待受けていた。

「あ、三山の野郎。手出してやがる」

インカムで「おい」と呼びかければ、イヤホンから返答が返ってくる。

「三山、裏連れてけ。出禁だ」

短い返答の後、しばらくしてモニターに引きずられていく青い顔をした三山が映った。

それを見ながら鼻で笑い、ウイスキーを一気にあおる。

「おい、誰か来たか」

インカムを通して聞けば「否」の返答が返ってくる。

「そうか、それっぽいのが来たら教えろ」

「ただ今参りましたが」

一瞬心臓が大きく鼓動し、あっという間に体が熱を持つ。

そして急速に体温が下がる頃には、手が小さく震えていた。

うるさく言葉を発し続けるインカムに「何でもない」と返答を返してインカムとモニターの電源を全て落とす。

それと同時に辺りに静寂が落ちた。

扉の向こうからかすかに店内の音が聞こえてくるが、それも段々聞こえなくなっていく。

モニターには何を考えてるのか分からないヒナの顔が映っている。

首にはいつの間にかサバイバルナイフが押しつけられていて、もう少し力を加えれば血が出るくらいに押し付けられていた。

何故こんなに静かなんだろう、とどこか冷静に違和感の正体を探ろうとしながら、竜崎はヒナへ声をかけた。

「驚いた。いつ来たんだ？」

「先程」

「そうか……いや、驚いた。アンタも掃除するのか」

「ええ」

「他の……他で殺る前にもこんな風に呑気に喋るのか？」

そう言いながら、竜崎はテーブルの下で折りたたみナイフを握りしめた。

「いえ、声をかける前に終らせませす。たまに声をかける時もありませす、反撃される前までには終りますので」

「……そうか……じゃあ今日は？」

「はい、今日は『ご迷惑をおかけした』ということで、依頼開始時間過ぎておりますが最後の確認をサービスすることに致しました」

「アンタ本当に律儀だな。律儀すぎて重いぞ」

引きつった顔で笑えば、「申し訳ございません」と困ったような顔がモニターに映った。

「ご依頼をキャンセルされますか？」

竜崎は、なんとなくこの糞真面目な女に冗談は通じないのではない

だろうか、という気がした。

例えば、「いや、しなくていい……と言いたいところだがキャンセルしてくれ」なんてお決まりの冗談を言い切る前に首が切られているだろう。

「……キャンセルしてくれ」

「畏まりました」

首からサバイバルナイフが外される。

それと同時に、引いていた汗がドッと噴き出した。

「舐めてたな」

ポソツと呟いた言葉を聞いて、ヒナは可笑しそうに笑った。

そこでようやく周りの音が戻ったことに気付く。

扉の向こうからは、楽しそうな笑い声が聞こえてきた。

そして、激しくドアを叩く音がする。

それを聞きながら、竜崎はもう一つの違和感に気付いた。

「……なあ、アンタどこから入って来たんだ」

自分の発した言葉に、竜崎は再び肝が冷える思いをした。

出入り口は1つしかない。

窓も無く、換気扇も人が通れる幅ではない。

この女は、一体どこから入って来たのだろうか。

「入口から」

誰が聞いても嘘だと分かる返答に、思わず笑ってしまう。

「入口から来たならガキでも気付く」

依然ドアは激しく叩かれている。

そのドアを見つめながら、未だスッキリしない思いを抱いていた。

一体その正体は何なのか……。

見極める為にヒナを見つめる。

「アンタ、何者だ？」

「清掃会社の秘書ですが……」

「俺はアンタがいきなり現れたように見えたんだけどな。本当にドアから来たか？」

ドアノブに手をかけて、ヒナは困ったように微笑んだ。

「本当ですよ。見逃したのでは？」

解錠してドアを開ければ、流れ込むように屈強な男達が入って来た。

誰しもがヒナと竜崎を困惑した表情で見つめる。

「それでは、失礼致します」

綺麗なお辞儀をして、ヒナは部屋を出て行った。

真っ青な顔でヒナを見つめる店長を見ながら、竜崎は天を仰いで苦笑する。

「ああ、そうか……なるほどな。全く、今日はびじつかじじい  
…

Project File No.0002(前書き)

業務担当:じーさん

業務内容:部屋の清掃

「おい、じーさん。こっち先にやってくれよ」

「へい、分かりやした!」

「……なあ、何も俺の誕生日に死ぬことねえと思わねえか?」

煙草を吸いながら、チンピラの依頼人は涙目で風呂場の染みを見つめる。

「そうですねえ」

「何が『私がいなくなってお金がかからないのが何よりのプレゼント』だよなあ」

「……」

「誰が『テメエのせいで苦労してる』なんて思ってるつったんだっつーんだよなあ」

チンピラの依頼人はそう言いながら言葉を詰まらせ、ウツウツと唸りだした。

「何のために俺がこんなチンピラみたいな真似してると思ってんだ」

よなめ

「……」

「何のために苦労してお金稼いでると思ってんだよ……」

「……」

「俺、馬鹿でこんなことしかできねえから……色々心配させたんだろっけど……」

「……」

「いつもボケてるくせに最後まで意識ハッキリさせやがってよお……」

「……」

「『帰ってくる前に済ませようと思ったんだけど』じゃねえーっつの……ふざけんなよ……苦しくてのたうちまわって部屋中汚しといてよく言っぜ……」

「……」

「なあ、じーさん聞いてねえだろ？ つまんねえと、女々しい野郎だなと思っただろ」

じーさんは苦笑しながら「ちゃんと聞いてやすぜ」と答えた。

「こんな時に限ってかーちゃんのお飯が食いたくなるんだからよお。つたく……参るよなあ……ホント」

チンピラの依頼人は鼻をズツとすすると、天を仰ぎ見た。

「……辛かったのかなあ」

「いや、幸せだったんじゃないですかね」

「……なんでそう思うんだよ」

風呂場にはシュツシュツとタイルを磨く音が響く。

しばらくその音を聞いていると、ようやくじーさんが口を開いた。

「……写真」

「あ？」

「写真が部屋中に散らばっていやしたからね」

「……だからなんだよ」

「あれ、アルバムから抜いたんじゃないやねえんですかい？」

振り向いて困ったように微笑みかければ、チンピラは呆けたような顔でこちらを見ていた。

「死ぬ間際にアルバムに残す程の思い出に浸るぐれえですからね」

幸せだったんだと思いやすよ、と言えば不良はポカンとしながら鼻をヒクヒクさせ、どんどん顔がくしゃくしゃになっていった。

「俺はよぉ〜……俺は……男だから……馬鹿だから、そんなの直接言われねえとわかんねえっつーんだよなあ……」

「……………」

「なのに何で同じ男で他人のあんたが分かんだよ……………」

「すいやせん」

困ったようにじーさんが笑えば、チンピラの依頼人は声を押し殺して泣きだす。

「他に選択肢なかったのかよぉ……………」

「……………」

それからしばらく、風呂場には男のウツウツという声が響いた。

\* \* \* \* \*

「悪かったな、じーさん。時間延長しちゃってよお」

「いえ、構いやせん」

「これ、飯代」

「ありやりや！ そりゃいけませんぜ旦那！」

「いーから取っとけて」

「いや、でも……」

「いーからいーから！ 俺が良いつつてんだ！ 気が変わる前に持つてけよ」

「……じゃあ」

困ったように笑いながら受け取り、帽子を取って礼をする。

「まー、またなんかあったらじーさんと」に頼むよ」

「へえ、ありがとございやす」

「……」つちこそ、ありがとつな」

そう言われ、じーさんは少し驚いたような顔をした。

「……何だよ。俺だって礼くらい言えるぜ？　　うちは賤だけはしっかりしてんだ」

「あゝいえ、そうじゃなくて……因果な商売なのにな、と思いやしてね」

「インガ？」

「ええ、あつしらの商売は恨まれこそすれ、ほとんど感謝されねえもんですから。旦那も似たような仕事やってるんでございやしやう？」

「は？　　じーさん達はただの掃除屋だろ？　　俺は恨まれる仕事しかしてねえよ」

「そうでございやすか。いやね、あつしも部屋の清掃の時はまだ感謝される時もありやすけど、他は恨み事しか言われませぬぜ。こんな心のこもった礼は久しぶりでさあ」

「は？ 何だよそれ」

チンピラの依頼人は照れたように鼻の頭をかくと、「さっさと行け」と言っつて犬を追い払うかのような仕草をした。

「じゃあ、また何かあればよろしくお願いしやす」

「はいはい」

そう言っつて男はじーさんを見ようとせせず、に玄関の扉を閉めた。

「いやいやいや、せつかく良い面もあるっつのに。ホント残念な話ですわな。お互い因果な商売だもんで、これもしょうがねえっつてことですかい」

そう言いながら呼び鈴を鳴らす。

はいはいはい、と言いながらチンピラの男が玄関を開け、訝しげな顔をした。

「なんだ、じーさん。忘れものか？」

「いえ、次の依頼でございやす」

業務終了

Project File No.0003(前書き)

業務担当：おばちゃん

業務内容：腐敗物の除去と消毒、および害虫駆除

「この清掃、あたしにして正解よ！ こういうのはおばちゃんに任せた方がいいんだから！ 大体最近の若い子はこういうのやりたがらないから、清掃会社の方も仕事なのに適当にやっちゃうのよね！」

「……」

先程からよく喋るおばちゃん清掃員に対し、風俗嬢は丁度「この人は失敗なのでは」と思っていたところだった。

部屋の中は見たくもないので、清掃している間はどこか喫茶店にでも行って時間を潰そうと思っていたのに、おばちゃんがしつこく「ここにいる」と言うので玄関で座り込んでいた所だ。

「それにしても何でこんな部屋中で腐ってるのかしら。貴女ね、職業柄家に帰ってこれない日が多いって言ったって、食材を冷蔵庫に入れないなんて残念過ぎるわよ？ どうやったたら食材を冷蔵庫の外に起き忘れるって言うのよ。おばちゃんじゃあるまいし。おばちゃんだってその日の夜には思い出すわよ」

「……」

「冷蔵庫からも汁が漏れてるし……扉が閉まったのくらい確認すれば汁までは出なかったかもしれないのに」

「……………」

風俗嬢は何を言われても何も答えなかった。

部屋の中には野菜クズやら食べ物が入っていたと思われるビニール袋が散乱し、所々生肉の腐ったような物がこびり付いている。

「元凶の鍋は捨てちゃっていいわね？ あの冷蔵庫に入りきらないで扉が閉まるのを邪魔してた例の鍋！ あれ一々消毒するくらいなら、捨てて新しいの買った方が絶対いいわよ！ 凄い臭いがしたものだ」

おばちゃんはどうせ返事が返って来ないと思っっているのか、風俗嬢の返事を待たずに鍋を袋の中へ押し込んだ。

風俗嬢は相変わらず何も答えない。

おばちゃんは「あら！」とか「まあ！」とか言いながら時折出没するゴキブリを叩き殺していた。

「さて、腐ったのは全部捨てたし……次は害虫駆除かしら？ なんか本当は色々順番があるらしいんだけど、私は私のやり方でやるわ。だってこれ以上虫と同じ部屋にいたくないもの。仕事と言っても好きなわけじゃないのよ？ あゝそれにしてもこれは1日ばかりで終るか微妙なところね！ 2部屋もあるんだもの！ まあ、依頼だから終らせるしかないけど」

そう言いながら次々殺虫剤をまき始めた。

両手をバタバタさせながら振りまく様子を見ながら、風俗嬢は「あれなら自分でもできるのではないか」と思う。

その様子を見ながら、何となく、おばちゃんは気付いているのではないかと思った。

「ねえ、おばちゃん」

「なあに？ 貴女初めて喋ったわね」

「あの腐ってたの、何か知ってる？ 部屋中に落ちてたやつ」

「人じゃないの？」

食材だと説明したにも関わらず、あまりにも普通に言っておばちゃんに、風俗嬢は思わず苦笑した。

「警察に言わないの？」

「いやよ、面倒臭い。どうして私が尻拭いしないといけないのよ。私、面倒臭いの嫌いなよ。貴女、おばちゃんがみんな話好きの噂好きだと思ったら大間違いよ！ 近所の山城さんなんてね、そのままご近所のご主人が浮気してる話しかしないんだけど、周りで聞いている人はそんなに興味ないのよ！ 興味があるふりをしてるだけな

の。何が楽しくて人の浮気話なんて聞かなきゃならないのよねえ。そんなの付き合いに決まってるじゃない。そうでしょ?」

とても話嫌いには見えないおばちゃんを見ながら、風俗嬢は自分の母親もこうだったなと思い出していた。

「じゃあ私の話も聞いてくれない?」

「聞いてもいいわよ。仕事しながらになっちゃうけど。なんせやることが多いのよ!」

風俗嬢は「あゝ忙しい!」と言いながら、どう見ても下手糞なダンスにしか見えない手つきで両手を振り回すおばちゃんを見て、少しだけ笑った。

「2週間くらい前に生まれてさあ。誰の子か知らないけど」

「でしようねえ。あ、嫌味じゃないのよ」

相槌が返ってくるとは思ってなかったなので、結局真面目に聞いてくれるらしいおばちゃんを見て再び少し笑う。

「トイレで……いつもの便秘だと思ったんだよねえ。どうしたらいいか分からなくて、ずっと見てたら動かなくなつて。汚いから手を

入れたくなかったんだけど、バレると困るし」

「そうでしょうねえ。次にトイレ使う人が気付いちゃうもの。ここ共同トイレでしょう？ 今時珍しいわよねえ」

風俗嬢は普通のおばちゃんとはかけ離れた反応をする目の前のおばちゃんを見ながら、何か言いしれぬ恐怖を感じた。

「しょうがないからゴム手で拾って家に持って帰って……それから、ウンチみたいなのも付いてたからお風呂でちよっと洗って……普通に捨てたらバレちゃうでしょ？ たまにニユースでやってるし。だから、どうやって処分しようか凄く考えてさ」

「まあ、バレるわよねえ」

「それで、バラバラにしようと思って」

「まあ！」

その「まあ！」がやたらしらじらしく思えて、風俗嬢は再び苦笑する。

「意外と包丁が使えないこととか、鋸の方が使えることとか、無駄な知識ばかりついちゃって」

「そーなのぉ〜」

「で、肉って腐るでしょ？」

「そりゃ腐るわよ。生物だもの」

「だから火を入れればいいと思っただけど……」

おばちゃんは初めて不愉快そうな顔をした。

「貴女ね、どうやったらそういう思考になるのよ。火を入れたって腐るものは腐るのよ。冷凍ならまだしも……」

そういう問題ではないだろうに、おばちゃんは大まじめにそう返す。

もしかしたら、この話を冗談だと思っているのかもしれないと思った。

そう思うと、全て知っているように見せといて、実は何も知らないようにも見えてきた。

「それで、よく分からないから煮込んだんだよね」

「出汁を取ったのね」

不謹慎なのにその言い方が何故か面白く思えて、風俗嬢は声を上げ

て笑った。

「そう……それで……意外と思ってたよりは臭くなかったんだけど、でも煮込んでも食べる訳にはいかないから、どうしたらいいかわからなくなつてさ。冷蔵庫入れたんだけどサイズでかくて蓋開いちゃつたみたいだし。放置してる間にこんなことになつちゃつて」

「そうなの〜」

それつきりおばちゃんは何も言わなくなつた。

風俗嬢も口を開かない。

\* \* \* \* \*

どのくらい経つたか。

空が不気味な赤に染まり出す頃、おばちゃんは急に口を開いた。

「こんな何の取り柄も無さそうなあたしにもね、ちょっと自慢できることがあるのよ」

風俗嬢が思わず顔を上げれば、おばちゃんは本当に自慢げな顔でこちらを見ている。

「あたしね、霊が見えるの」

「霊……」

非現実的な言葉に思わず白けた笑いを浮かべる。

別に自慢できるような話ではない気がするが、当の本人が自慢げなので何も言わないことにした。

話がいささか突飛ではあるが、おばちゃんなりに気を使ってくれたのかもしれない。

「信じなくていいのよ？ 見える物は見えるんだから、他の人が信じなくて一緒にいるのよ」

「ふーん」

そう言うとおばちゃんは再びシューシューと何か霧状の物を振りま

く。  
今度は片手だったので先程の下手糞なダンスのように手は振っていなかったが、腰が思い切り揺れていてやっぱり下手糞なダンスにし

か思えなかった。

「小さい頃から見えるのよ。なんでか知らないんだけどね。まあ、怖かったわあ！ 怖いのに母も父も全然信じてくれないのよね！一緒に寝てくれって言っても駄目なのよ！」

そりゃさぞかし怖かったことだろう、と風俗嬢は笑った。

ただでさえ子供の頃は怖い物に関して敏感なのだから。

本当に見えたら嫌だなといつも思っていたのを思い出していた。

「貴女、幽霊ってどんな感じで見えると思う？」

「……さあ」

「大抵の人は血とか内臓とか出てると思うじゃない？ 違うのよ。生きてる人間と変わらないの。ただちょっと血色が悪い気がする時があつてね。そう言う人は大体見てすぐ分かるのよ。それに挙動が……こう、なんとなく『ああ、この人生きてないんだな』って感じ？ ああ、でも中には血とか内臓も出てる人だっているんだけど。そのおかげでグロテスクなものに慣れたのね、きつと」

どういふ感じかいまいちピンと来ない風俗嬢は、曖昧に頷いた。

「それにね、本人も死んだことに気付いてない場合があるのよねえ……あれって不思議だと思わない？ 自分が死んだ瞬間を忘れてしまってるみたいなの。記憶が混在して、『こうに違いない』って固定概念を持つてるものだから気付かないのかしら。何かのきっかけで思い出した時はショックでしょうねえ。死んだことは分かるけど、どうして死んだかは分からないって人もいるんでしょうし」

本当に哀れそうに言う物だから、風俗嬢は思わず笑ってしまった。

「……おばちゃんはそう言う人を見てどうするの？」

「どうもしないわよ！ 面倒なことは嫌いだもの」

アツハツハツハと大笑いをするおばちゃんを見て、この人、相当な大物なのではないか、と風俗嬢は思った。

「でも一番可哀想なのは気付いてるけど気付いてないフリしてる人よねえ……」

「……」

急に悲しそうな顔で笑うおばちゃんを見ながら、風俗嬢は思わず口をつぐんだ。

「私の母もね、気付いてるのに気付かないフリする人だったのよ。葬儀の後に意識が戻った……っていうのも変だけど、気が付いたらしくて。母には仏壇が見えてなかったみたいね。本当は見えてたのかもしれないけど。まあ、それで自分の旦那も息子も自分を無視するでしょう？　と云っても、父も兄も見えてないから無視も何もないんだけど。でも娘だけ話しかけるものだから、『まだ自分は生きているんだ』『この家には私が必要だ』『私が死んだら誰がみんなの世話をするんだ』って思うのよねえ。死んでから初めて自分の娘が幽霊を見るってことを分からされるなんて、思いもしないわよ。普通」

おばちゃんは手を止める事なくシューシューと壁や床に薬剤を拭きつけてはふき取っていた。

「『家中の家電が動かないし、みんな私を無視するの』なんて言われた日にはどうしようかと思っただわよ」

そう言っただ再びアハハと大笑いをする。

「どっやって認めさせたの？」

「どっやって……そうねえ……認めさせたって言うより、認めたのよね。きつと。話をしてるうちにね、『ああ、無理だな』って思ったんですって。『もう死んでしまったんだな』って」

おばちゃんは「幽霊も涙出るのねえ」なんて言いながら薬剤を吹き

つけている。

「さて、これでいいかしら！ どうっ？」

「……」

あれほど部屋中にあった染みは、すっかり薄くなっていた。

「……良いと思う。全部消える訳じゃないんだ」

「そりゃそうよ。木にしみ込んだものまでは落ちないもの。でも、夜中までかからなくてよかったわ」

風俗嬢はおばちゃんを眺めていて、先程言われた言葉を何となく理解した。

「おばちゃん」

「なあに？」

「最初から嘘だって気付いてたんでしょ」

「まあね。そりゃ分かるわよ」

「自分からは言わないの？」

「言わないわよ〜！ 色々と面倒臭いもの！」

なんとなくこつちが騙されてた気がして、風俗嬢は苦笑した。

「じゃ、これでー！」

「うん、ありがと」

「はい、どういたしまして。お互い因果な商売だけど頑張るのよ。じゃあね」

おばちゃんが玄関を出たのを見届けて、風俗嬢は窓際のテーブルの前に崩れるようにして座り込んだ。

玄関の扉が閉まると同時に、いつの間にか来ていた大家の声が辺りに響く。

「いや〜こりや凄い！ 臭いがしませんね！ さっき来て部屋の中から漏れてた汁の染みがどうなったかな〜って確認してたんですけど……ほら、パツと見目立ってたじゃないですか、あの染み。でも綺麗さっぱりだ！ こりや部屋の中也期待できますねえ」

「そう？ でもあまり落ちなかったのよ。あれが限界だから、気に入らないなら後は壁紙張り替えるなり板を張り直すなりって感じになると思っただけ。契約は掃除と消毒と消臭だけだからやってな

いのよ」

「いやいや、正直ここまで綺麗になるとは思わなかったもので、たいしたもんですよ！ 遅くまでありがとうございます」

「いいえ」

愛想笑いでおばちゃんと言えば、大家は嬉しそうに笑った。

「あ、そうそう！ これ！」

大家が懐から分厚い封筒を取り出し、おばちゃんに手渡す。

「ご飯代、と言うことで。お連れ様にもお渡し下さい」

「あら悪いわねえ。でもこんな沢山貰わなくても守秘義務くらい守るんだけど」

「いえ、そう言うつもりでは！ 頑張つて頂いてますし。猫と云えど、あんなにたくさん死骸気持ち悪かったでしょう？ バラバラになっちゃってましたけど。野良猫が何匹か入りこんじゃったみたいでねえ……前の住人がそのまま出て行っちゃったものだから、冷蔵庫の中身を猫が引つ張り出してあちこち散乱させたみたいなんですよ。部屋中食べカスだらけで大変ですわ。冷蔵庫の中身がなくなつて共食いでもしたんでしょうか、猫達。あちこちに落ちてましたよね、肉片が。ウジとかゴキブリまで湧いちゃって酷いもんですよ。」

まあ、風俗勤めが住んでる時点で、なーんかやらかしそうな気がしてたんですけどねえ。せめて窓さえ閉めてれば猫も入って来れなかったんじゃないかなと思うんですけどねえ。中で猫が死んでるなんて思わないでしょう？ 普通」

「そうなの。随分お転婆な猫なのね」

「ええ、おかげで猫の死骸を見る羽目になっちゃいました。もうしばらく猫は見たくもありませんよ。猫の死骸なんて結構大きいじゃないですか。まあ、パツと見だから犬だったかもしれないですけど、猫ですよ。あの大きさは。私はよく見てないので分からないのですけど。なんせ部屋開けた時点で相当臭いましたからね、パツと見て『ヤバイな！』と思っただんで玄関まで入ってすぐ出ちゃいましたよ」

アハハとおばちゃんを見つめながら笑う大家を尻目に、おばちゃんは玄関を指さす。

「鍵、かけちゃっていいわよ」

「え？ でもまだお連れ様がいらっしやるのでは？」

「いないから大丈夫よ」

「はあ……あ、お疲れ様です」

大家は不思議そうな顔をしながら、中を軽く見て電気を消し、鍵を

かけた。

業務終了

### 第三章：魅了

「……」

竜崎はその人影を見かけて何をしているのか理解した瞬間から、どんな綺麗な女を抱いている時より、どんな喧嘩をしている時より自分の心臓が激しく鼓動するのを感じていた。

「……」

目の前にいるヒナは迷うことなくへたり込んだ男の頭にビール瓶を叩きつける。

ドラマなんかで見るように綺麗に割れず、何度も何度も頭に叩きつけていた。

「……」

初めこそ「ウツ」と声がしていたものの、今では声を発する事もなく為すがままになっていた。

ようやく瓶が割れた所で、もう1人の男の手にそれを持たせる。

しゃがんで顔を覗き込み、何かをブツブツ呟きながら男の顔を触っ

ていた。

「もう、やめてくれ……」

「いえ、そういうわけには」

そう言うと容赦なく胸元の傷口をつかんだ。

そのせいで血が噴き出し、男は人間とは思えない声を出して痙攣する。

やがて痙攣もおさまり、辺りには静寂が訪れた。

その男のポケットから折り畳みナイフを見つけると、刃を出して3人目の男を見つめた。

「……ひっ!？」

1人だけ無傷でピクリとも動かずにいたものだから、初めは竜崎も人がいるとは思わなかった。

恐らく男自身もまさかバレるとは思っていなかったはずだ。

「貴方、この方のご友人ですよね？ 佐々木様ですか？」

「……あ、う……うっ……」

しゃがみこんでその男の顔を覗き込むヒナは、いつも通りの営業スマイルを浮かべた。

「では、残念ですが」

そう言っつてスツと後ろに回り込むと、撫でるかのように手を滑らせる。

その瞬間、「うぐえっ」と何とも言えない声が発せられ、男の首から血しぶきがあがった。

男は口から血の泡を吹き、喉元を必死に押さえて地面に倒れる。

顔中どころか体中を血で汚したまま、ヒナが竜崎の方を振り向いた。

「！」

その姿を見た瞬間、竜崎の興奮は最高潮に達していた。

「この方たち以外には誰もいないと思ったのですが」

月明かりに照らされて光るヒナ。

「竜崎様でしたか」

まるで世界が赤以外の色を忘れてしまったかのような感覚におちいる。

「おかしいですね。ここには……うツ!？」

歩み寄ろうとして来たヒナの足が止まり、かすかに頬を赤くして視線をそらした。

「ネクロフィリアだったんですか……そう言う……その、差別的な物はないのですが……見せつけられても困ります」

「は？ え、あ……いや……そういう訳じゃねえんだけど」

物凄い勘違いをされたのと、何故か勃ってしまった所を見られたのとで急に恥ずかしくなり、思わず視線をそらす。

「なぜここに？」

「店の裏だからだ」

「ああ、そう言えば……あ、いえ、そう言うことじゃなくてですね」  
チラツチラツと視線を送っては外すヒナを見て可笑しくなり、たった今日の前で起こったことがまるで嘘だったかのような落ちついた気持ちになる。

「人払いをしてたのですが」

「したつつつても俺の店の裏だからよ」

「いや、そうなんですけどそうじゃなくて……とうかせめて隠すなりなんなりしてくれませんか……一応妙齡の女性の前なのですが」

「いや、アンタみてたら興奮しちゃまって。血も滴るイイ女？」

「やめて下さい。セクハ……もういいです……」

深いため息をついてヒナは踵を返す。

「始末しなくていいのか？」

「ええ」

「いや、あいつらの死体じゃなくて『俺』」

ヒナはくるっと振り向いて竜崎を見つめた。

「殺してほしいのですか？ マゾヒスト？」

「いや、どっちかと言うとサディストだ。このままオッサンと遊ぶか？」

ヒナはヒクッと顔を引きつらせ、小さく唸った。

「……………とにかくもういいんです」

「なんだ、ノリ悪いな。自分で聞いたくせに」

「まだそついうのにホイホイ返せる年齢ではないんです」

「そつか、悪かったな。オッサンで」

再び沈黙が落ち、ヒナが「では」と帰りかけた瞬間、竜崎は小さく吹き出した。

「アンタ今すげえ顔してる」

「でしょうね」

即答で返したヒナに、竜崎はいよいよ笑いだした。

「いやっ……いや、マジで……いや〜アハハハ！」

「……………帰っていいですか」

「……………プスッ……………ウハハハ！！ いや、ああ……………どうぞ……………ハハハハ！」

「……………」

「何だよその顔」

「……………いえ、別に……………さようなら」

物凄く不機嫌そうな表情を隠す事もせず、ヒナは足を踏み鳴らして歩き出した。

「いやいやいや！ アンタにも感情ってのがあるんだなあ」

「あるに決まってるじゃないですか」

律儀に立ち止まって返事を返すヒナを笑う竜崎。

再び憤慨してヒナは歩きだす。

「いや〜……マジで可愛いな、アンタ」

「……」

その言葉にヒナの歩みがピタリと止まった。

竜崎の方を向く気配はないが、動揺しているのが丸分かりだ。

「ま、イイ女には程遠いけどな。将来が楽しみだ」

「馬鹿にしていますよね」

「いや、気に入ったのは本当だ。アンタ見て勃ったのも」

そこまで行って勢いよく振り向いたヒナに、竜崎は満足げに口の端で笑った。

「睡付けとかなきゃなあ？」

「……迷惑です」

「知るかよ」

「……嫌な人」

「前から気になってたんだ。色々とな」

そう言えば、ヒナはスツと表情を消した。

「どういう意味ですか」

「いや、いろーんな意味で。つつても最初は違う意味だったけどな」

「……………」

「俺はこう言うの信じねえ性質だったんだけど……………まー、実際目にするに分からねえもんだな」

「……………あの、よく分からないのですが」

「アンタよお……………本当に人間なのか？」

「……………え？ はあ、まあ、ご覧の通り人間ですが……………」

ヒナが不意を突かれたようなキョトンとした表情になる。

「アンタと会つと、なんか妙に周りが静かになる気がするんだけどなあ」

ヒナは分からないと言った風に首をかしげる。

「……………気になるな」

「……………はあ……………私は別に気になりませんが……………」

「いやな？ この間うちの従業員と『因果な商売やってる奴は毛色が違うに違いない』って話をしてたんだ。アンタのことなんだけど。的を得てると思わねえか？」

そう言うと、竜崎はニヤツと笑って踵を返した。

「気を付けて帰んな」

ヒナの方を見ずに手だけふると、竜崎は店の中へ入って行った。

その後ろ姿を見ながら、ヒナはいつまでも無表情で竜崎の消えていったドアを見つめる。

Project File No. 0004 (前書き)

業務担当：今時の男

業務内容：神経質そうな女の掃除

「あ、どうも〜！ 特殊表裏清掃株式会社っスー」

買い物に行こうとドアを開けた神経質そうな女は、丁度玄関の呼び鈴を押そうとしていた今時の男見て驚いた顔をしながら、「頼んでないわよ！」と怒鳴ると開けたドアを閉めようとした。

「ちよっちよっちよっちよ……！！ 島田様ですよね！？ 島田雅子様っ！ 依頼があつたんスよ〜」

「だから頼んでないって言ってるでしょ！？ その足を外しなさい！！ 扉が閉められないでしょう！？ 警察呼ぶわよ！」

そうヒステリックに怒鳴りながら、神経質そうな女は今時の男の足を蹴っていた。

「痛ててて！ 痛て！ いや、確かに！ 確かにご依頼が！」

そう言って、神経質そうな女に顔をグイッと近づけた。

「神成様から」

真顔でそう言えば、神経質そうな女は目をこぼれ落ちそうなほど見開いて静かになった。

「……本当にいたのね……殺し屋って……冗談かと思って『呼ぶなら呼べ』って言っちゃったじゃない……」

「ありやりや、そりや残念でしたねえ……でも殺し屋じゃなくて清掃業なんスよ」

「一緒よ！ どっちでも!!」

神経質そうな女はハア〜と大きなため息を吐くと、ズルズルと床に座り込んで頭を抱え込んだ。

「あたしに何の恨みがあるってのよ……いや、あるか……」

「まあ、こっちも仕事なんで」

そう言って伸ばした手を、神経質そうな女は思い切り叩いて叫んだ。

「ちょっと待って！ 待ちなさい！」

「ええ！？ な、なんスか？」

叩かれた手をさすりながら今時の男が困ったように言えば、神経質  
そうな女はそれを睨みつけるようにして見上げた。

「あたしを殺したことにしてよ」

「いやあ、それは……」

「ちよつとの間でいいのよ」

「いやでも……」

「ガス屋と水道……あと大家と……まあ他色々。全部解約したいの」

「はあ？」

今時の男は予想外の返答に困惑する。

「だって無駄に金払うの嫌じゃない。死んでまで迷惑かけるなんて……まあそれも私らしいけど……最後までいスッキリさせてよ」

「……はあ」

そう言うと女はあちこちに電話をかけたし、次々と契約の解除やら  
なんやらを済ませて行った。

「でもあのー……そうすると自殺の線が濃厚になったりして、搜索されたりとか色々面倒なんスけど……」

一応かけた声は、案の定無視された。

「さ、これ以後はいいかしら……」

「困るんスけどねえ……」

「最後の嫌がらせに決まってるじゃない」

「はあ……」

神経質そうな女はサッと部屋を見渡すと、部屋の生ごみをまとめ始めた。

「家具の掃除は明日業者が来るとして……鍵は植木鉢の下ね……後は……」

テキパキと死に支度をする神経質そうな女を見ながら、今時の男は不思議な気持ちになっていた。

「ねえ、貴方」

「あ、ハイ」

「どうせアイツのことだから変な殺し方するんでしょ」

「ええ？ あゝまあ、一般的じゃないっすよね」

「どんな殺し方なのよ」

「ええ！？ 聞かない方がいいと思うんすけど……」

今時の男は困ったように「まいったな」と呟き、頭をかいた。

「まあ、行けばわかるわ。どうせここじゃないんでしょ？」

「あ、ハイ。スイートルームをご用意してます」

「貴方も随分面倒なのに巻き込まれたわね。因果な商売してる人には心なんて無いから同情する必要もないって思ってたけど……今なら何となく可哀想って思えるわ」

そう言って、神経質そうな女は死んだ魚のような目をしながら鼻で笑った。

\* \* \* \* \*

「嫌よ馬鹿じゃないの!?! どうして裸にならなきゃいけないのよ!?!」

「ええ〜!?! 困ったなあ……そういう依頼なんすけど……」

「あんたマニュアル通りのことしかできないわけ!?! 少しくらい違った対応しなさいよ!?! この能無し!?!」

「酷いなあ」

裸になってそのベッドに寝ると言ったらこのありさまだ。

今時の男は困ったように頭をかき、「うぐん」と唸りながら鞆を漁った。

「はい」

「は?」

差し出されたのは白いハンカチ。

神経質そうな女は訝しげにそれを見た。

その瞬間、そのハンカチが口に押しあてられる。

「!？」

「言った通りだったなあ……これ神成様がご用意して下さったんですけどね？ 絶対貴女が暴れるだろうから、これをかがせるって」

立ってられない程の目眩を感じ、思わず今時の男にもたれかかる。

「で、気絶させる程じゃないからコレ打ってくれって」

そう言って注射器で何かを打たれて間もなく、いよいよ力が抜けて動けなくなった。

眠っているのに今時の男の声だけが聞こえる。

「よっこいしょ」

そう言いながらベッドに神経質そうな女を横たえようと、今時の男は手術道具の様なものを鞆から取り出した。

神経質そうな女は音だけを聞いて、それが何なのかあたりをつける。

「スイートルームって言ってもねえ、こんな廃工場ですから」

音に意識を集中させていた神経質そうな女は、急に話しかけられたものだから、まさかそれが自分宛だとは思わず内心驚いていた。

「さ、これからバラしますよー」

ザクザクと切られていく服の音に目眩がするような感覚におちいる。仮にも女の私の裸を見て、この今時の男は気まずいと思わないのかと憤慨していた。

「いや〜いい女だ！ 勿体ないっスねえ〜可哀想に」

全然そう思っていないような声が聞こえ、神経質そうな女のイライラは増した。

スツと異物が不自然に体の中に入り込んでくるのを感じて、神経質そうな女はサツと血の気が引いた。

あの男が大好きな映画でもやっていた。

恋は盲目とはよく言った物で「いつかやってみたい」と嬉々として話す男を、当時の神経質そうな女は『恰好いい』と思っていた。

実際本当に自分が切り刻まれているのかは分からないが、今時の男が時折「やあ！　こりゃ綺麗だ！　ここだけ持ちかえりたいなあ」なんて陰呑なことを言っているのを聞いて、体が震えるほどの恐怖を感じていた。

「ほら、観てるっすよ。神成様が。と言っても島田様はわかんないっすよね。でも後で会えるんで問題ないっすよ」

と言って笑ったのを聞いて、この糞忌々しい解体ショーをあつ男が觀賞しているのを知った時は、自分の状況を忘れて殺してやろうかと思った。

その頃にはどこか冷静になって来た自分を、とうとう頭が可笑しくなってしまったのかと思ひ憂う。

「はい、もしもし〜！　あ、どうも〜。ええ、ええ。はい、献血しながらなんで、まだしばらくは持つんじゃないっすかねえ。医療の心得なんて全くないんで適当に言いましたけど。いやね？　何せこ

ういう仕事初めてなんっスよ。掃除とも違うじゃないスか。嫌ってことじゃないんスけど」

かかって来た電話にそう受け答えしながら、今時の男は神経質そうな女の中を切り刻んでは皿に乗せる。

電話を切ってからもう神経質そうな女に話しかけなくなった。

あの男が話しかけるなと言ったのか、それとも反応が返って来ないことに飽きたのか、どちらにしても神経質そうな女は今時の男が話しかけてこないのが少し残念だと思っぐらいには退屈していた。

と言っても最初から反応なんて返せるわけないのだから、きつとあの男が『話しかけるな』とでも言ったのだろう、と神経質そうな女は退屈しながらぼんやり思う。

時折鼻歌を歌いながら作業する今時の男は、まるで本当に料理の下準備をしているかのようだった。

「俺、掃除屋さんなのに料理人みたいだなあ」

誰に言うでもなく楽しそうに話すのが、神経質そうな女の聞いた最後の音だった。

業務終了

Project File No. 0005 (前書き)

業務担当：ヒゲの男

業務内容：愛娘のエンバールミネグ

「いいか、娘に何かしたら殺してやるからな」

掃除屋から派遣されたエンバーマーだと名乗ってやって来たヒゲの男を見た瞬間、年老いた男は開口一番釘をさすように睨みつけた。

「何故あの秘書はエンバールミングをするのが男だと言わなかったんだ……！」

「そりゃ悪かったな」

ヒゲの男は道具を取り出しながら無関心に謝る。

依頼人は年老いて得た娘を持つ男。

その愛娘が事故で死んだので、エンバールミングを依頼してきた。

以前別件で白名刺を渡した際に、ヒナが「エンバールミングもできると言っていたのを思い出して連絡を取ったらしいが、ヒナが来ると思いこんでいた年老いた男はまさかこんな薄汚いヒゲの男が来るとは思っても見なかったようだ。」

「私もここで見ていることにする！」

「別に構わねえが、邪魔はするなよ」

興味なさそうにヒゲの男は返事をする、さっさと作業に移った。

ヒゲの男は体を洗淨する為に愛娘を擦る度にブツブツと文句が聞こえてくるため、いつそ自分でやったらどうだろうか、と考えながら作業をしていた。

裂傷を縫い合わせたりする頃には、年老いた男はすっかり泣きモドへ入っていた。

ウツウツという声を聞きながら、ヒゲの男は淡々と作業を進める。

「おい、お前」

ヒゲの男が声のした方へチラリと視線だけ向ければ、年老いた男が娘を痛々しい物を見る目で見ながら話しかけていた。

「お前の会社は裏の掃除もあるらしいな」

遺体に視線を戻し、ヒゲの男は無言のまま次の言葉を待った。

「依頼するには黒い名刺があると聞いている」

「ああ」

「それはどうやったら貰えるんだ」

「……………」

スツと斜め上を向いてしばらく考えた後、ヒゲの男はボソツと呟いた。

「さあ…………俺は黒名刺、配ってないんでね」

「……………！」

年老いた男は「使えない奴め！」だとか「何なんだお前は！」等と怒鳴りながら、力が抜けたように椅子に座り込んだ。

「娘をこんなにしておいて逃げた奴が憎い……………どうしても見つけ出して殺してやりたいんだ」

「……………」

「なあ、頼む！ 黒い名刺をくれ！」

「つつてもなあ…………俺の会社は人探しはしてないんだよ。エンバ―ミングだって今回が初めてなくらいだ」

「だが依頼達成度100%なのだろう！ であれば依頼すれば必然的に探すことになるじゃないか！」

ごもつともなことを怒鳴りながら、年老いた男は鼻水を垂らして叫ぶ。

「まで、初めてだと……？」

ネジが切れたかのように動きを止める年老いた男。

サツと顔が赤くなったり色を失ったりしながら、口をわなつかせていたかと思えば、大声で怒鳴りつけ出した。

「貴様初めてなのにここに来たのか！？ 私はお前の所のが『できる』というから呼んだんだぞ！」

「できる」

「口だけなら何とでも言える！！ 普通そついうことを言うなら……ある程度経験を積んだ奴が来ると思っじゃないか！」

ヒゲの男はいよいよ面倒臭くなり、パスポートと職歴書を放り投げた。

「以前アメリカにいて働いてた時のだ。初めてってのは『社会的に』って意味だよ」

口数少なくそう言えば、年老いた男は未だ怒り冷めやらぬ感じで書類をつかんだ。

中身を舐めるようにして眺め、ブツブツと何かを言っている。

時折「バタ臭い」だの「アメリカかぶれ」だの聞こえてくるものの、ヒゲの男はそれを無視して爪切りを始めた。

「エンバーミングって一言で言っても、色んな奴がいる」

突然口を開いたヒゲの男に、年老いた男は訝しげな視線を向けた。

「『お前は男担当だ』って言われたり『適当でいい』って言われたり。そんな奴らばっかじゃなかったけど、訳ありの遺体を扱うにはそんなところが良かったんだ」

「訳あり……?」

「薬中とか自殺、口に出しちゃ言えねえような奴、殺人 ……正規の場所に頼んだんじゃ色々問題があるって……まあ、要はやましいことがある遺体はほとんど俺んとこに回ってきてた」

「なぜわざわざそんなことをする」

「最初は友人のついでで仕事貰っててな。蛇の道は蛇だ。でも……」

かたん、と爪切りを横に置くと、ヒゲの男は睨みつけるように年老いた男を見つめた。

「途中であることに気付いてからは目的が変わった。なあ、あなた知ってるか？ 訳ありの遺体ってのはよく喋るんだ」

「……喋……る……？ 何を言っ取るんだ……」

「俺はその声が聞きたくてね」

ニヤリと笑ってヒゲの男は爪やすりを取り、丁寧に爪にやすりをかけ始めた。

「だから、本来は1人で作業する。生きた人間が多いと声が聞き取りにくいからな」

それっきりヒゲの男は喋らなくなった。

年老いた男が何を話しかけても一言も発さず、いよいよ「こいつは本当に死んだ人間と会話してるのだろうか」と思いかけた時、ヒゲの男がクスリと笑う。

「何が可笑しい」

「意地悪なお嬢ちゃんだ」

「一体何を ……」

「例えばあんたが『本当の父親じゃない』としたらどうだ？」

「何を …… 訳の分からないことを ……」

「あんた、分かってんだろ」

遺体の髪の毛を丁寧に梳きながら視線も向けずにヒゲの男は淡々と喋る。

「 …… 馬鹿なことを言っつな …… アレは私の ……」

年老いた男は目に見えて覇気がなくなり、よろよろしたかと思うと勝手に椅子を引き寄せて腰掛けた。

「私の ……」

年老いた男は呆然としながら、どこを見るわけでもなく宙を眺める。

「奥さん、随分若いな」

「結婚に年齢は関係ないはずだ」

「もちろん」

「じゃあ口を出すな!!」

ヒゲの男は煙草に火を付けてフツと口の端で笑う。

いつの間にか遺体は綺麗な服を着せられていて、年老いた男は自分がどれほど呆然としていたのかと内心で自嘲した。

「貴様、今すぐ煙草の火を……」

「『お母さんが、貴女の父親は別にいるの』って言うんだと」

「……馬鹿な……」

「可哀想になあ。毎日そんなこと聞かされて、どんな顔して父親と接すりゃいいんだ」

年老いた男は「馬鹿な」とブツブツ言いながら顔を伏せた。

どのくらいそうしていたか、急にポツリポツリと語りだす。

「なんとなく怪しいと思う時はあった」

「……」

「生まれるのがちょっと早すぎる気もしたし、私に一向に懐かなかつた。何より、私の娘にしては可愛すぎる……母親は美人だったが、私に似ている部分がちっともないくらい可愛い娘なんだ。見れば分かるだろう？ 私に似てないのが自慢でな」

年老いた男は再びウツウツと嗚咽を漏らした。

「それでも……もしその話が本当だとしても……この子は私の大事な娘に変わりはない。もう余計なことを言って悲しませないでくれ」

「あまりいじめないでくれねえかな」

「それは私の台詞だ！！ お前いったい何が言いたい！！」

「いや、今のはあんたにじゃない。言っただろ？ 『訳ありの遺体つてのはよく喋る』」

「……貴様……嘘をついたのか」

「俺じゃない」

そう言ってヒゲの男は肩をすくめる。

年老いた男は段々と目を見開き、部屋中視線をはわせた。

「娘がいるのか……」

「ああ」

「娘は……娘はなんと……」

「この子は間違いなくあんたの子だ。予定日なんてのはあてにならねえ。生まれが早いなんてよくあることだ。その逆もな。似てないのは……別にこれもよくある話だろ。俺なんて両親のどちらにも似てねえよ。ただあんたの嫁が浮気してたのは本当だろうな。遺産目当てであんたと結婚して、ガキ生んで。後は両方始末するだけだ」

「……始末？」

そう呟きながら、年老いた男は最近妻の様子が変なことに気付いていながら無視していたことを思い出した。

「頭のおかしい奴ってのは怖いね。てめえのガキですら平気で道具にするんだからよ」

「道具……」

年老いた男は呆然としながら胸ポケットから写真を取り出す。

そこには年老いた男と綺麗な女、それから小さな娘が写っている。

「早くから気付いた娘さんは、父親と仲良くしていたら父親がすぐ殺されてしまうんじゃないかと思っただな。ま、俺から言わせりゃそんなの関係ねえけど」

「……どういうことだ」

「だから、娘さんはあんたのことが好きだったことだろ？」

ヒゲの男が不思議そうにそう言えば、年老いた男は口をわなつかせ、やがて大声を上げて泣きながらヒゲの男に抱きついた。

「おいおい、困ったな……」

「私、は……結局、ど、ど、どう接していいか分からず……物を買ってやるしか……」

年老いた男はそう言って娘を愛おしそうに眺め、しっかりと抱きしめてキスをする。再び声を上げて泣き出した。

「どんな損傷が激しい遺体でも、生前と変わらずキスできるような体に戻るのがエンバーマーとしての俺の仕事だ。それに裏と違ってこっちは因果な商売でもねえからな。まあ、それ以外でも気が乗らたら無償でするし、気が乗らなくても金さえあれば何でもやるぜ？」

気に入ったならまたどうぞ」

ヒゲの男はそう言うと、黒い名刺を椅子の上に置いて部屋を出た。

「ま、遺体にキスするのはオススメできねえから、ほどほどにしろ？」

戻って来たヒゲの男はドアの隙間から首をつっこんで薄っすら笑いながらそう言うと、今度こそ本当に部屋を出て行った。

業務終了

## 第四章：疑問

「なあ、お前『特掃』についてどのくらい知ってる？」

「え？ うん……そうですねえ」

話をふられた黒服の男は、少し悩んでから困ったように笑った。

「あまり知らないんですけど、普段は事件現場とかクソ汚い部屋の掃除やって、裏では人間消してるってくらいですかねえ……あ、あとは従業員が全部で13人とか？ どっちにしても因果な商売ですよ、裏は。依頼した方も後悔するような仕事っぷりだって言うじゃないですか。もちろん仕事が出来ないって意味じゃなくてですけど」

「13人？」

「ええ？ 食いつく方そっちっスか？ まあ、いいですけど……なんでも国籍不明の住民票すらないヤツラが集まってるらしいっスよ」

「なんだそりゃ」

「あくまで噂っス」

そう言って黒服の男はハハハと笑った。

「実際何人の従業員がいるかなんて知ってる奴いませんよ。4人だつて言う奴もいれば、564人とか432人とか37564人とか……こつ現実味のない数字を言う奴もいますし」

確かにその人数はありえねえなあ、と竜崎はアゴを撫でた。

ゴロ合わせにしても人数が常識的に考えてありえない数字になっている。

「俺な、あの女が気に入ったんだ」

「ああなるほど……え？」

「で、色々情報が知りてえわけだよ。デートに誘えねえから」

「でえとお！？」

黒服の男は大げさに驚いたようなポーズをとる。

「なんだよ、何かおかしいかよ」

「いや、だって……ちよつと会っただけじゃないですか……しかも仕事で」

「恋に落ちるのに時間なんて関係ねえさ」

「うわ、またそんな上手いこと言ったみたいな顔して……」

ハア〜とため息を吐いて、黒服の男は床に座り込んだ。

それを見ながら竜崎は満足そうな、それでいて何かを企んでいる悪戯っぽい笑顔を浮かべた。

「まあ、何でもいいんだよ。なんか気になるだろ。内緒にしてるわけじゃなさそうなのに、何にも情報が出てこないってのもさ」

「内緒にしてないわけじゃなさそうっすよ」

「あ？」

黒服の男は竜崎の前でも遠慮なく煙草を取り出すと、一瞬迷って竜崎に勧めた。

竜崎はそれをありがたく1本貰い、火を付けさせる。

黒服も自分で火を付け、天井へ向かって大きく息を吐いた。

「この間も俺の知り合いが言ってたんすけどね？ 黒名刺を拾ったんで試しに依頼してみたらしいんすよ」

「拾った？」

「ええ、何でも持ち主を、」

「喧嘩して盗ったのか」

「そうとも言つつス」

エヘへと何故か照れ臭そうに頭をかく黒服を見て、竜崎は自分の店からは逮捕者が出ないことを内心で祈った。

「で、依頼したら本当に来たらしいんすけど、『依頼は名刺を渡した人からしか受けられない』って言うらしいんすよ」

「まあ、そうだろうな」

黒名刺を渡された時、そんなようなことを言っていたのをぼんやり思い出した。

「で、カづくで頼んだらどうなるんだって言ったら ……」

「なんだよ」

竜崎は突然黙りこんで口から煙草を落とす、ブーツと入口を見つめる黒服の男を訝しげな目で睨む。

すぐその視線の先を追って入口に目を向けた竜崎は、驚きすぎて黒服の男と同じように口から煙草を落とした。

「お前それどーした？」「お前生きてたんだあ！！」

竜崎と黒服の男の声が重なり、2人に話しかけられた怪我だらけの男は照れ臭そうに苦笑いした。

「いや〜イイ女がいましたね。ちょっかい出したらコレですわ」

そう言って手のギブスを目線の高さまで上げる。

「腕の骨だけですんで良かったなあ〜」

「バカ野郎、肋骨も折れてるし全身打撲がヤバイんだよ。頭と顔もミイラみたいになっちまってよお。男前が台無しだぜ」

「お前、なんでそんなんなってんだ？」

竜崎はこの怪我だらけの男の強さを知っていた。

数年前までは元負け知らずのプロボクサーとしてバリバリ活動していたものの、膝を悪くしてから竜崎の店で黒服として働いていたのだ。

負け知らずと言っただけあって、滅多に怪我をしない。

だから、竜崎はこの怪我だらけの男がここまで大怪我をしている所を初めて見た。

もったもな質問を不思議そうな顔でする竜崎を見て、怪我だらけの男は困ったように視線をさまよわせた。

「竜崎さん、さっきの話、コイツっス」

悪さを親に告げ口する子供のような笑顔で怪我だらけの男を指さす黒服の男。

「ほお……」

「あーいや、竜崎さん……え？ 何をどこまで聞いたんです？」

「全部言っただっつもの」

黒服の男がそう言って面白そうに笑えば、怪我だらけの男はますます困ったような顔をした。

「参ったなあ……ちょっとからかっただけなんですけど」

「その割には大層な格好してるじゃねえか」

竜崎が「吐け」と言っただけで意地悪そうに笑えば、怪我だらけの男は困った顔をしながら渋々語りだした。

「いえね？ 依頼つっても殺したい奴がいたわけじゃないんですよ。ただ、秘書がすげえ美人だって噂だったのと、あんま噂にバリエーションがねえなと思って。気になるじゃないですか。こんな黒い組織の割に噂が少ないなんて。いや、黒いからこそ無いんでしょうけど、裏の人間まで知らないとくりゃ話しは別ですわ。で、なぐに隠してんのかなあ、と思いましてね」

自分と同じことをしようとしていた怪我だらけの男を見て、竜崎は苦い顔をした。

「色々聞いたんですけど、のらりくらりとかわすもんで……つい」

「殴ったのか？」

「いや、女子供は殴らないですよ！ あと老人！ ただ寸止めで……反撃されましたけど」

「しかもメチャクチャ手加減されてな！」

爆笑しながら黒服の男が目の端に滲む涙をぬぐった。

それを見ながらムスツとした顔をして、怪我だらけの男が神妙な顔つきになる。

「全然見えなかったです。あいつ、何か変ですよ」

\* \* \* \* \*

「あら、じゃあ竜崎様のところの方だったんですね」

「ああ、迷惑かけたなあ」

「いえ、こちらこそ……というか……まあ、迷惑だったんですけど、私も思いつきり反撃しましたのでお相子ということ」

竜崎がお詫びに来たと言って菓子折り片手に事務所を訪れたのは、つい5分程前だった。

アポなしで行ったにも関わらず丁寧に招き入れてもらい、お茶までご馳走になっている。

「ところで従業員はいねえのか？ 見たところデスクが1つしか無

いようだけどな」

「社長はここには来ませんからね。上が自宅になってるんです。社長の」

「へえ！ そりゃ知らなかった。管理人室かと思ってたぜ」

驚いたように目を見開くと、竜崎はお茶を一気に飲み干して席を立った。

「さーて帰るか」

「お見送りします」

「ありがとうございます。また来る」

そう言つて去つて行く竜崎の背中を見つめ、ヒナはこっそりため息をついた。

「『また』つて……喫茶店ではないのだけど……」

それからしばらく、事務所に来ては1つ質問してお茶を飲んで帰つて行く竜崎が見られるようになった。

Project File No. 0006 (前書き)

業務担当：冴えない男

業務内容：ストーリーカーの掃除

「丁度貴方みたいな方ではないかと思ってますの」

「はあ……」

「わたくしにはお付き合いしてる方がおりますので、ごういうの困るんです。見つけ次第と殺してしまつて構いませんので。誰だろうと気にしませんわ。それにお金はいくらでもありますから、上乘せでもかまわなくてよ」

事務所に来たお嬢様風の依頼人は、ハアと小さくため息を吐いた。

それを見ながら、冴えない男は露骨にため息を吐く。

「警察に言えばいいんじゃないですか？」

「警察なんて動いて頂けないじゃないですか。ご存知ありませんの？」

「……はあ、まあ分かりますけどね。だからと言っていきなり殺しちゃうつて発想に到るあたり、お嬢様っぽいですよ。我が儘というか」

その物言いにお嬢様風の依頼人は顔を引きつらせた。

「貴方、失礼なこと言うのね」

「正直、痴情のもつれ関係は面倒臭いんですわ。詳しくは言えないんですけど、誰かから感謝された試しがないですよ。まあ、そこが因果な商売だつて所以ですな」

ハアとやる気なさげなため息を吐くと、断りも無く煙草に火を入れた。

その瞬間、目の前のお嬢様風の女が顔をしかめる。

「まあ、でもうちに頼むしかないんでしょうなあ」

「……頼むのをやめて貴方を警察に突き出してもいいんですよ。わたくしは客なのだから、もっと言葉に気をつけなさい！」

「そうなる困ったことになるのは、間違いなくお宅ですよ。お宅ねえ……ここに何を話しに来たと思ってるんですか。こっちはまだ一言もやるなんて言っていないですよ？ あんまり我が儘ばかり言うとな、こっちだつて困っちゃいますよ」

そう言つて冴えない男は胸ポケットからボイスレコーダーを取り出して見せた。

「……脅す気ですか？」

「やめて下さいよ、人聞きの悪い。危なく自滅する所を注意して差し上げたんじゃないですか。こういう依頼をする時点で犯罪者なんですから、『脅された』なんて言って警察に駆けこんだら捕まっちゃういますよってね」

そう言えばお嬢様風の女は悔しそうに顔を歪める。

冴えない男はぼんやりと「よく顔の歪むお嬢さんだ」と思いながら契約書を取り出した。

「契約書、読み終わったらここにサインをお願いしますよ。犯人は誰だろうと構わず掃除ってことでいいんですかね」

「そういう話をしたのにもう忘れたのかしら」

「はいはい」

もうこれ以上は話すことなど無いと言った感じで存在自体を無視するかのような対応をし、お嬢様風の女は帰って行った。

「うーん、実に面倒だな。この依頼が終ったら私から依頼出しとくか」

去っていくお嬢様風の女を眺めながら陰呑な言葉を呟き、冴えない

男は吸い殻を窓から外へ飛ばした。

\* \* \* \* \*

「いやあ、見つけるのに随分手間取っちゃいましたよ。まさかお宅がストーカーだとは思わないでしょう?」

「……………」

冴えない男に行く手を遮られた背の高い男は、何を言っているのか分からないと言った表情をしていた。

「何故そんな真似するんです? 普通に会えばよろしいじゃないですか」

「……………」

「お嬢さん怖がってましたよ」

「……………」

「怖がって……………って言うか……………まあ、イラついてって言うか……………」

あの剣幕を思い出したのか、冴えない男は小さく舌打ちするとため息を吐いた。

「お宅も大変ですな……苦勞するでしょう？ まあ、それも今日までなんですけどね」

「何言つてんだ……アンタ誰だ？」

ようやく、背の高い男が口を開いた。

それを見た冴えない男は、まるでこれから起こる不幸を喜ぶかのような笑みを浮かべた。

「掃除屋ですよ。お宅を掃除しに来ました」

「掃除……？」

じわりじわりとにじり寄って行く冴えない男に嫌な空気を感じてか、背の高い男もじわりじわりと後ずさって行く。

「お宅に消えて欲しいらしいんです。あのお嬢さん」

「消える？ 馬鹿か。あいつは俺のことが……」

「好きでしようなあ。でもお宅がストーカーしてることは知らない」

「付き合ってるんだから、ストーカーじゃないだろ」

ハハと力なく笑い、背の高い男は眺めていた家の窓を見上げる。

「相手が誰でも殺せつて依頼なんでね」

「そんな……そんなの、理由を説明すれば」

険呑な空気を敏感に感じ取り、背の高い男は生唾を飲み込んだ。

「依頼100%達成がウチの売りなんですよ」

最初こそ口の端を引きつらせて何とか笑っていた背の高い男も、ニヤニヤと笑い続ける冴えない男の表情を見て走りだした。

後ろを振り返り振り返り走り、息を切らせながら公園へ駆け込む。

「はっ……はっ……はっ……」

辺りを見回して、冴えない男が付いてきていないのを確認した。

「何なんだ……あ、あいつ……俺がストーカーって……」

「可哀想になあ。まさか自分の連れがストーカーだなんて思ってた  
いから、殺しの依頼しちゃいましたね。お宅も本当にツイてない」

「うわあああ!?!」

振り向いた瞬間目の前に広がる脂ぎった顔。

電灯に照らされて反射するメガネのせいで、その表情は良く分らない。

「あのお嬢さんは真相に気付いたら、どんな顔をするでしょうね」

「や、やめてくれ……頼む……! 説明すればきつと……」

「駄目ですよ。もうお金貰っちゃいましたから」

冴えない男は楽しそうにそう言つと、ゆっくり背の高い男に近づいた。

業務終了

Project File No. 0007 (前書き)

業務担当：人のよさそうな女

業務内容：ゴミ屋敷の清掃

「参ったわねえ……何日かかってもいいって言われたけど……もう1週間になるんじゃないかしら」

小さくため息をつきながら、人のよさそうな女はスーツから作業着へと着替える。

丁度1週間前からこのやたら広い屋敷の掃除を始めた。

最初は腐った臭いが酷く、見かねた近隣住人が町会費を出しあつて清掃業者に掃除を頼んだ。

ところがどの企業も何故か「これ以上はできない」と言つて代金を受け取らず1日で帰つてしまう。

そこでヒナの会社である『特殊表裏清掃』へ声がかかったわけだ。

1人でやるから何週間かくらいかかると説明しても、「一向に構わないからやってくれ」の一点張り。

案の定1週間経つてしまつても終らず、人のよさそうな女は申し訳ない気持ちでいっぱいなのだが、それでも「今日はもうここまで綺麗にしてくれた」だの言つて住民達は喜んでいる。

「今日はゴキブリが出ないといいんだけど……」

それくらいは絶対いるであろうゴミの山を眺め、人のよさそうな女は再び大きなため息を吐いた。

「お邪魔します」

律儀に声をかけて扉を開けると、独特のカビ臭い空気が広がった。

顔をしかめながら廊下を歩き、今日はまだ全然手を付けていない2階を掃除する事にしようと思ひやり考える。

この1週間死に物狂いで掃除をして、なんとか1階は片付いた。

まだ染み抜きや消毒はしていないものの、初日に比べると見違えるようだ。

「あら、2階は意外と綺麗なのね」

1週間目にして初めて上がった2階は、階段付近が恐ろしく汚いだけでさほど汚れていない。

「なんか怖かった御社……」

1人なので歌いながら歩きまわっている最中、人のよさそうな女は

不思議な扉を見つけた。

この家の雰囲気には似合わないビビットカラーの真っ赤な扉。

その扉には小さな鍵穴が付いている。

「ウオード錠とはまた随分お洒落な鍵使ってるわね」

ドアノブに手をかけて開けようと捻った物の、開く気配がない。

「鍵かかってるのかしら」

ドアノブはびくりとも動かず、人のよさそうな女はドアを開けるのを諦めた。

代わりに鍵穴から中を覗き込む。

「こんなことやっても見えるわけない……と思ったら普通に見えるわね。鍵壊れてるじゃない。抜け落ちたのかしら？ でも壊れてるなら何で開かないのよ」

鍵穴の向こうには何も無い部屋が広がっている。

ポツンと椅子が置かれていて、その椅子の上にはロープが垂れ下が

っていた。

その先は何かをひっかけるのに丁度いい輪が付いている。

「まあ」

ありがちな光景に思わず肩をすくめるが、扉が開かないのであれば後回しだとばかりに踵を返した。

「やだ、こっちの部屋は結構汚いのねえ……」

2階にある3つの部屋。

そのうち1つは先程の赤い扉の部屋で、残りの2つは床一面に切り刻まれたシーツの様なものが撒かれていた。

「生ゴミじゃないだけいいか」

かき集めれば何とかかなりそうな光景に安堵のため息を吐き、人のよさそうな女は作業を開始した。

\* \* \* \* \*

集中して作業を続けていた為、人のよさそうな女はいつの間にか外が暗くなっていたことに気付かなかった。

まだ4時過ぎだと言うのに、やたら外が暗い。

「電気を通して貰っておいてよかったわ」

そう言いながら部屋の入口まで行って明かりを付ける。

そうして作業を再開しようと部屋の奥を見た瞬間、人のよさそうな女は窓に映った自分の後ろに立つ男の姿を見つけて一瞬動きを止めた。

「あら、いつから ……」

振り向いた先には誰もいない。

窓にも、もう誰も映っていなかった。

「 ……見間違いなね」

そう呟いて掃除を再開する。

\* \* \* \* \*

どうにも誰かに見られている気配を全身で感じながら、人のよさそうな女は定時まで仕事をこなした。

定時になり屋敷を出る時、心中でこっそりこれが原因かと苦笑した。

お化けや幽霊の類は信じていないものの、こんな怪奇現象を他の人も見たのであれば仕事をしたくないと言うのも頷ける。

例え男といえど、こんな田舎の古びたごみ屋敷で怪奇現象に見舞われたら嫌気がさすという物だ。

「おかしいわね。他の人は初日で根を上げたって言うのに、私は結構経つけど」

車を運転しながらブツブツ呟く。

信じていないせいで怪奇現象を怪奇現象と思わなかったのかもしれないと思い、一人納得しながら音楽をかけた。

「  
」

流れてくる音楽に合わせて鼻歌を歌う。

外はもうだいぶ暗くなっており、今日は天気が悪いと朝見たテレビで笑顔を見せる天気予報士の男に愚痴を言った。

「トンネルに残響……」

歌いかけて止める。

目の前に見えてきた大きなトンネル。

いつも付いている灯りは、1つも付いていない。

「なるほど、これが世間では怪奇現象と言われてしまっわけね。その実態はトンネルの管理者が調整を忘れただけだということに」

特に気にせずライトを付けると、人のよさそうな女はトンネルに飲み込まれるように入って行った。

\* \* \* \* \*

感覚的に中央付近まで来た時、お決まりのように車が止まる。

「参ったわね」

眉を寄せてエンジンをかけ直した。

エンジンは唸るだけで一向に動こうとしない。

「降りろってことなの？」

ため息を吐いて車から降りれば、鍾乳洞のようにひんやりとした。

寒すぎるくらいだ。

「もし仮に幽霊がいるのだとして、一体何の意味があるのかしらね。こんな面倒な真似をして」

半ば怒りながらボンネットを開け、腕を組んで中を見た。

ただ車のボンネットを開けて何をすればいいか分からず、適当にエンジンを叩いてみる。

一瞬触った何かの蓋の様なものが恐ろしく熱を持っていて、思わず手をひっこめた。

「まったたく!」

勢いよくボンネットを閉じて目を見開く。

運転席には、あの屋敷で見た男が座っていた。

「……………」

ふと前に聞いたことがある言葉を思い出した。

そういう場所に行くのと連れて来てしまうのだと。

開かれている男の目はあるべき場所に眼球が無く、どこを見ているか分からないはずなのに視線が合っている気がする。

耳鳴りがうるさい。

「あら」

次に瞬きをした時、男はいなくなっていた。

それから車は嘘のようにスムーズに動き、無事事務所までたどり着いた。

\* \* \* \* \*

「さて、あとはこの部屋だけなのだけど」

翌日、人のよさそうな女は早々に2階の部屋を片付けると、真っ赤な扉の前に立っていた。

依頼主に確認したところ、扉が開かないのであれば壊していいと言われたので、物置からバールを取って来た所だ。

「例の男が幽霊だとしても、私には関係ないわ。これは仕事で、私は悪くないもの。何かしてほしいのだとしたら、直接言えばいいのだわ」

珍しく弱気な自分に思わず苦笑しながらボールで肩を叩く。

人のよさそううな女がこんな弱気になるのには理由があった。

幽霊は信じていない物の、どうも昨日から体の調子が悪いのだ。

今も頭が痛いし目眩が酷い。

「幽霊にしろ超能力にしろ、体の実害があるのは困るわね。だって『いる』って証明になっちゃうじゃない」

早い話が、実際自分の身に何かが起こって、なお且つそれが本物の超常現象となると途端に恐怖心が沸いて来たということだ。

「よっ……いしょ」

バキバキと大きな音を立てて扉をこじ開ければ、案外すんなり扉が開いた。

勢いで扉が自動的に開いて行く。

部屋の中は真っ暗だった。

天井から漏れる小さな明かりが、椅子とロープだけを照らしている。

灯りを付けようと壁を探った瞬間、人のよさそうな女は心臓が止まる程驚いた。

「これ……」

壁に髪の毛が張りつけてある。

それをかき分けて電源を探して電気を付けると、驚くべき光景が広がっていた。

あの窓辺に釣り下がる暗幕で暗いのだと思っていたものは暗幕ではなかった。

文字通り部屋中をその黒い物が覆っている。

壁も、床も、天井も ……。

天井からつり下がるロープも、全て人間の髪の毛。

隙間なく、分厚く貼り付けられていて、一切の光を通さない。

なのに天井部分からは灯りが漏れていて（恐らく天窓があるのだろう）、それがスポットライトのような役割をして椅子を照らし出していた。

「なに……これ……」

さすがに不気味な光景を目の前にして言葉が出ず、思わず一歩下がった。

その瞬間誰かに後ろから抱きつかれ、部屋の中へと引きずりこまれる。

「!!!?」

完璧に油断していた人のよさそうな女は、目を見開いたまま閉じる扉を眺めていた。

業務終了

## 第五章：試し

「なあ、悪いが担当変えてくれねえかな」

「……………またですか？」

「ああ、別に何が悪いってわけじゃないだよ。ただちよつと……………なあ？」

ニコニコ笑う竜崎を困ったような目で見つめ、ヒナは「畏まりました」と返事をした。

「でもこれで最後ですよ？　たださえ1人いなくなって、てんやわんや……………」

そこまで言っただけでハツとした表情になり、ヒナは口をつぐんだ。

「なんだ、耐えきれなくて辞めたか？」

「いえ、まあ……………辞めたというか……………」

「アンタ嘘つくの下手なんだから、全部話しちゃえばいいのにな」

別に嘘をつくのが下手なわけではないことを言いながら、ヒナは裏

に顔が聞く竜崎であればなにか知っているかもしれないと思いなおした。

「女性社員が1名、屋敷の清掃に行ったまま帰ってません」

そう言った瞬間、ピクリと竜崎の眉が動く。

「もう1週間程経つのですが、連絡が取れないんです。清掃は引き継いで終わらせましたが……」

社員が消えるのは初めてのことだった。

部屋には血痕も争った跡も特になく、ただ中央にポツンと椅子があるだけ。

壁や床も綺麗なまま。

ただ、恨みは思い当たる程あるが、易々と消されるような人間ではない。

それだけに、ヒナはいつになく関心を持って社員の行方を気にしていた。

「何かに巻き込まれたか殺されたか……情報が無くて困ってます」

「なるほどな」

そう言って竜崎は黙りこみ、何かを考えている。

「ま、今は何も思いつかねえけど、オトモダチに情報色々聞いてやるよ」

「恩にきります」

「場所とか詳細教えてくれ」

「はい」

ヒナはサツとメモを取り出すと、屋敷の場所、社員が消えた状況、社員の見た目を記して竜崎に渡した。

「ふうん……156cmくらいでボブね」

「ええ、目がクリツとして、鼻筋の通った子です」

「つつかよ、殺されたって可能性あるのか？」

「うちの社員で『裏の清掃』をしていない人間はおりませんので」

「ああ……」

社員であれば、恨みを置く可能性は誰にでもある。

「つか、アンタでも仲間のこと気にしたりするんだな」

意外そうに茶化して言えば、否定の返事が返って来た。

「とうよりは……もし社員を消せるような奴がいるとしたら、そいつは私に近い存在なのかもしれないので」

「『近い』……?」

「純粹に興味を持ったということですよ」

そう言って笑うヒナの目は、死んだ魚のようだった。

\* \* \* \* \*

「毎度〜!」

「ン? あ〜……ヒナんこのか」

「はい!」

「じゃあ、バツクの掃除手伝ってくれ。ゴキブリが酷くてよ」

「はい、畏まりましたー！」

店にやって来たのはフレームが無いタイプの眼鏡をかけた、今時の男だった。

ホストをやらせたらそこそこ売れそうな感じの普通の男。

こいつも裏の仕事をしてるのだろうか、と思いながら、竜崎は今時の男が薬剤を取りだすのを眺めていた。

「ヒナに言っといてくれ。『まだ情報が入らない』って」

「え？ あゝ分かりました！ すみませんね、わざわざ」

「いや、アンタんとも大変だな。警察にも出せねえんだろ？ ど  
うせ」

「まゝそうっスね！ やましいトコありまくりですからねえ」

今時の男はそう言って笑った。

「いつ死ぬ商売かわからないし、死んでも文句言えないんで警察なんて行っても意味ないってのもあるんですけど……ま、死んでも誰も心配しないんで、楽っちゃ楽っスよ」

「なんかそれも悲しいなあ」

「そうっすかね？ 少なくとも俺はそういう湿っぽい嫌いなんで、全然気にしないんすけどね。やっぱ女の子とかは気にするんすかねえ〜」

真面目に悩んでいるかのような表情をしながら、今時の男は顎を手でさすった。

「ところでアンタで従業員は最後なのか？」

「へ？ ……あ〜！」

困惑顔の後、ニヤリ顔になった今時の男が竜崎を指さす。

「ヒナさんが言ってたっすよ〜！ 最近お客様が何やら嗅ぎまわっていて、従業員をとつかえひっかえしては人数をさぐったりしてるっつて〜！」

「そんなこと言ってんのか」

「ええ、そりゃもう。なんせ『要注意人物』として認識されてますからね！」

竜崎は地味に傷つきながら苦笑した。

「まあ、別に隠しちやいないんすけどね」

「そうなのかよ」

「ええ。従業員数は決まってるんすよ。気分っていうか……まあ、基本的に動き回ってる人数ってのは決まってるんすけど、いくらでも増やせますし」

「なんだそりゃ」

「そのままっすよ」

そう言うと「うわっ」と叫びながら、今時の男は飛び出してきたゴキブリを踏み殺した。それを視界の隅で見ながら、反対側を向いて煙草に火を付ける。

「隠してはないんですけど、公開もしてないんすよね」

「？」

ボソツと言われた言葉に竜崎は今時の男の方を振り向いてピタリと動きを止めた。

いつの間にか押しつけられたサバイバルナイフが、首元の熱を奪っていく。

竜崎は今時の男が音も無く近寄ってきてサバイバルナイフを首に当てたという事実を、未だに理解できずにいた。

ただぼんやりと『これ以上動いてはいけない』と本能が告げる。

「あんま嗅ぎまわると痛い目に合っちゃう気がするんスよね〜」

「……………そうか」

「ま〜気分のいいものじゃないっスからね。うちはちょっと特殊なもんで」

「だろうな」

「いや、きつと思ってる以上に特殊っスよ」

今時の男の言っている意味が分からず質問しようとして、口を開くのをやめた。

「俺はな、アンタらが人間じゃねえんじゃねえかなと思ってる」

「……………なるほど」

そう言っただけで今時の男はニタアと笑った。

口の中の赤がやたら不気味に見え、竜崎は思わず視線をそらす。

「イイ線いってるんじゃないスかね？ 人殺すなんざまともな神経しちやいないっスよ。それでも需要がある。可笑しな話っスよ。大

金払ってでも殺したい奴がいる癖に、自分では殺さない。そしてそれを良しとして大人しく金を貰ってる」

「それでも世間は上手く回ってる。そういう人間がいる限りはな。需要と供給の真髄じゃねえのか？ テメエじゃやりたくねえから大金払ってでも誰かに任せたいって奴と、どんな仕事でも金をもらえればやるって奴。バランスが取れてるじゃねえかよ。何も可笑しくないさ」

「上手く回ってるように見えて、ギリギリなんじゃないっすか。バランスなんて取れてないっすよ。辛うじて取れてるように見えるだけっす。例えば、サーカスのライオンが牙をむいたとしたら、力の無い調教師は何もできずに喰われるしかない」

そうやって今時の男は手の中のサバイバルナイフを竜崎の首から遠ざけると、手の中でクルクル回して遊び始めた。

「ライオンが黙って調教師の言うことを聞くのは、餌が魅力的だからだ。その餌が魅力的に見えないとしたら？ 例えば調教師の方が美味そうに見えたとしたら？ 人を使うしか能がない奴は、いつかライオンに喰われる」

「……使う側も体力付けてライオンが歯向かってても勝てるようになるってことか？」

「まさか。人を使うしか能がないなら、どこまでもそれを追求しないといけないって話です。間違えてもライオンが反抗しないように、牙を抜くとか。人を使うしかできないのにそれすらまともにできな

「奴が喰われるってことっスよ。自分を守りたいならもつと必死になるべきだ」

「なるほどな」

「でも、牙を抜くタイミングを見誤っちゃいけないっスよ」

今時の男はフツと鼻で笑うと、再び薬剤を床に撒きだす。

「うっかり手を突っ込んで、腕ごと喰い千切られなきゃいいんすけどね」

「アタんとこのライオンは手強そうだな」

「ライオン？」

不思議そうな顔で竜崎を見つめた今時の男の目の奥は、怒りとも恐れとも言えない鈍い輝きを放っていた。

「そんな可愛いもんじゃないっスよ」

**P r o j e c t F i l e N o . 0 0 0 8 ( 前 書 き )**

**業務担当：病的な男**

**業務内容：遺品の清掃**

「こここれは……全部捨てるんでしょうか……」

「他にどうしてるのよ」

「あ、あの……もも、もしよかつたらなんですけど……ぼ、僕が持ち帰っても……」

病的な男がそう言うと、痩せた女は汚物を見るかのような表情をしながら病的な男を睨みつけた。

「気持ち悪い……あんたなんなの？ ただの掃除会社でしょう？  
ごちゃごちゃ言ってるんで捨ててって言うてるの」

「す、すみません……」

12畳程の広さの部屋には、所狭しと人形が並べられていた。そのどれもが精巧につくられた球体関節人形で、この部屋の主である「花房 清隆」という人形師が作ったものだ。お金持ちを相手にした人形で、1体何百万もするものもある。

「……もも勿体ないな……」

「……」

痩せた女は病的な男を無視する。  
病的な男も返事を期待していた訳ではないので、ただひたすら人形を箱に詰め始めた。

「あ、あれ……」

1体の人形を丁寧に抱き上げた時、洋服の隙間から封筒が滑り落ちてきた。

「あ、あのっ……これ」

面倒臭そうに視線をよこした痩せた女は、封筒を見て目を見開いた。

「貸しなさいっ！！」

文字通り封筒をひったくると、痩せた女は震える手で封を切った。

「アハっ……はは……遺言……こんな所に……」

ブツブツと呟きながら紙切れを眺める痩せた女を興味なさげに見る

と、病的な男は再び作業を始めた。

「は！？ ちょっと！！ 掃除は中止よ！」

しばらくして叫ぶように言われ、病的な男は思わず肩を震わせた。

「……………え？ え？」

オロオロと視線を彷徨わせ、手に持った人形をどうしようか挙動不審な動きをする。

痩せた女はイライラしたようにその人形をひったくると、床に叩きつけるように投げ捨てた。

「あいつ死んでまで私に意地悪をしたいらしいわね」

そう言うと、痩せた女は爪を噛みながらどこかへ電話をかける。

しばらくコールが鳴り響き、電話の向こうで誰かが言葉を発した。

「私よ。遺言が出てきたわ。最低のね」

\* \* \* \* \*

「なんでお前は勝手に掃除屋を呼んだんだろうね」

「だって気味悪いじゃない、人形なんて」

「お前には分からないだろうけど、これは価値のある人形だよ。…  
…最も、私にもその価値は分からないのだけど。売れる物は全部売  
ればいいんだ。『最後の作品』とでも銘打てば大金出してでも買  
たがる奴はいる」

電話を受けてやって来たのは、サラリーマンとギャルだった。  
面倒臭そうに話しながらサラリーマンがPCをいじる後ろで、ギャ  
ルが鏡を見ながら化粧を直している。

「それでえ？ 遺産はどうやって分けんの？ あたし、難しい話  
分かんないから、さっさと金だけ欲しいんだけど。でもあたしが分  
かんないからってちよるまかさないでよ」

そう言いながらビューラーをライターであぶる。

「ていうか、あんたいつまでいるのよ。帰りなさいよ」

「あ、じいじめんなさっ……で、でもっ……おおお金が……」

「中止って言ったでしょ！？ 金取る気？」

「じいじめんなさっ……！ ででっでもっ……き、規則で……」

「まで、そこにいてくれ。どうやら君がここに来るのは父の予測済みだよっだ」

その言葉に、痩せた女は顔をしかめた。

「まさかコイツにも遺産を分けるなんて言っんじゃないでしょうね」

「そのまさかだよ」

深いため息を吐きながらサラリーマンは頭を抱えれば、その瞬間、痩せた女とギャルが烈火のごとく怒りだす。

「はあ！？ ざけんなよ！ なんでこの気持ち悪い赤の他人が関係あんだよー！！」

「冗談でしょ！？ 面識もないのに何の関係あるっていうのー！！」

「そんなのは俺が聞きたいー！！」

拳でテーブルを叩きつけて2人を黙らせると、病的な男に射殺す程凶悪な視線を向けた。

「お前、父との面識は」

「あ、う、そ、その……」

「はっきり喋れよ気持ち悪いな！」

そう言つてギャルが病的な男の尻を蹴りあげると、「ヒッ」と小さく言つて謝りながら半泣きでポツリポツリと語りだした。

「いいい一度だけ……そ、その……ヒナさんが……」

「ヒナ？」

「契約の時に顔出した女じゃない？」

「……ああ、あの女か。ということはお前じゃなくて彼女を呼んだ方がいいのか？」

「あ、あの、でででも……今日は……いなくて」

そう言えば、3人が同時に面倒臭そうな顔をした。

「でえ、肝心の遺言には何て書いてあんの？」

ギヤルが面倒臭そうな顔のまま再び爪をいじりだす。

「『掃除屋に掃除されなければ人形と財産を全部譲る』らしい」

「は？ 掃除？ 何を？」

「わからん。ただ、掃除されたら掃除屋に財産が行くと書いてある」

「意味分かんないんだけどー！」

すっかり機嫌を損ねたギヤルは、盛大にため息を吐いてソファに深く腰掛けた。

「あんた何か聞いてないの」

「聞いてますよ」

突如、空気が変わった。

「……………」

違和感を感じた3人が病的な男を見れば、空中をボーッと眺めながらニヤニヤと気味悪く笑っている。

「今日、依頼2件あるんですよ。お宅で」

「あなた、何言って……」

「人形の掃除と、人間の掃除。人形の掃除依頼されたの、貴女ですよ。遺品整理くらいなら普通の業者で良かったはずなのに、何故うちに？」

「なんでって……たまたま名刺が……」

「たまたまなんてありませんよ」

そう言つて鼻で笑う病的な男を見ながら、サラリーマンは生唾を飲み込んで顔を引きつらせた。

「何が言いたい」

「花房様からのご依頼です。名刺をあなた方の見える位置に置いて、遺品整理をうちの会社に頼ませるようにする」

「そんなの、私達が頼まなかったらどうする気だったのよ」

「頼みますよ。絶対。実際そうだった」

「絶対……何を馬鹿な……たまたま」

「2つ目の依頼は、あなた方の掃除だ」

「「「……」「」」

三者の沈黙が部屋に広がる。

「つまり、殺す ……ということですよ」

そう言ってサバイバルナイフを取り出せば、あっという間に顔色を変えてそれぞれ逃げ出した。  
それを眺めながら、病的な男は面白そうに呟く。

「時間までに生き残った人に遺産が行き、誰もいなかったらこっちの物になる。簡単でしょう？」

「馬鹿げてる！ そんなことが……そうだ警察を……」

携帯を開いた瞬間、手の中の携帯が爆発した。

「っ……！？」

家中の通信機器が煙を上げて壊れて行く。  
異様な光景に悲鳴を上げて逃げまどい、互いを押しやりながら玄関  
へ向かった。

「開かない……!!」

どんなに鍵を開けようとしても一向に鍵は動く気配も無く、駆け寄  
った窓の鍵もまるで接着剤でも付けたかのように固くなっていた。

「どけ!」

サラリーマンが椅子を振り上げて窓に叩きつける。  
まるでゴムに椅子を叩きつけているかのような感触に、3人は絶望  
の表情を浮かべた。

「なん、なんで……誰か……」

ギャルがへたり込んで耳をふさぐ。

「面白いなあ」

やたら饒舌になった病的な男が、サバイバルナイフをペロリと舐め

ながら3人に向かつてとろとろ歩いてくる様を見て、ギヤルは狂ったような悲鳴を上げた。

その声を聞いて、弾かれたように痩せた女が走りだす。

「テメエ、こんなことしてただで済むと ……」

ギヤルの放った強がりとは、途中で空中へと消えた。

代わりにゴポゴポと汚い音がして口から真っ赤な血を吐く。

何が起こったか分からないサラリーマンは、ようやく病的な男がギヤルの喉を引き裂いたのだと気付いた。

「嘘だろ……」

「まずは見せしめということ。本気なんですよってアピールしないとね？」

病的な男は、そう言った楽しそうに笑った。

「ほら、逃げて逃げて？ 5分だけ待ってあげますから」

その言葉を最後まで聞かないうちに、サラリーマンは走り出していた。

サラリーマンの後姿を見ながら楽しそうに笑う。

「いち、にーい、さーん……」

\* \* \* \* \*

この家は無駄に広い。

人形師である花房は隠し部屋を作ることにも趣味としており、いたる所に仕掛けがしてあった。

そのうちの1つに隠れ、痩せた女はガクガクと震えている。

先程聞えた悲鳴はなんだろうか。

誰か殺されてしまったのだろうか。

そんなことをぼんやり思いながら、いったいこの恐ろしい時間がいつまで続くのかを考えていた。

\* \* \* \* \*

「！」

どのくらい経った頃か。

急に聞こえた音に体をびくつかせて、自分が入って来た入口を見つめる。

それが徐々に開いていくのを見て、痩せた女は絶望した。

「はっ……は……」

浅い息を吐きながら、涙を流す。

人の気配なんて全くしなかった。

そう言い訳しながら、うつかり寝てしまった自分を心中で叱咤した。

「き……」

叫ぼうとした瞬間口を凄い力で抑えられ、床に組み敷かれる。

「シッ……俺だ」

扉が閉じられると同時に、瘦せた女の耳に聞きなれた声が聞こえた。

「……………あ、う……………」

「殺られた……………あいつ、本当に殺りやがった……………」

それがギャルのことであるのにすぐ気付いた瘦せた女は、再び恐怖で体を震えさせる。

「今、何時頃……………？ いつまでこんなこと……………」

「わからない。今は夜中の4時半を過ぎたところだ」

「……………なんで……………なんでこんなことに……………」

「気付いてたってことさ」

そう言ってサラリーマンは悔しそうな顔をした。

「……………気付いてた？」

「人形を黙って売っていたことだ」

「……そんな、それだけで」

「それしか考えられないだろ！ あの人形狂いの男が怒る理由なんて……」

怒りを込めながらも小声で怒鳴るサラリーマンを見ながら、痩せた女は涙を流した。

「たったそれだけで……命を……？」

「あの男にとって人形は……待て、何の臭いだ」

嗅いだ事のあるクサイ臭いに、一瞬にして2人の血の気が引く。

「……と、灯油……」

「くそっ……あいつ火を……！」

「何やってんのよ……！ 早く開けてよ！」

「開かないんだ……！」

慌てて扉を開けようとして、再び2人は血の気が引いた。

「いや、嘘でしょ……こんな所で……嫌っ！！ 開けて！ 開けてよ！！」

狭い空間で気が狂ったように扉を叩く。

扉は先程の窓のように手ごたえが無く、ピクリとも動かなかった。

「あけ……」

ガラッ

「ひいっ……！」

「開けましたが」

床に広がる生温い液体を気にも留めず、サラリーマンと痩せた女はズルズルと座り込んだ。

「すみません、臭いますでしょうか？ 火をつけようと思って灯油を撒いた所までは良かったんですけどね。時間が来ちゃいまして……」

心底残念そうに言う病的な男を見て、2人は思わず顔を見合わせた。

「ほら」

病的な男はそう言って時計を見せた。  
時計の針は4時50分を指している。

「あ……ああ……たす……かつ……」

「ええ、残念ですが。ということで依頼は……あれ？」

病的な男がコンコンと時計の文字盤を叩いて不思議そうな顔をする。

「んん？ すみません、今何時でしょうか？」

「……？」

呆然とするサラリーマンの腕をつかみ、病的な男は時計を確認した。

「あ、やっぱり！ 時計、壊れてたみたいだ」

「えっ？」

パシヤ

一言も発する事なくサラリーマンが崩れ落ちる。  
床にどんどん血が広がり、瘦せた女は本日何度目かの絶望を感じた。

サラリーマンが付けていた時計の針は、4時40分を指している。

業務終了

Project File No. 0009 (前書き)

業務担当：物静かな女  
業務内容：部屋の清掃

「」

軽そうな男は機嫌よさげに鼻歌を歌いながら、物静かな女を眺める。物静かな女は視線をもともせず部屋の掃除を続ける。

「今まで色んな会社に掃除を頼んできたけどさ、やっぱり君が一番可愛いよねえ」

「……そうでしょうか」

「うんうん！ メイド服が一番似合う！」

「……はあ」

「そういうつれないところ良いんだよねえ〜！ 俺って顔はそう悪い方じゃないと思うんだけど、大抵の人はノツてくれるからさ」

「……うちは『そういう会社』ではないので」

「知ってる知ってる！ メイド服もわざわざ金払って着てもらってるもんね〜！ ごめんね、なんか変態っぽくて！」

軽そうな男は人懐こそうな笑顔を浮かべると、ソファに寝っ転がりながらスナック菓子を食べ始めた。

「『そういう会社』の子達はさ、かがむ時もわりと普通にかがむんだよ。スカート短いけど中身見せるのが仕事だからね。なのに君は見えないように気を付けるだろ？ あ、いや、『そういう会社』じゃないのは分かってるんだけど、そう言う所がまた良いんだよなあ」

「はあ」

それから特に会話らしい会話は無く、時折軽そうな男が一方的に物静かな女を褒め干切っていた。

それに興味なさそうに返事をする物静かな女。  
日が暮れる頃にようやく部屋の掃除が終わった。

「如何でしょうか？」

「……うん！ イイ感じイイ感じ！」

軽そうな男はよく『そういう会社』を利用していいのか、それとも元々綺麗好きなのか、部屋はモデルルームのように綺麗な為、1日で家中を掃除するのはそう大変ではなかった。

ただ軽そうな男が頻繁に話しかけてくる為、案の定掃除は全然はかどらないままこの時間だ。

「また頼むよ〜！ 今度は……そうだな、週末に来てもらえるとい

いんだけど」

「9日……の金曜日でしょうか？」

「いや、10日の土曜日の10:00からかな。金曜日はお客様を呼ぶんだ。だから汚れるだろうなって思ってた」

「畏まりました」

物静かな女は男の用事には興味がない、と言った感じで返事をし、部屋を後にした。

\* \* \* \* \*

「特殊表裏清掃会社です」

インターフォンを鳴らせば軽そうな男の声が聞こえてくる。いつものように「入って入って！」と楽しそうな声がして、物静かな女は勝手に玄関の扉を開けて部屋へ入る。

「……」

一歩足を踏み入れた瞬間、濃い血の臭いがした。

「やあ、いらっしやい」

「……」

「あはは！ 初めて見る表情だ」

軽そうな男は嬉しそうにそう言いながら、ソファに深く身を沈めて満足げにため息をついた。

そのソファの前では1人のメイド姿をした女が仰向けになっていて、真っ赤な体液を床一面に広げていた。

「君の全ての表情が見たくて今まで色んなことをしてきたけど、君は表情が乏しいのかなか見せてくれなかったからさ。何か衝撃的なことの方がいいのかなと思っただ。君の所はなんでも掃除するんだろ？ これも頼むよ」

チラッと床に視線を向ければ、毛足の長い真っ白の絨毯が嫌という程血を吸いこんでいて、もはやクリーニングだけでは落ちないだろうと思われた。

「畏まりました」

「あれ、意外と普通に請け負うんだ。顔が変わったのは最初だけかあ」

「慣れておりますから。ただ、絨毯は変えないと駄目だろうなと思いでまして」

そう言えば、一瞬の静寂の後、軽そうな男は大爆笑した。

「ええ〜!?!? 驚いてあの表情だと思ったんだけど、まさかそんなこと考えてたわけ?」

「……はあ」

「なーんだあ……慣れてるのね……まあ、事件現場の掃除してるならそうかあ」

軽そうな男は「残念」と呟くとため息を吐き、煙草を取り出して火を付ける。

「例えば君を殺そうとしたらどうだろう? 僕は君の顔が歪むのを観れるかな?」

「弊社基準の正当防衛で対応致しますので、観れないかと」

「ハハハ! そういうのあるんだ。スタンガンとか?」

そう言いながらダガーナイフを取り出してクルクルと手の中で弄びながら、ソファから立ち上がって物静かな女に近づいた。

「スタンガンくらいなら何とかかなりそうな気がするんだけど」

「本気でそう思っているのですしたら、試して頂いても結構ですが」

「アハハ」

沈黙が落ちる中、物静かな女は作業を開始した。

死体を綺麗にビニールシートで包み、特製の袋に詰めて保冷剤を入れる。

その作業を見ながら、軽そうな男は興味深げに覗き込んできた。

「随分準備が良いけど、僕が人を殺すって知ってたの？」

「なんとなく……。こういう仕事の方が多いので、なんとなくわかるんです。『死の臭い』が」

「『死の臭い』？ どんな臭いがするの？」

「あれを言葉で表すのは難しいのですが……こう、甘くすえた臭いと言いますか……」

「『すえた』……ねえ」

男はいまいち分からないような表情をしながら、アゴを撫でながら再びソファに座った。

「それで事前に用意してきたわけだ」

「ええ」

「あともう一つあるみたいだけど、そっちは予備？」

「いいえ、こちらでも使う予定で……」

「ああ、メイドを何人呼ぶかは分からないからね。君は何て言うか……用意周到？ でもやっぱりちよつとずれてるよねえ」

クスクス笑いながら軽そうな男は煙草をもみ消した。  
物静かな女は特に返事をするでもなく床に広がる血を拭き取り始める。

「じゃあ、そのビニールシートは君の分にしようかな ……」

そう言って軽そうな男はスツと物静かな女に近寄ると、その耳元へ口を寄せ首元へダガーナイフを滑らせた。

「私だって、さすがにお会いした方からしか『死の臭い』は嗅ぎ取れませんかよ」

「……スタンガンじゃなかったの？」

「『死の臭い』がしたのは、お客様なんです」

「そうなの？ 参ったなあ……気付かなかった」

軽そうな男は全然そうは思っていないような表情で笑い、床に座り込んだ。

胸からはジワジワと血があふれ出し、軽そうな男のシャツを染めていく。

軽そうな男はため息を吐くと、ソファに寄りかかる。

「過剰防衛じゃない？」

「当社既定の正当防衛です」

「……そっか」

「人は本能的に死ぬ時が分かるんだと思います。意識下で気付いて

いなくても、体は気付いている。だから、臭いがするんですよ。その臭いは分かる人にしか分からない」

「ふーん。やっぱり君は変わってるね」

「自分でもそう思います」

それだけ言うと、物静かな女は再び部屋の片づけを始めた。

「僕は死ぬのかな？ ……死ぬんだろうね、『死の臭い』がしたのであれば」

物静かな女は軽そうな男の言葉に応えることはせず、淡々と部屋の掃除をしていた。

業務終了

## 第六章：罇

「なあ、じーさん。あんたがもしどーしても聞きてえことがあるのに、それをこれっぽっちも教えてもらえねえとしたらどうする？」

「……………そうですね……………あっしには頼み込むくらいしか思い付きやせんが」

「だよなあ。普通は」

竜崎はハーと煙草の煙を吐き出し、天井にぶら下がるシャンデリアを眺めながら掃除するじーさんを視界の端で監視していた。

「まあ、俺らは違う。あんたんとこの社員は全員見たんだ。女が5人に男が6人。ヒナと社長で13人か？　まだ社長にはお会いしたことねえけども」

「……………」

「あの良く喋る男とかヒゲのはえたのは駄目なんだ。若くて威勢が良いのは面倒くせえ」

「……………」

「かと言って女に手を上げるのは野暮だ。だろ？」

「そついでじーさんやすね」

「で、だ。あんたに聞きたいことがある」

「老人みたいな弱い物は関係ないんで？」

「俺は男が嫌いなんだよ」

「左様でございますか」

そう言つとじーさんはヒツヒツと可笑しそうに笑つた。

「ま、素直に答えてくれりゃ痛い目にはあわねえで済むさ」

「なるほど」

「単刀直入に聞きてえんだけど」

「何一つお答えすることはございせん」

「……そうか。残念だ」

竜崎の「おい」という掛け声とともに、数人の黒服が部屋へ入つて来た。

あつという間にじーさんを拘束すると、そのうちの1人がじーさんの腹へ膝を埋める。

竜崎はそれを見ながら薄っすら笑い、そのまま真顔へ戻つた。

「いけやせんねえ。老人相手に」

じーさんは変わらずニコニコと笑いながら竜崎を見つめている。部屋は一瞬にして嫌な空気に変わり、あの時と同じように何か奇妙な感覚が部屋を満たした。

「なるほど。殺しをやるような会社は、例えじーさんでも鍛えてあるってか。見誤ったな」

「いや、別にそんなことはありやせんが」

「うちのだつて遊びでやつてるわけじゃねえんだ。その膝蹴り喰らつてニコニコしてるなんざ、まともな人間じゃねえだろ」

「あつしだつて遊びじゃありやせんよ。若い方にしてはなかなか良い力をもつていらつしゃる」

「……やれ」

竜崎の米神を汗が伝い、苦笑の様な自嘲が齒の隙間から漏れた。

竜崎の指示通り黒服はじーさんに次々と膝や拳を入れる物の、誰ひとりとして余裕の表情を浮かべる物はいない。

誰しもが「何故?」「一体何が?」「こいつは何なんだ?」「とつっすら恐怖を感じながらじーさんへ力任せに攻撃していた。

「困ったな、不要な争いは避けるって社訓なんですけど……」

ボソツとじーさんが呟いた瞬間、黒服の1人が声も発さず倒れ伏した。

「！」

「困りやすぜ、竜崎さん」

じーさんは本当に困った、といった表情をしながら、次々と黒服を地面に沈めた。

「あんだあ、あつしに手え出しやせんでしたね。何だったら帰ってもいいですぜ」

「……」

元プロボクサーで最近怪我が全快したばかりの黒服は、顔を引きつらせながらなんとか笑った。

女子供と老人には手を出さないと思っていた自分が、思わず手を出しそうになる程じーさんの動きは異常だった。

とても老人とは思えない俊敏な動きで、「来た」と思った瞬間には仲間が倒れていくのだ。

じーさんのありがたい申し出に「では喜んで」と言いたくなったのはしょうがないことだと思いつながら、竜崎の方をチラッと見た。

「あんた本当にジジイか？」

まさに自分が聞いたかったことを代弁した竜崎に、黒服は思わず生唾を飲んでじーさんを見つめた。

「へえ、ただのジジイでさあ」

「そうは見えねえなあ」

竜崎はそう言いながら指にはまる指輪を次々外し、机の上に並べる。

「竜崎さん……」

「お前、老人に手を出さねえ主義なんだろ？ いいよ、お前は。甘っちょねえとは思っけど、俺はそんなところが好きなんだ」

「……」

「なあ、じーさん。俺とも遊んでくれよ」

そう言つと、竜崎は脂汗を垂らして鼓舞するよつに笑いながら、思いつきり拳を振り上げた。

\* \* \* \* \*

「つぁ……くつそ……」

鈍い音とともに竜崎の腹へじーさんの拳が沈む。

開いた口から呻き声と血が漏れ、床を水玉模様へと変えていた。

腹を押さえて床へ額を付け、体を折るようにして何とか体を支えている。

それを黒服の男は不安げな目で見ていた。

「いやあ、さすがだ」

「……嫌味……かよ……」

「いや、とんでもございやせん！ 何度か冷や汗が出やした」

「あなた……1発1発が馬鹿みてえに重いな……若い頃、なんか、やってたのか……？」

「嫌ですよ、旦那。あっしは今も若いつもりでさあ」

「またそうやってのらりくらりとかわしやがる」

竜崎は何とか起き上がると床へ座り込み、震える手で煙草に火を付けた。

「聞きてえことがあったんだけど……これじゃ無理だな……骨折れてんじゃねえのか？ これ……」

「申し訳ありやせん」

「いや、正当防衛だろ？」

じーさんは困ったように笑うと、竜崎に手を貸して椅子へ座らせた。じーさんを畏怖の目で睨みつける黒服へ「そう睨まねえでください」と苦笑しながら、じーさんは端に寄せていた掃除道具を取り出して掃除を再開しだす。

「ああ、そうだ……ヒナに伝えて欲しいことがあるんだが」

「なんでございましょう」

「お願いされて調べ物してたんだけどよ……あ、じーさん知らねえのか？ 本人に直接言った方がいいのか」

「いや、問題ありやせんよ」

「そうか……ま、結論から言つと何も分からねえ。どーも面倒くせ

えことになつてゐてえだ。全然情報が浮いてこねえからよ。まるで綺麗さっぱり消えちまつたみてえにな。最初から何も無かつたんじゃないかねかつてくらいだ。裏の人間でもこんな綺麗にや片付けられねえんじゃないかねか？　じーさんとこなら話は別だけどな」

「社の人間の掃除をするなら知つてやすでしよう」

「だろうさ。なあ、こつは考えられねえか？　お宅みたいな会社がもう1社ある。もしくはできた」

「ありえやせんね」

じーさんは即答でそう答えると、ニコニコ笑顔をひっこめて真顔になった。

「こんなことするのはウチだけで十分でさあ」

「……なるほど。ま、引き続き調べてはみるけど……あ、そうだ。あの屋敷に関しては面白え話があるんだ。ま、今回の件には関係ないだらうけど」

「何がでございましょう？」

「でるらしい」

そう言いながら可笑しそうに両手を前へ突き出す。  
じーさんは不思議そうな顔をして同じように手を前へ突き出した。

「これでやすか？」

「ああ。男だそうだ」

「男……」

「なんでも数十年前にあそこで暮らしてた男の霊らしいんだけどな、あの家に入ろうとしたり取り壊したりすると怪我をするらしい」

「ありがちでございますな」

「シンプルで分かりやすいだろ？」

「ええ、まあ」

「それでな、その男ってのがヤバイ奴だったらしいんだ」

「と、申しますと？」

じーさんは興味深げにニコニコと頬笑みを浮かべる。

それを見て、竜崎は満足そうにうなずいた。

「頭のイカレた絵描きだったらしい。女の死体しか描かねえんだと。本当かどうか定かじゃねえけど、実際人も殺ってるって話だ」

「ははあ……殺した女を描くってことでやすね？」

「ああ。でもある日とうとう殺した女共に呪われちゃったらしくてな。意味の分からないことを叫びながら日夜庭を掘り返しては埋めてを繰り返してたんだと。部屋も生活ゴミやら動物の死骸やら……まあ、とにかく色々な物で埋め尽くされてな。何度か清掃業が入ったらしいんだけど、どいつもこいつも件の呪いってヤツで妨害されちゃってる。あと、これは裏の情報だけどな、どうもその男ってのは戸籍がねえらしい」

「そつでやしたか」

「非科学的な話で良けりゃ、『呪い』じゃねえか？　って話だ」

「……なるほど」

じーさんはしばらく考え込むと、膝をパンツと叩いて気が晴れたような笑顔を見せた。

「これで解決しやした」

「は？」

「いやあ、通りで情報が出てこねえと思っていたんですがね」

「一体何が分かったってんだ？」

「『戸籍がねえ』ってことですか。それがわかりゃ十分でございませよ」

「真意の程は分からねえのにか？」

「いえね、こちらでも色々調査はしていたんですがね、どうも総合すると『そうだ』としか思えないんでございますよ」

じいさんはいつもと違った笑顔を浮かべると、携帯を取り出して力チカチといじりだした。

「調べても調べても身内が出てきやせんぞ。『確かにいる』の話を聞こうにも聞けないで困ってたんでございやすよ。もう本当に噂なんじゃないかと思って諦める所でございやすした」

「……なるほど、な」

竜崎はつすら寒い物を感じながら、対してつっこまずに携帯をいじり続けるじーさんを見つめた。

「まあ、まだ解決とまではいきやせんが、こりゃ確かに面倒な話でございまさあな」

「助けは必要か？」

「いえ、ここから先は、あつしらの領域でさあ。旦那には随分お世話になりやした」

「……わかった。何か必要なら言ってくれ」

「へえ、ありがとやんした」

じーさんはそう言っつて人の良さそうな笑みを浮かべると、掃除道具をまとめ始めた。

「なあ」

「なんでございましょう？」

「あんたら最近言わなくなったな。あれ。前は来る度に1回は言っただら？ 社訓か何かなのかあれは？」

竜崎がそう言えば、じーさんは不思議そうな顔をする。それを見ながら竜崎は薄っすら笑い、楽しそうに呟いた。

「『因果な商売』」

そう言えば、「ああ」と納得したような顔をして、困ったような顔で笑いながらこう言った。

「『因果じゃない』って気付いたんでさあ。そう思いやせんか？」

「どう言う意味だ？」

じーさんはそれには答えず、ニクニクと笑いながら部屋を出て行った。

Project File No.0010(前書き)

業務担当：態度のでかい女

業務内容：生体の清掃

「まーったく……これが『因果な商売』だなんて思ってたなんて。馬鹿よねえ」

「そうなんですか？ まさにそうだと思いますけど」

「違うわよアンタ馬鹿ね」

「ええ！？ 馬鹿って……仮にも僕は客なんですけど……」

「知らないわよそんなの。いい？ 因果な商売ってのはね、誰かの為になってるはずなのに、誰からも感謝されない商売のことを言うのよ。感謝どころか恨まれてるっていうの？」

態度のでかい女がため息を吐きながらそう言えば、一風変わった男は可笑しそうに笑った。

「ああ、なるほど。いや、でもまさにその通りなんじゃないですか？ 人を殺してほしくて頼んだって、結局捕まるのが怖くなってるんで止めてくれなかったんだ』って言われるんじゃないですか？」

「まあね。腐るほど言われたわよ。テメエが殺れって言ったくせにね」

「僕は感謝してるんだけどなあ」

「アンタは変わり者なのよ。自分を生きたまま掃除してくれなんて言う馬鹿、今までずーっと営業してきたけどアンタくらいだわ。大体、せつかくこんな田舎まで来たんだから、開口一番『始めてくれ』じゃなくて、茶でも出せつてのよ」

そう言いながら態度のでかい女は一風変わった男の爪を綺麗にはがし、丁寧に並べていった。

「最初はね、あたしだって『因果な商売』だと思ってたわよ？ でも本質はそうじゃないのよ」

「本質？」

「そう。本当はね、恨んで何かないの。ずーっと感謝しっぱなしよ。一時の保身で馬鹿みたいに騒ぐだけ。数日経ったらコロツと忘れて『死んでくれて良かった』って思うんだからイイ気なもんよね」

「でも一時でも『騒ぐ』のなら、『因果な商売』ってことでいいんじゃないですか？」

「違うわよ馬鹿。全然違うわよ。本当の『因果な商売』って言うのは、ずーっと恨まれ続けるのよ。恨みが恨みを呼んで、どうでもいい難癖まで付けられるのよ。もうそこまでいったら悪口のスピードは止まらないわよ。もはや最初に何を怒ってたのか忘れるくらい力ツカしちゃうんだもの。まあ、案外自分の立場が逆になったら意見も変わるんでしょうけどね。ホント嫌な奴よ。人間つてのは」

いささか乱暴に最後の爪を剥ぐと、綺麗に並べた爪の上から消毒液をかけた。

シユワシユワと細かい泡が立ちのぼり、独特のツンとした臭いがする。

「私としたことが、気付くのに遅れたわ」

「はあ……でもやっぱり変わらないと思いますけどね」

「アンタもホント解らない男ね。本質が違うって言ってるでしょ！？」

「え、あ、いや……だって、立場が逆になったら意見が変わるのは、『因果な商売』って呼ばれてるのもお姉さんの仕事も同じでしょう？ 昨日人を殺せと依頼した人間が、今日別の人間に殺せと依頼されるとするじゃないですか。そうしたら、その昨日依頼人した人間は問答無用で貴女を恨むでしょう？」

「恨むのは『自分の命を狙っている今日のアタシ』よ。『他人の命を奪った昨日のアタシ』じゃない」

そう言えば一風変わった男は「解らない」と言った表情で首をかしげた。

「つまり、誰も『昨日人を殺せと言わなければ、今日自分の命を狙われることはなかった』なんて思ってないってことよ。殺されるにはそれなりの理由がある。大抵はやましいことありまくりだから殺

られんの。『昨日』と『今日』では延長線上に同じ人間、同じ思いがあるとは限らない」

「昨日は昨日、今日は今日。だから同じ思いが持続する訳じゃないお姉さんの仕事は、『因果な商売』じゃないってことですか？」

「そつよ」

態度のでかい女は得意げに鼻を鳴らすと、剃刀を頭にあてて毛を剃り落とし始める。

「まあ、確かに他の仕事は思いが持続しますよね。戦争で儲かる武器屋さんなんてのが良い例でしょうか。これは狙われる側がハッキリしている上に、誰にでも起こりうることですし」

「そうね。まあ、普通の人間は殺し屋に命狙われるなんてことないもの」

「戦争は無くも無いですからね。日本は平和ボケしているからどうか分かりませんが」

ジヨリジヨリと音を立てて毛が落ちて行く。

それを丁寧にかき集めて、態度のでかい女は袋に詰めていった。

「仕事が丁寧なんですな」

「まあね。態度はでかいから乱雑そうに見えるかもしれないけど、仕事は仕事よ。お金貰ってるんだからね」

「なんだ、自覚あったんですね」

「殺すわよ?」

「ハハハ」

一風変わった男は自分の姿を天井に付けられた全身鏡で見ながら、嬉しそうに微笑んだ。

「やっぱり命に関わらない所からやってもらって正解だったな」

「初めにやっちゃうと観れないものね。アンタ弱そうだし、すぐ死んじゃいそうだから」

「酷いなあ」

そう言って笑いながら、一風変わった男は「一応色々迷ったんですよ?」と可笑しそうに呟く。

「何がよ」

「妙齢の女性の前で全裸じゃないですか。そういうの、如何なものかなーって」

「しょうがないじゃない。処置するのに服は邪魔よ」

「でもまさかそんな風にするなんて思わないじゃないですか」

「何よ！ 文句あるわけ！？ じゃあ、アンタ、別の人に頼めば良かったじゃないのよ！」

ガチャンと剃刀を床に叩きつけると、態度のでかい女は憤慨しながら小鼻を膨らませた。

「違いますよ！ 察してくれないかなあ……一応恥ずかしいんですけど……」

「アタシは平気だわ。仕事だもの」

「いや……まあ、ハイ」

それ以上言っても無駄だと判断した男は、苦笑しながら全ての毛が剃り落し終ってツルツルになった頭部を眺めた。

「え、これ下の毛も……？」

「当たり前でしょ？ 下どころか毛は1本たりとも残さないわよ。眉毛もスネ毛も腕毛もワキ毛もぜーんぶ剃ってやるんだから」

「うわあ……恥ずかしいなあ……」

「馬鹿ねえ。アンタ、茶を出さなかった時点で相当恥ずかしいんだから、もう何もかも諦めちゃいなさいよ」

態度のでかい女はまるで興味が無い、と言った感じで眉毛を剃り始めた。

あっという間に両方の眉を剃り落とすと、脇から腕へと剃刀の刃を滑らせる。

「自分の眉なしの顔を拝む日が来るとは思いませんでしたよ」

「良かったわね。死ぬ前に拝めて」

「全くだ……ところで、やっぱり洗淨はなしにしませんか？」

「駄目よ。私を完璧主義だと聞いて雇ったんでしょ？ 今さらキヤンセルなんて許さないわ」

「そんなこと言って、本当は男の体を……」

「アタシは麻醉無しでもいいのよ。完璧主義の私が妥協に妥協を重ねて、特別にプランに入っていないかったオプシオン（麻醉）を追加してやったっていうのに」

一風変わった男は未だ恥じらいを捨て切らず、念の為提案してみたがあっという間に却下された。

態度のでかい女は「これ以上のプラン変更は我慢ならない」と言つて声を荒げながら、まとめて毛をむしり取る。

「麻酔が効いてるからって酷いなあ。一応ブチブチと気持ち悪い感覚はあるんですけど」

「知らないわよ馬鹿！ 変なこと言つのが悪いんでしょ!？」

「ああ、もう……すみませんでした、僕が悪かったです」

「何よその言い方……ムカつくわね……それよりどこから切る？ オススメは『下を先に切り落とす』って選択肢なんだけど」

「下……って下ですよね……？」

「他に何かあるのよ」

「何で下なんです？」

その質問に何かを思い出したかのように不愉快そうな顔をしながら、態度のでかい女は恨み事を言うように口を開いた。

「アンタみたいなタイプは絶対興奮しちゃうんだから。竜崎さんみたいだね。そんなの見たくないから、先に切り落とした方がいいのよ」

「竜崎？」

「喰いつくと」そこなわけ？」

「誰です？ こういうの、僕が初めてなんじゃないですか？」

「生きてたつてスプラッタなシーンに出くわすことくらいあるじゃないの」

「そんなんですかね？」

「どうでもいいけど、アタシはアンタの話をしてんのよ。どうなの？」

態度のでかい女はそう言って遠慮なく一風変わった男の額を平手で叩く。

パチンと良い音がして、一風変わった男は思わず笑った。

「じゃあ、お姉さんのオススメで」

「最初っからそう言やいいのよ」

態度のでかいおんなは満足げにうなずくと、切れ味の良さそうなメスを取り出した。

業務終了

Project File No. 0011 (前書き)

業務担当：頭の悪そうな男

業務内容：耳掃除

「ったくよ。掃除屋に耳掃除頼むのなんざ、あんたくらいだぜ？  
ありえねえだろ、普通。耳掃除だぞ？ そんなん自分でしろよ。で  
きんだろ？ 耳掃除くらい。耳だぞ耳。テメエの。他人に、それも  
野郎にやつてもらうなんざ酔狂の極みだろ。おぞましい。あんたが  
女なのが不幸中の幸いなくらいだ」

「だあってえ……ユメ自分じゃできないんだもーん……」

「『できないんだもーん』じゃねえよ。彼氏がママにでもやつても  
らいやいいだろ。あんた何が悲しくて他人に頼んだよ。俺なん  
てただの掃除屋の兄ちゃんだぞ？ しかも他人の耳掃除なんてした  
こともねえし。してもらうことはあっても、したことなんて一度も  
ねえよ。初仕事で失敗とか洒落になんねえだろ。いや、失敗なんて  
しねえけど。俺は仕事に誇りを持つてるから失敗なんてしねえけど  
さ。でもやつぱ気分のいいもんじゃねえだろ。俺だつてそれなりに  
初仕事は緊張すんだよ。見る！ 手なんか汗でビシヨビシヨじゃね  
えか。こんなん人殺す時だつてならねえよ」

「ええ〜？ 人殺すのお？ 可笑しい〜！ でも大丈夫だよお……  
ユメ何があつても文句言わないしい。綺麗さつぱりぜーんぶ掃除し  
ちやつてね」

「ああ、仕事だからそこら辺はちゃんと……つてコラッ！ キンも  
タマも触んな！ 何やつてんだよテメエは！」

頭の悪そうな男は軽く頭の悪そうな女の頭を叩くと、慌ててクスク

又笑う頭の悪そうな女の手を拘束した。

「あんた、綺麗に掃除しろっつってんのにそんなことするんじゃ、鼓膜がグチャグチャになつても文句言えねえからな!? だいたいそういうのはそういう店に行つてしろよ! ま、女版のそういう店があるなんざ聞いたことねえけどよ。いや、あんのか? ありそうだよな。なあ、そう思わねえか? あんだろ。少しくらい。だってこんな腐りきつた世の中だぜ? あるだろ〜」

「ユメ〜、お兄さんのこと好きになっちゃったかも〜」

そう言うとウルウルと大きな瞳を揺らしながら、頭の悪そうな男の目を見つめた。

頭の悪そうな男はそれを一瞬見て顔をしかめると、大きなため息を吐く。

「あのな〜……今日で会ったの2回目「会った時間なんて関係ないもーん! 一目惚れつて言うでしょ〜? ユメ、お兄さんの名前知りたいんだけどお……」

「おま……つたく、俺の話をごこまで聞かねえのはあんたとヒナくらいだ。何なんだよ。俺は客と飲み屋の姉ちゃんには惚れたりしねえ。いいか? よく考えてみる。どう考えたって不毛だろ? 何だよ客と店員の恋つて。ありえねえだろ。そんなのが成立するのは漫画か小説か映画くれえだろ。俺は漫画しか読まねえけど。どちらか一方はほぼ100%お外用の顔で接してるのに、どうやったらそこに恋愛感情が生まれて成立するんだよ。あれか? 俺の恋愛スキル

的なものが劣化品なのか？ 通常はそこで恋に持って行くものなのかよ」

「ええ？ ユメ難しいことはよくわかんないけどお……好きなら関係ないよお？ ガンガンアタックしちゃうえば相手もおちるかもしれないじゃあん」

「あんたは何を恐ろしいこと平然と言ってるんだよ。そういう勘違いを人は『ストーカー』と呼ぶんじゃないのか？ ストーカーの始まりじゃねえのかそれは。おっと、『昔なら純愛』なんて寒いこと言うんじゃないぞ？ 俺は今も昔もそういうのを『純愛』だなんて認めねえよ。俺が『純愛』と認めるのは韓龍映画の馬鹿に甘い物語だけだ。そもそも、現実において『純愛』なんざ存在しねえだろうが。そう思ってるのは、大抵女がテメエに酔ってる時だけだ。稀にそう思う阿呆な男もいるみてえだけどよ。目が覚めりゃ恥ずかしい思い出になっちゃうんだから、今のうちに目覚ましとけ。な？ 悪いこと言わねえから」

「そういうクールなところもカツコイ〜！」

「全然聞いてねえんだな、あんた！ ビックリだ！ ビックリだよ俺は！！！」

「ええ〜？ お兄さ「ちよつと黙っててくんねえかなあ！？」何か全然仕事がかどらねえんだけど！？」俺、さっきから耳クソしか取ってねえよ！？ これから無駄毛とかも切らなきゃなんねえつてのによ！」

そう怒鳴ると、頭の悪そうな女はカーツ顔を赤くして小声でブツブ

ツ文句を言いだした。

「んも〜……酷おい！　そういうこと普通言っ？　耳クソとか……  
酷おい……」

「なんだよ、そういう依頼だろうが。全部綺麗にするんだろ？　文句あんのかよ」

「女の子に対してそういう言っこと言っ？」

頭の悪そうな男は面倒臭そうにため息を吐き、耳かきをクルクルと回すと窓の外を眺めながら眺めた。

「そういうのも全部まるっと含めて俺のこと好きなんじゃねえのかよ？」

「……」

「……おい、冗談だろ！？　何、本気にしてんだよ怖えな！！」

急に大人しくなってポーッと自分を見つめる頭の悪そうな女に、頭の悪そうな男は慌ててチョップを喰らわせる。

頭の悪そうな女は「エへへ」と照れ臭そうに笑いながら、「進歩」と嬉しそうに笑った。

「マジで性質悪いな！ 何なんだよ！」

「ユメねえ、料理得意だよ？ これ終わったらご飯作ってあげ……」

あゝ ああ ああゝ ああ ああゝ ああ ああ！？

頭の悪そうな女が、あの甘い声からは想像もつかない声量で吼える。

「うっせ……」

頭の悪そうな男は耳を押さえながら、手に持ったピンセットでつかんだ鼓膜をパットのの上に放り投げた。

「あんた何やってん、のよおお、おおっ！！！」

「だーから掃除だろ？ 綺麗さっぱり」

そう言って叫ぶ頭の悪そうな女の頭を無理矢理抑え込み、もう片方の耳にもピンセットをつっこんで無理矢理鼓膜を引き出した。

再び頭の悪そうな女の叫び声が部屋中に響く。

「おゝ強引に引き出した割には綺麗に取れたな。さすがヒナの作ったピンセット」

未だに叫び続ける女を冷めた目で見つめながら、頭の悪そうな男は鼻で笑った。

「ほら、掃除完了だ。耳貸せよ。綿、詰めてやるから」

グイツとアゴを掴んで暴れる頭の悪そうな女の耳を覗き込み、頭の悪そうな男はグイグイと耳に綿を詰めながらため息を吐いてブツブツと愚痴を言い出す。

「なんかよ、俺は押しの強い女に弱えのかもな。いや、押しが強えつつーか……あれだ、この俺が口数少ないなんてありえねえだろ？ 想像つくか？ 口数の少なえ俺なんて。サユちゃんもカナエちゃんも絶対え想像つかねえっていうだろうさ。いつも馬鹿みたいに喋ってんのによ。自覚あんだよ。俺、馬鹿みてえに喋ってんなあつてのは。でも今日はいつもほど喋ってねえだろ？ まあ、あんたはいつも俺の話聞いてねえから分からねえかもしれねえけどよ。いやいや、何でかなんて考えるまでもねえよな？ ヒナもそうなんだけどよ、俺の話を聞こうともしねえ女が苦手なんだ、俺は。あんたもやーっと静かになっただなと思っただけど、ギャンギャン騒いでる所を見ると聞いてもねえんだろ？ つか、鼓膜ねえんだから聞こえねえ

か。しかしあんたも変わってるよなあ。『耳の中を綺麗さっぱり掃除してほしい』だなんて。普通頼まねえぞ?」

頭の悪そうな男は今まで黙っていた分を一気にしゃべると、道具を掃除し始める。

丁寧にピンセットや耳かきについた汚れを拭くと、1本1本箱の中に納めて満足げに片眉を上げた。

そのまま部屋を出ようとして何かを思い出したように振り返り、未だに床にうずくまって両方の耳を押さえながら唸る女を見降ろして口を開く。

「じゃ、俺もう行くわ。あ、もう会わねえとは思っけど一応言っとくな。俺、他人が作った飯食べねえんだわ。悪いな」

真顔でそう言うと、頭の悪そうな男は口笛を吹きながら部屋を出た。

業務終了

## 第七章：招待状

「休業？」

「ええ、以前竜崎様に頂いた情報で、ある程度目星がつかまりましたので、そちらの方を調査しようかと思ひまして。どのくらいかかるかわかりませんので、しばらく休業させて頂こうかと」

「なるほどな」

竜崎は「そりゃ残念だ」と呟くとヒナをジッと見つめて低く熱っぽい声で呟いた。

「アンタに会いたくて掃除を頼んでたのによ」

「そうですか」

「つれねえなあ」

クツクツツと喉の奥で笑う竜崎を無視して、ヒナは捺印済みの契約書をまとめた。

ファイルに入れながらふと朝の出来事を思い出す。

「そう言えば、竜崎様宛の手紙が届いておりました」

「は？」

「何故か私の事務所に」

そう言って懐から黒い封筒を取り出して渡せば、竜崎はわざとらしく口笛を吹いて受け取った。

手近にあったペーパーナイフで封を開ければ、封筒と同じ色の紙が滑り落ちる。

竜崎が封を切ったのを目視したヒナは、用は済んだとばかりに立ちあがった。

「ああ、待ってくれ。今日の夜暇か？俺とデートしてほしいんだけど」

「嫌です」

「まあ、そう言っつな。この手紙も全く無関係って訳じゃなさそうだぜ？」

ヒラヒラと黒い紙をふる竜崎を忌々しげに見つめ、ヒナはため息を吐いた。

「ではデートではなくサービス残業ですね」

「アンタ、本当につれねえなあ」

「内容によってはすぐ帰らせて頂きます」

「あんまツンツンすんなよ。男が逃げるぞ」

「私の人生に男は必要ありません。守って頂かなくても私は一人で生きていける」

「そんなことを言ってるじゃねえさ。なんだ？ それとも嫌な目にも会わされたのか？ 今日随分喋るじゃねえか」

「……帰ります」

鞆を勢いよく閉めると、ヒナは席を立って苛立たしげにドアへ向かった。

背後から「今日の夜8時、銀座B5出口」と聞こえた声を無視して、ヒナは思いつきりドアを閉める。

\* \* \* \* \*

「俺はてつきり来ねえんじやねえかと」

「私の為です」

「そうか」

「そうですね」

竜崎の案内で連れてこられたのは、三ツ星レストランと名高いフランス料理店だった。

品質の良い店員に案内されて通された席は、程良く人の視線から遠ざかれる場所。

ペリエを頼んですぐ、竜崎は黒い封筒を差し出した。

「趣味の悪い奴だ」

ヒナはサッと目を通し、その醜悪さに思わず顔をしかめた。

- - - - -

竜崎 識 様

現在調査されている内容ですが、早急に手を引いて頂けないでしょうか？

貴殿が関わっている女は頭のいかれた殺人鬼です。

精神世界に取り込まれませぬよう、お気を付け下さいませ。

狂は伝染致します。



「例えば、私の秘密に関わろうとしている貴方を、あわよくば私が殺さないかなと思っっているとか」

「アンタの秘密は魅力的だけだよ、この差出人は俺に警告してるんだぜ？ 死ぬのを望んでるならどうして警告する」

「逆の効果を望むが為に、思っても無いことを言っつてよくある話じゃないですか。失敗するのを分かっつて『告白すればいいじゃん』って言う女と同じですよ」

「……なるほどな。で？ アンタ、俺が秘密を知ったら殺すのかよ」

「そうですね」

「あっさりしてんなあ」

竜崎は困ったように笑うと、いつの間にかテーブルに置かれたワインに口を付けた。

「例えばそのワイン。うっかり飲んだが為にお亡くなりになるかもしれない」

「……」

「……」と言っつて何となく嫌な気持ちになり、口をぬぐったそのナプキン。ワインに毒は入っていないのに、誘導に引っ掛かってお亡くなりになるかもしれない」

「アンタ ……」

「私は貴方をいつでも殺せるということですよ」

竜崎はごくりと生唾を飲むと、短くため息を吐いた。

グラスの中で揺れるワインを眺めながら、竜崎は視線を合わせず口を開く。

「アンタ、滅茶苦茶ビビりだろ？ 何から逃げてんのか知らねえけど、男つてのは逃げられると追いかけたくなるもんだ」

「例え自分が死ぬとしてもですか」

「好きな女の為ならするさ。俺はそれくらいでビビって逃げてるうちに失う方がよっぽど怖えよ」

「そう簡単に人を好きになるものなんですか？」

「好きになるタイミングも理由も人それぞれだろ？」

「なら押し付けしないで下さい。私はその『タイミング』とやらが遅いんです」

「遅い方に合わせてチンタラしてられっか。良い女を狙う猛獣つてのは1人じゃねえ。その『タイミングが遅い』つて言うのもあてにならねえよ。そう言う奴に限ってコロッとイっちゃまうもんだ」

「……もういいです。もう……ていうか……なんか、この際、貴方

が私をどう思ってるかは本当にどうでもいいんです。でも、こっ…  
…なんか、貴方物凄く胡散臭いんですね。好きになられた方に信  
じてもらえないのでは？」

「おいおい、自分が好きになられたって自覚はなしか？」

「自覚云々以前の話です。貴方は軽すぎる」

「ガードが固え女には信用してもらえねえだろうなあ」

「あら、意外ですね。自覚がありがたい様で」

フツと嘲笑の笑みを浮かべ、ヒナはペリエを一口飲んだ。

「アンタ、心の線引きが恐ろしく広いな。内側に入ったと思って騙  
されてる奴が沢山いるんじゃないかねえのか？」

「なんですか、心の線引きって。意外とロマンチストなんですね」

「男は皆ロマンチストさ」

「そうですね」

「で？ アンタに殺されないようにジワジワと線の内側へ入ろうと  
思ってるんだけどよ、どうすりゃいいか分からねえわけだよ。いま  
でこんな難攻不落の女みるのは初めてなもんでな」

「知りませんよそんなの。私は女をおとしたことなんてありません

から」

「だろうなあ。今日のこれもデートだなんて微塵も思ってたさそう  
だ」

「サービス残業です」

「でも今まで会った奴の中で一番喋りやすいんじゃないのか？」

「それは貴方が喧嘩腰だからでしょう？」

「喧嘩売ってる気はねえけど、興味がねえなら黙って去ればいい。  
そうしないのは、少なからず他のやつより線の内側にいるってこと  
じゃねえのか？」

そう言った瞬間、ヒナの顔からサツと表情が消えた。

「では帰ります」

「おいおい、ガキじゃねえんだ。安い挑発に乗るな」

「安くて結構」

「悪かったよ。そう怒るな。もう少し付き合ってくれ」

「嫌です」

「まあ待て」

「手を離しなさい」

「待てって言って ……」

ポタリポタリと真つ赤な液体が滴り落ちる。

竜崎は呆然とした表情のままヒナを見上げ、困ったように笑った。

「怒らせちゃった」

ヒナはそれを無視して竜崎に掴まれた腕を振り払うと、鞆を取り上げて店を後にした。

入れ違いに席へやって来たボーイが驚愕の眼差しを竜崎へ向ける。そして一瞬の後にそれをしまい、竜崎へナプキンを差し出した。

「悪いな」

「お客様、何か濡れた「いや、いい」

手を上げてボーイを遮ると、竜崎は煙草をくわえながらライターを探す。

「ここまでかぶつちまったら落ちねえさ。たいしたスーツじゃねえから別にいいんだけどよ。女にワインかけられて1人寂しくたたずむ男なんざ、カッコ悪くてこれ以上いらねえし。悪いけど帰るわ」

竜崎はテーブルの上に数枚の札を置くと、ゆっくり立ちあがって店を後にした。

## 第八章：生きてる幽霊

「貴方達の生命力には感服だわ」

空は汚い練色をしていて、空気は今にも大粒の雫を垂らしてきそうな臭いがした。

見上げる汚い屋敷は数ヶ月前に草刈りをしたというのに、もうボサボサと雑草が生えはじめている。

甘くすえた臭いが充満していて、嗅ぎ慣れたそれは湿気で濃厚になり、ヒナの嗅覚を鈍らせた。

従業員が消えてヒナが掃除をしに行った時、屋敷は今よりだいぶ汚かった。

掃除をしていたとはいえ終ったわけではなかった為、最後まで片付けるのにだいぶ神経を使った覚えがある。

この屋敷には、確実に何かがある……。

「やっぱり手で抜くんじゃなくて除草剤を撒くべきだったわね。買い取るつもりがなかったとはいえ、あの時の妥協が私生活に食い込んでくるとは思わなかったわ」

ブツブツと1人で愚痴を言いながら、馬鹿みたいに安い金で買い取った屋敷の鍵を握りしめる。

「住むわけではないけど不愉快だわ」

鍵穴に鍵をねじ込み、いささか乱暴に鍵をひねる。

錆付いたドアをこじ開け、やたらあちこちが錆付いているのに違和感を感じた。

（たった数カ月でここまで錆付くわけない）

ここ数カ月、雨は降っていない。

湿気を帯びるような地帯でもないし、海が近いわけでもない。

（やっぱりこの屋敷にいる ……）

屋敷内に一歩踏み込んだ瞬間に感じる違和感。

普段自分が作り出す空間とは異なる、異空間。

冷やりと重い空気が、ヒナを包み込むように覆う。

「……」

数ヶ月前に掃除したあの屋敷内は、姿形はそのままだった。ただ、前に来た時よりも濃厚な空気が屋敷中を満たしている。まわりつく様なそれは、異物を排除しようとしているようにも、取り込もうとしているようにも見えた。

この屋敷の前の所有者は『池上 拓真』という中年の男だったらしい。

戸籍が無いというのは本当で、どうやったら国に知られず中年になれるのか分からないが、生まれた時から無かったようだ。

病院かかることもなかったらしく、ある筋の話によるとそれが原因で病死したと言われている。

(臭う……)

取りだしたハンカチで鼻と口を覆い、ギシギシと音を立てて2階へ上がった。

真っ赤な扉が、相変わらずの風貌でそこにある。

ただ、その赤は非常に生々しく、まるで血に濡れているようだった。頭のおかしい危険人物として近所には認識されていたようだが、実際彼は天才すぎたのではないかと思っている。

恐らく彼が塗りつぶしたであろう真っ赤な扉は、似たような脳構造を持つ者にだけ解る暗号のように見えた。

「ヒナ」

「……あんた何でここにいるのよ」

「お前の精神がよれてるからだよ」

フツと湧いて出たヒゲの男は、「当たり前だ」と言いたげな顔でヒナを見つめる。

ヒナはそれを脂汗をかきながら睨んだ。

「お前さんがおかしくなると、俺らにモロに影響がでるから勘弁してくれ。俺らがいなくなつて困るのはお前さんだろ？」

「私はおかしくなんかならないわ」

「もう片足を突っ込んで」

「ならないつたら!!」

「いいか、ヒナ」

ヒゲの男は両手でヒナの顔を包み込むと、視線を合わせてゆっくり喋り出した。

「足の代用品はいくらでもある。でも、頭の代用品はねえんだ。忘れるな」

「……忘れて……ない……」

「ならいい」

「でも、私の一部を持って行かれたようでムカつくのよ」

「『ようで』じゃない。実際そうなんだ。お前さんには見えるだろう？ あの扉から生える無数の腕が。思考が侵される前に相手を消すしかない。じゃなきゃ、お前さんが消えちまう。なんせもう大分浸食されてんだからな」

「だから……殺してやるつってんのよ……戸籍のない男なんて、いなくなっても誰も気付かない」

「『生きているなら』な」

「死んでたつて構わないわ。二度死ねばいい。むしろ、死んでるなら都合が良いじゃない」

ヒナはフウと長いため息を吐いて、震える声で憎々しげに呟いた。

「あつちの世界なら、私の庭よ」

「……………」

ヒゲの男が口を開けた瞬間、ジジッとぶれて姿を変えた。

「あまり過信するなよ？ ヒナちゃん。テメエは血が濃いから心配  
だぜ」

頭の悪そうな男に姿を変えたソレは、ヒナを小馬鹿にしたように笑う。

それを皮切りに、ソレは次々と姿を変えた。

「お姉さんがブレーキになってあげたいけど、姿を保つのが精いっぱいみたい」

「ななな何かが……じゃ、邪魔を……し、してっ……してるんではないか？」

「ヒナちゃん、気を付けた方がよございますな。嫌な予感しかない」

「ヒナちゃん……」

「ヒナ」

「ヒナ」

「ヒナ」

「ヒナ」

「ヒナ」

「ヒナ」

「ヒナ」

「ヒナ」

ぐるぐるぐるぐると恐ろしいスピードで目の前のソレは姿を変える。段々ソレの目に血が滲み、その血がぼたりと垂れた瞬間、目の前のソレは人のよさそうな女の姿になった。人のよさそうな女のグズグズに崩れた顔が歪む。

「たずげで ……」

ハアハアと荒い息を吐きながら、ヒナは床に座り込んだ。

「必ず …… 助けるわ ……」

ポツリと呟くと、大きな音を立てて赤い扉が勢いよく開き、中から這い出てきた大量の髪の毛がヒナを部屋の中へ引きずり込んだ。

\* \* \* \* \*

部屋の中は大量の髪の毛に覆い尽くされていて、息もできない程密集していた。  
まるで生きているかのように意思を持って動き、ギチギチと音を立てて締め上げては緩みを繰り返している。

(息が……！)

パニックになりそうな脳をなんとか叱咤して、目をつぶって自分の空間を広げる。

その瞬間、部屋の中の空気が変わり、音が消えた。  
フツと灯された炎があつという間に髪に炎が燃え広がり、部屋に広がる髪を全て焼きつくす。

「……っはぁ……っう……」

荒い息を吐きながらヨロヨロと立ち上がれば、部屋の隅へ髪の毛が引き上げていくのが見えた。  
するとどこからともなく野太いしわがれた男の声が響く。

「まさか生きた屍に会えるとは」

「アンタが池上？ 随分舐めた真似を……私の一部を返してくれるかしら」

ぼつりと置かれた椅子を睨みつけ、ヒナは再び空間を広げる。  
ねっとりとしたビニール風船の様なものが徐々に椅子に近づく。  
その度に、椅子はガタガタと音を立てて激しく揺れた。  
やがてその椅子が包み込まれた瞬間、獣の咆哮の様な音が部屋中に響き渡る。

椅子は激しく揺れ、時折ヒビ割れながら横倒しになった。  
その椅子へ足をかけると、ヒナはニヤリと笑って思いっきり蹴っ飛ばす。

「貴方、死んでいるのでしょうか？ 死人如きが生きた人間に勝てる  
とでも？」

「お前は自分が生きているとでも？」

「!?!?」

前方から聞こえていたはずの聲が急に後ろから聞こえ、慌ててそこからを向くと天井から吊るされた髪の毛のロープで首をくくった男が、ニヤニヤと笑いながらこちらを見ていた。

「初めまして、生きた屍のお嬢さん。私が池上だ。戸籍がないから証明はできないが、いちいち言わなくてもお前は私のことをよく知っているだろう？ さて、何故私がお前に興味を持ったか教えてあげようか？」

時折ビクリビクリと痙攣しながら、池上は視線の定まらない目で空間をぼんやりと見つめている。

「ひとつ面白い話をしてやろう。あっちの世界の話だ。お前が思っているような『あっち』ではなくて、世に言う『死後の世界』というやつだ。向こうでは今面白い話が持ち上がっていてね、死臭をプンプンさせた女が、未だに生きたままで歩きまわってるって話だ。実に興味深いと思わないか？ 生きているのに死んでるのか、死んでいるのに生きているのか、どちらでもいいが随分とあさましい話だ。生きていようが死んでいようが人間にはそれぞれスペースが与えられるのは知っているか？ 例えば、賢い人間。奴らにはそれなりの地位が与えられ、それ相応の努力が必要だが弁護士、医者、クリエーターと世界中で活躍できるようになっている。逆に愚かな人間。奴らにはほとんどスペースが与えられない。窮屈な場所に押し込められて、地を這って上を見るばかりだ。善人には良いスペースを悪人には粗悪なスペースを。何がどれに割り振られるかは決まっています、どれを選択するかは自分次第。当然、犯罪者を犯すような

人間は ……」

「死人のくせに喋りすぎよ」

池上は一瞬ポカンとすると笑いだし、可笑しくてたまらないと言った風に笑い続ける。

そうして苦しそうに「なるほど、お前もそう思うか。生前良く言われた言葉だ」と漏らした。

「いやはや……しかし、お前は本当に自分が生きているとでも？」

つうつとヒナの背中に冷たい物がつたつた。

「……………」

「お前はあの時死んでいたのではないのか？」

「……っ」

「強く死を望むあまり、他人を殺してしまいたくなるんだろう？」

「……っは」

「だが望む前から死んでいると気付かなかったのか？」

「っはぁ……」

「死にたがりの癖に死んだことにすら気付かないだなんて」

「……っふ……っう」

「お前は「口を開くな……」！」

パンッ

男の頭が爆ぜる。

鼻から上が吹き飛んだ男は、残った口で器用に喋った。

「それとも、お前は死にたいのではなくて死が観たいのかい？」

「……あ……う……」

「だから殺したのだろう？」

ガクガクとヒナの膝が笑い、床へ崩れ落ちる。

「死が……死……私は……あの時……」

殺  
し  
て  
し  
ま  
っ

「あんま俺の好きな女いじめねえでくれねえかな」

その声と同時に、吊るされた男が床へ引きずり降ろされる。

「りゅ……ぞ……」

現れた竜崎はパシャッと勢いよく灯油をかけると、火を放った。  
男が燃えながら悶えるのを眺めて、困ったように笑うとヒナを見た。

「頭飛んでるのに喋れてんだ。人間じゃねえから殺人罪は適応されねえよな？」

\* \* \* \* \*

「……聞いていたのでしょう」

「何を？」

「とぼけないで下さい」

「何が？ 何も聞いてねえよ？ まあ、そりゃ、何で部屋に火を付けたのに焦げ跡一つねえんだとか、頭ねえのに喋り続ける人間がいるんだとか、聞いてえことは山のようにあるけどよ」

「……………」

アハハと大笑いする竜崎を見て、ヒナは顔をしかめた。  
2人で壁に寄り掛かって座りながら、ぼうつと窓の外を眺める。

「いやしかし…………俺あ幽霊なんざ初めて見たぜ。てつきりお経だとか十字架だとか聖水みたいなモンでしか退治できねえんだと思ってただけどなあ」

「どうして入って来れたんです」

「『どう』って…………そりゃ鍵が開いてりゃ普通に入れるだろ。おつと、不法侵入だなんて言うなよ？」

「そうじゃなくて…………もういいです」

「それよか、アンタこんなとこで何やってたんだ？ 従業員探しはどうしたんだよ」

「してたじゃないですか」

「へえ？ てつきり俺は心霊スポット巡りでもしてるのかと  
…」

「そういう風に見えましたか。貴方には」

「おいおい、そう怒んなって」

慌てたように竜崎が言えば、ヒナはヨロヨロと立ち上がって部屋を出た。

「おい！ 怒ったのかよー？」

「怒ってません」

「怒ってんじゃねえか」

「怒ってませんってば」

そう言っただけで、竜崎は、足を踏み鳴らして階段を下りるヒナを苦笑しながら見つめる。

フとその背中を真顔で見つめると、ヒナに声をかけた。

「なあ、こゝ寝美ねえの？」

「はあ？」

盛大に歪んだ顔を向けられ、竜崎は再び苦笑した。

「男つてのはご褒美があると頑張れるんだけどな」

「いらないでしょう。大体何を頑張るんです」

「色々だよ。なあ、くれよご褒美」

「そう言うのって自分から要求するものなんですか？ 図々しい人ですね」

「少しでも俺に感謝してるなら、恩義を感じているならくれよ」

そう言えば、ヒナの動きがピタリと止まった。

「アンタが助けてもらったのに『ありがてえ』と微塵も思ってたねえならいいんだけどよ」

「……………」

「恩をあだで返すとまでは言わねえさ。考え方は人それぞれだしな。それでももし、アンタが『わかりましたよ』」

キッと睨みつけるヒナを見て、竜崎は「おっ」と嬉しそうに笑った。

「金ですか？ いくらですか？」

「色気がねえなあ」

「ご褒美に色気なんて必要ないでしょうに。そういうのがお望みであればキャバクラでも風俗でも接待しますが？」

「アンタがしてくれてもいいんだけどな？」

「殺されたいんですか？」

「顔赤くして言われても煽ってると思えねえよ」

「……もういいです」

「ちよっちよっちよ……！！」

身をひるがえすヒナを慌てて引きとめると、竜崎はため息を吐いた。

「やめるよな、その『もういいです』っつーの。拒絶すんじゃない」

「何なんですか貴方！！ 回りくどくてイライラするんですが！」

「『ヒナ』って呼ばせる」

「ああ！？」

「『ああ!?!』って……女がんなドスの利いた声出すなよ……」

「名前くらいいくらでも呼べばよろしいでしょう!?!」

「つつても、アンタ、親しくないのがそう呼んだら怒るだろう?」

「当たり前じゃないですか!」

「だから許可得るんだろうが」

「だから好きにしるって言うてるでしょう!」

「違う、本心でだ」

「何なんですか!?! 本当に! わ、私は……ああ、もう!?! 好きにしたらいいじゃないですか馬鹿ですか!?! 気持ち悪い!」

「おいおい……酷い言い草だな……素直に『貴方になら呼ばれても不愉快な思いはしません』って言えば俺もキスの1つくらいしてやるのに」

「いいりませんよ!?!」

竜崎は嬉しそうにアハハと笑うと、ヒナの頭をポンポン叩いた。

「ヒナ、次は俺のことを名前で呼ぶように頑張れ」

「何で私が頑張る必要があるんですか!?! そう呼ばせたいのなら、

呼びたくなるように貴方が頑張ればいいじゃないで ……」

竜崎はニヤリと笑う。

「言ったな？」

ヒナは顔を真っ赤にして怒りを露わに背を向けると、震える声でぽつりと呟いた。

「貴方、嫌いです」

「『嫌い』なんじゃねえよ。『怖い』んだ」

クックツツと喉の奥で笑うと、竜崎は嬉しそうにヒナを見つめる。

「いずれお前は俺なしじゃ生きていけなくなる」

耳元でそう呟くと、竜崎は殴られる前に家を出た。

**Project File No. 0012 (前書き)**

業務担当：ヒナ

業務内容：クビ切り

「ヒナはもう限界だと思うのだけど」

「……」

良い女はにこやかにヒナを見つめる。

「お別れよ」

「……」

「私が適当に消すわ。それでいいでしょう？ ああ、途中で消えちゃったあの子は別に良いわね。結局戻ってこなかったし」

「……」

呆然と窓の外を見続けるヒナに苦笑しながら、良い女はひたすらヒナを見つめていた。

「半分以上がいいと思うのよ。だから……。」

「私が消す」

そういうのと同時に、ヒナはサバイバルナイフで良い女の胸を深く突き刺し、間髪入れずクビを切り裂く。

「貴女はクビよ」

「……分かったわ」

良い女はニツコリと微笑むと、崩れ落ちて動かなくなった。

「今までありがとう」

「おいヒナあゝ！ クビを賭けた面談があるって聞いたぜ？」

「……ええ」

頭の悪そうな男がニヤニヤと笑いながら良い女を足で軽く小突く。

「次は誰が面談するんだよ」

「女は全員クビよ。優しさはいらないもの」

「そうかよ」

どこからともなく現れたおばちゃん、物静かな女、それに態度ので

かい女はそれぞれ薄っすら笑いながらヒナを取り囲んだ。

「あたしはヒナちゃんと一緒に仕事できて嬉しかったんだけどねえ！  
まるで娘みたいなんだもの〜！ ハア〜残念だわ〜」

「社長、今までお世話になりました」

「アーンタ、あたしを切るってデカイわよ！？ 分かってんの？」

「……皆さん、今までお疲れ様でした」

「決意は固いつてわけね」

ヒナは態度のでかい女の言葉にゆっくり頷くと、1人1本ロープを渡した。

それぞれがそれを天井につりさげ、輪になった部分に首を通す。部屋に、ロープがしなる音が響いた。

「年寄りにも用は無いんでございましょうな？」

「……」  
「ごめんなさい」

「いやいや！ 謝らないでくださいませえ！ そう言う意味じゃございせんよ。今までご一緒できて、幸せでございました」

「……」  
「お疲れ様でした」

じーさんは「へえ、お疲れ様です」と呟くと、サバイバルナイフで腹を裂いた。

そのまま傷口から手を入れると一気に内臓を引きずり出す。じーさんはうつ伏せに倒れると動かなくなった。

「まあ、俺も普通の会社じゃリストラ候補だからな」

冴えない男はへっへと笑うと、良い女の胸元に手を突っ込んで銃を取りだした。  
そうしてそれをそのまま頭にあてる。

「これでいいんですよ？ 社長」

「……お疲れ様でした」

「じゃ、また会うことがあったらよろしくお願いしますよ」

乾いた音が部屋に響く。

「ぼぼぼ僕もっ……くっく……クビでしょうか……？」

「いえ、貴方には残ってほしいわ。貴方の残忍さが必要な」

「えっ……あ、あ……はい……」

「ええ〜!? マジっすかあ! じゃあ俺は? 自分はどっつスカ?」

「お前はアウトだろう! だってよ、お前何の役にもたつてねえじやねえか。その点、俺は色々と役に立ってるけどよ。なんせこのナリだろ? アンダーグラウンドは俺の庭って言うかよ。その手の仕事は俺にしかできねえもんなあ。つかよ、残ってるのがヒゲとバカとオタクって……ヒナお前どんな人選したらそうなるんだ。頭良いキヤラ俺しかいねえじゃん! お前、こいつらまとめんの苦労するぞ〜? なんせヒゲは協調性がねえしよ、オタクはどもってばっかだろ? このバカは元気が良けりゃなんでもいいとか思ってるもんな」

「私が一番心配なのは貴方よ」

「ええ!?!」

「でも貴方の言うとおり裏通りには貴方が丁度いいわ」

「それだけ……!?!? それがなかったら俺はクビだったのかよ!?!」

頭の悪そうな男は信じられないと言った表情でヒナを見つめる。  
今時の男はそれを見て笑いながら、病的な男に何かを話しかけていた。

「おい、お前もなんか言っつてやれよヒゲ!」

「ヒナ、俺はお前さんの為に何をすればいい？」

「そこか！？ そこじゃねえだろ！」

騒ぐ頭の悪そうな男を無視して、ヒゲの男はヒナをジッと見つめた。

「貴方のエンバーミングの腕は世界一だと思う。死んだ人間を生き  
た人間みたいに見せる芸当はなかなかできないと思うし、仕事は織  
細で丁寧だし、貴方の大人の余裕も気に入っているの。だから

……」

「分かった。お前さんのストッパーになってやる」

「……ありがとう」

「俺は何をやればいいっすかね」

「貴方は人見知りしない所が好きよ。誰にでも仲良さげに話すのは、  
私にはできないもの」

「諜報ってことまで？」

「よろしく」

「了解っす」

ヒナは深いため息を吐いてソファに座る。

話は済んだと判断した男達は、それぞれ部屋を出た。  
その際、ヒナは病的な男を呼びとめると、ノートパソコンを放り投げた。

それを慌てて受け取り、ため息を吐く病的な男。

「貴方は外に出なくていい。とにかく色々な情報が欲しいの」

「ははははい……！ わ、わかっ、わかりました……！」

パソコンを胸に抱きかかえ、病的な男は部屋のドアを閉めた。  
足元に転がる見なれた姿を見つめ、ポタリポタリと頬を涙が伝うのに気づいた。

「ごめんなさい……でも、何かが変なの。自分を維持できないの……  
……ごめんなさ……」

ソファの上で膝を抱え込み、頭を足の間にうずめる。  
深く息を吸って吐いた瞬間、部屋のドアが開けられた。

「……1人で何やってんだ、アンタ」

ドアの向こうには、啞然とした表情の竜崎が立ちすくんでいた。

「声がしたから、てっきり誰かいるのかと……」

「……従業員がいたんです」

「……見当たらねえけど」

「何名か、クビにしました」

「何でまた。経営不振なんて言うなよ？」

「……それが必要だったんです」

「……そうか、まあ、人の経営に口出しはしねえけど……」

「……貴方はいつも私の意思とは関係なく入ってくるんですね」

「あ？」

「何の用だったんですか？」

「ああ、お宅の社長さんに会いたくてな」

そう言うと断りも無く中に入り、ソファへ座り込んだ。

ヒナはお茶を出す為に立ちあがる。

「ちよいとやつかいな仕事なんで、挨拶しときたいんだわ」

「いりませんよ」

「いるだろ。なんせお宅の従業員が死ぬかもしれないねえ」

「必要ないです。もとより死んで当たり前だと思ってますから」

「んな寂しいこと言うなよ」

紅茶が見当たらず、代わりにコーヒーを入れる用意をしていたヒナは、竜崎の言葉に思わず笑った。

「社長がそう言ってるんだから、いいんですよ」

「そうなのか？　なんて社長だ……従業員を大事にしねえと泣きを見るぜ」

「大丈夫です」

「……」

噛み合っているようで噛み合わない会話に微妙そうな顔をしてる竜崎を見て再びヒナは笑う。

「社長、私なんです」

「……………あ？」

「秘書兼社長というか、社長兼秘書というか……………あと、ついでに従業員というか」

その言葉に、竜崎は手に持っていた煙草を取り落とした。

「……………こりゃ驚いた」

心底驚いたような表情を見て、ヒナはとうとう吹き出した。

業務終了

Project File No. 0013 (前書き)

業務担当：ヒゲの男

業務内容：辻斬りの後始末

「悪いな、兄ちゃん。こいつ、身内いねえから俺が吊ってやらねえといけねえんだ。俺が一番面倒診てたし、竜崎さんからアンタが適任だって聞いたもんだからよ」

ヒゲの男は複数個所を切り裂かれた男を綺麗に縫い合わせていた。その後ろでそれを見ないようにしながら鼻と目を真っ赤にした短髪の男が陽気に喋る。

「ついでに辻斬りも掃除してくれんだろ？ ま、こっちは危ねえからやらなくてもいいって話らしいじゃねえか。なもんで別にそれほど期待はしてねえんだけどよ。まあ、個人的な感情でいくと綺麗さっぱり消してほしい訳だわ」

「それが例えアンタの親だとしてもか？」

「……あ？」

「愛する恋人でも、自分のガキでも、敬愛する竜崎さんでも何でもいい。とにかくアンタにとって仏さんより特別な存在でも綺麗さっぱり消していいのかっつってんだ」

「……何言つてんだテメエ」

「前にな、ある女からストーカーを殺してくれって依頼があった。結論から言やあ依頼人の恋人だったんだよ。そのストーカーって奴

は。ま、依頼人はそうと知らずに依頼したわけだが、それでえらい揉めてな。泣くわ叫ぶわで大変だったんだ。その後、腹いせに目の前で自殺しやがった」

面白く無さそうにため息をつけば、短髪の男はヒゲの男を見つめながら生唾を飲み込んだ。

「ま、まあ……こいつより特別な奴つてのが誰か分からねえけど……思い当たる中でそんなことするような人間はいねえよ」

「じゃあ見つけたら消す」

「あ……ああ……いや、待て！ 待ってくれ！ そ、それは……殺る直前で俺に確認を取るとかできないのか？」

「……取ってもいいが、その間に逃げられることだってある。そう言うのは迷わず躊躇わずサクッと殺っちまうからいいんだ。隙がありゃその分相手にチャンスを与えることになるだろ？ まして、相手が俺より強い場合は特にだ」

「いいとかそう言う問題なのかよ……」

短髪の男は引きつった表情でヒゲの男を見つめ、軽く頭を振った。

「というか、これは竜崎さんからの依頼なんだな。正直アンタがどうこう言ったって聞けないんだけどよ」



「まさかアンタまで俺がお世話するとは思わなかった」

フツと口の端で笑うと、ヒゲの男は真つ赤に彩られた短髪の男の衣服を脱がせ始めた。

人形のように色を失った短髪の男は、ただ沈黙している。

「最近俺の仕事がこんなんばっかで退屈してんだよ。アンタのオトモダチってのは結局喋らなくてなあ。あ、俺は生きた人間意外の聲が聞こえるんだ」

丁寧に洗淨をしながら、赤く色付いた水が排水溝へ流れていくのを眺める。

小さくため息を吐いて空中をポーっと思つめた。

「犯人捜しくらい協力してくれりゃ、俺の仕事も楽になったんだけどよ。アンタも随分静かだなあ」

傷口にグイグイと指を突っ込みながら、ヒゲの男は何かを思い出したように「あ」と呟いた。

「そついや、すっかり言い忘れてたことがあるんだ。ほら、これ。見たことあるんじゃないかねえか？ アンタんとこの店の制服についてる

カフスだろ？ アンタのオトモダチの口の中に入れてよ。いやあ、失敗した。聞けば何か分かったかもなあ」

指さすのはテーブルの上に置かれた黒光りしたカフス。竜崎の、そして短髪の男達の務める店のロゴが入っている。

「犯人はアンタんとこの誰かかもなあ……嫌な予感程あたるっていうけど、アンタのオトモダチより特別な存在だから黙ってるなんてこたあねえよな？ そんな三文芝居勘弁してくれよ」

ヒゲの男はため息を吐くと、処置道具を入れた鞆の中身を広げた。鈍い銀色に輝くそれは、部屋の照明を反射してギラギラと光る。その中からピンセットをつまむと、ヒゲの男は再びため息を吐いた。

「だんまりか」

\* \* \* \* \*

「……………」

ヒゲの男が処置を終えて煙草をふかしている所へ、竜崎がやってきて隣へ腰掛けた。

「随分綺麗になるんだな」

「仕事だからな」

「そうか……で？」

「まだだ。だが大体の目星は付いてる」

「ほう」

2人を殺した辻斬りの事だろうと思ってそう返答すれば、竜崎は面白そうな表情をした。

「うちのカフスが見つかったらしいじゃねえか」

「良くご存じで」

「でっけえ独り言が聞えてきたからな」

クックツツと喉の奥で笑うと、竜崎は急に真顔に戻った。

「カフスって事は黒服だ。うちは黒服にしかカフスを与えてねえ」  
「へえ？」

「黒服の人数には限りがある。身内同士の揉め事は嫌いだからよ、悪戯っ子をあぶり出す為なら多少乱暴なことしても構わねえ」

「随分怖いな」

「賤けにや敵しいんだ、俺は」

「誰かがはめたって可能性もあるだろうに」

「なら考えうる可能性全てを潰せ」

「やらなくてもいい依頼だろ？」

そう言つて竜崎を見れば、竜崎はテーブルに黒名刺を放り投げた。

「絶対に見つけ出せ」

「……了解」

\* \* \* \* \*

「よお、ヒナ。遊びに来たぜ」

「依頼以外でしたらお帰り下さい」

「冷たいこと言うな。アタんとこのヒゲの男に依頼した内容がどうなったかと思ってな」

「ああ……」

ヒナは渋い顔をしてため息を吐いた。

「その顔だと特に進捗はねえか？」

「いえ、ありましたよ。少なくとも犯人の顔は見たと」

「……ほお？」

「その代わり傷を負って帰って来ましたが」

「は？」

「腹を挟られました」

「おいおい……」

忌々しげにため息を吐くヒナを見ながら、竜崎は心配そうな顔をした。

「入院中か？」

「いいえ。自宅療養中です」

「はあ？」

「あんな傷で病院なんて行けるわけないじゃないですか」

「そりゃそうだが……」

「我が社始まって以来の依頼失敗でご迷惑おかけします」

「なんだか随分ひねた言い方だな……」

「そうでしょうか」

「そうだろ」

「だとしたら馬鹿にされたような気がして腹が立っているだけです」

「それみろ」

「黙ってくれませんか」

「おいおい、八つ当たりするな」

「こんな屈辱あの時……」

「ん？」

「戯言です。これ以上貴方と話していると、余計なことまで言いそうなので帰って下さい」

不貞腐れたような表情のヒナを見て、竜崎は思わず笑う。それに気付いたヒナは、余計に眉間のしわを濃くした。

「心配しなくても、見つけ次第殺しますよ」

「できんのかよ」

「二度はありません」

「……へえ、お手並み拝見と行こうか」

竜崎はおかしそうに笑うと、手を振って出ていった。

業務終了

## 第九章：過去

「まーたヒナさんのこと調べてるんですか？」

「まあな」

「あんまやると嫌われちゃいますよ」

「そうかもな」

まるでそんなことまるで気にしていないかのような顔をしながら、竜崎はパソコンに向かっていた。

カタカタとキーボードをいじる音だけが部屋に響く。

「なんか面白いこと分かりましたか？」

「んー……？ フフッ」

「え？ 何か分かったんですか？」

「ああ、懐かしいな……ちょっと出てくる」

「はあ？」

そう言うと竜崎はジャケットを羽織り、財布をポケットに突っ込むと部屋を出ていった。

\* \* \* \* \*

「よう親父」

「懐かしい奴が来たもんだ。今さらあ何しに来た」

「相変わらずボロイ店だぜ。よく潰れなかったな」

グルっと見渡せば、ホコリをかぶった本が今にも本棚ごと倒れてき  
そうなほど傾いている。

「副業が儲かるんでなあ」

「あゝ……あんたアレまだやってたのか」

竜崎は苦笑しながら煙草の火を消した。

「お前、それが目当てで来たんだろ？」

「分かってんだっいたら中入れろ」

「誰に向かって口きいてんだ。テメエも偉くなったもんだなあ。昔  
は俺が食わしてやってたつてのによお」

「わーかってる。ほら」

財布から何枚かお金を抜くと竜崎は店主に渡し、店の奥の扉を開けて中へ入って行く。

店主はその後ろ姿を眺め、竜崎がさらに奥の部屋へ入った所で扉を閉めて鍵をかけた。

\* \* \* \* \*

パラリ

パラリ

部屋の中に薄汚い本のページをめくる音が響く。  
あれだけうるさかった街の音は全く聞こえない。

「……」

あるページでめくる手がとまり、竜崎はスッと目を細める。

「なるほどな」

「何がだよ」

「……！」

声に驚いて振り向けば、いつの間にか店主が立っていた。

「どっから湧いた……気色悪いジジイだ」

「俺ン家だ。どこにいようと俺の勝手だろ。で、今度は何調べてんだあ？ ん？」

「女」

店主は「女あ？」と訝しげな顔をして竜崎を睨む。

「お前にそこまでさせる女がいるたあな。噂通りだ」

「噂？」

「獅子の牙が抜けたってえ噂だぜ？」

「馬鹿言つな」

クックツとおかしそうに笑うと、竜崎は本を本棚に戻した。

「で、その女は凶悪犯ってえことかい」

「いや、別に」

「じゃあ被害者か」

「どうだろうな」

「ここの本棚にはそんなのしかねえぞ」

「……今日はやけに詮索するじゃねえか」

「俺はお前に女ができるなんて、これっぽっちも思ってたからなあ」

竜崎は嬉しそうに「親心だ」という店主を見て苦笑すると、小さく「ばーか」と呟いた。

「別に付き合ってたりするわけじゃねえさ」

「んだよ。ホントに牙抜けてんじゃねえか」

「大事にしてえんだよ」

「ガキがクセエこと言ってんじゃねえ」

そう言つと店主は小さな鍵を放つた。  
竜崎はそれを上手に受け取ると、高い位置にポツンとある窓から入る日に透かす。

「奥の本棚の鍵だ」

「へえ？ 開けていいのかよ。親父の大事な本棚だろ」

「……好きにしる。今までそうしたきたようにな」

「……」

竜崎は部屋を出ていく店主の背中を睨みつけ、フンと鼻で笑つた。

「お見通しつてか……嫌な野郎だ」

\* \* \* \* \*

「親父、帰るぜ」

「おっ」

竜崎が部屋から出るとあたりは既に暗くなっており、街のネオンが

毒々しく光っていた。

「ああ、そうだ。最近辻斬りがでるって噂知ってるか？」

「……ま、ここいらじゃ有名だからな」

「斬られねえように気をつけろよ。アンタ恨み買ってそつだからな」

「平気だよ。隠居することにしたからな」

「へえ？」

「今、お得意さんに隠居するって電話してたところだ」

「いたのかよ」

クツクツと喉の奥で笑い、竜崎は煙草に火をつけた。

「店内禁煙だ」

「煙草くわえながら言つな」

竜崎は再び笑うと、ドアノブにてをかけて振り向いた。

「悪くねえ親父だったんだけど、寂しくなるなあ」

「心にも思っ  
てねえくせに」

「んなこたあねえさ。いや、  
実に残念だ」

「……………」

店主が手を犬を追い払うように振ると、竜崎は笑いながら店を出ていった。

\* \* \* \* \*

「りゅーざきさん……！」

「……………んだ、朝からうるっせえなあ……………」

もぞもぞと動いて、自分の隣に寝る女に気付いた。

しばらくボーっとしてから「ああ、そう言えば」と思ひだし、不機嫌そうな顔で女をベッドから落とす。

女の怨みがましい声を無視して、煙草に火をつけた。

「大蔵のジジイが亡くなつたらしいっす！」

「……………親父が？」

「はい！ 店の本棚が全部倒されて、店中あボロボロで……！  
た、たぶん物盗りだらうって！ 警察が！ でもジユンの情報だと  
……」

そう言うと若い男は床に転がる女に気付いてハッと息を飲んだ。  
竜崎は大きいため息を吐く。

「おい、出てけ」

「……出てけって……あたしに言ってるの？」

「他に誰がいるんだよ」

「あんなね、あたしは「いいから出てけ。殺されてえか」

怒気にびくりと身を震わせると、女は竜崎を睨みつけて素早く洋服  
を身にまとい、文句を言いながら走って部屋を出ていった。

「で」

「……ああ、はい、辻斬りじゃねえかって」

「辻斬りだあ？」

「……はい。警察が刃物がどつって言ってたって。ジユンの奴、第  
一発見者にも話聞いて……ほら、あのよく店に来る遠山のオッサン

なんすけど」

「それだけじゃ分からねえだろ」

「いや、そうなんすけど……」

「……ちつと様子見に行くか」

「え？ 無理っすよ」

若い男は慌てたように着替え出した竜崎を止める。

「サツにバレなきやいいんだろ？ まだいんのか」

「いや、そうじゃなくて……放火されて全焼っす」

「……あ？」

眉をひそめた竜崎を見て、若い男はゴクリと唾を飲む。

「誰が火いつけた」

「い、いや……俺は分からないっすけど」

「……そうか」

着うたが鳴り響き、竜崎はチラッとディスプレイを見ると、口笛を吹いて電話に出た。

「あんたから電話貰えるとは思ってなかったぜ」

『いつもお世話になっております。特殊表裏清掃株式会社の宇賀神です。竜崎様にお聞きしたいことが』

「かしこまってどうした」

『歌舞伎町の古びた本屋をご存知でしょうか』

「……さあ、いっぱいあるからな」

『そんなにはないですよ。恐らく思い浮かんだ物であたっているかと思えます』

「そこがどうした」

『ええ、その店主が殺された件で「なあ、ヒナちゃん」

『……なんでしょう』

竜崎は煙草に火をつけると、煙を吐き出した。

「ちっとデートしねえか？」

\* \* \* \* \*

「言っておきますが「ハイハイ。デートじゃねえさ」

ヒナはムスツとしたまま席についた。

運ばれてくる料理を横目で見ながら、小さくため息を吐く。

「私の方から用件を言ってもよろしいでしょうか？」

「ああ、構わねえよ？」

「……本屋の店主が殺された件はご存知で？」

「知ってる。顔なじみでな。あいつ裏では怪しい新聞の記事とか裏情報ばっか集めてるからな。よく情報収集の為に رفتっていた」

「そうなんですか」

運ばれてきた料理には手を付けず、ヒナは窓の外を見るとしばらく沈黙した。

「その店主から依頼を受けております」

「ほっ」

「あ、店主から話してよいと言われておりますので話してゐるのです  
が」

「そうか」

「ブラックカードの方の依頼なんです」

「へえ。あの店主がねえ」

竜崎は胡散臭そうな笑みを思い浮かべながら首をひねった。

「誰か殺してえ奴でもいたのかな。小言は多いが、人を怨むような  
奴では無かった気がするが……」

「ご自分を」

「あ？」

「ご自分を殺せと」

「……」

スツと目を細めると、竜崎は引きつったように何とか笑った。

「自殺願望があるようにも見えなかったがな」

「『自分は近々死ぬ気がする』と仰っていました。ですから、死ぬ前に殺してほしいと」

「……」

「ご存知無いでしょうが、彼は私の旧友でして」

「……そうか」

ふう、とため息を吐くと、ヒナはフォークを持って皿に乗っているトマトを突いた。

小さな小粒がコロコロ転がり、皿の上を行ったり来たりする。

ヒナはそれを深く刺すわけでもなくそのまま転がす。

「彼は『感づかれた』と言っていました。恐らく感づかせたのでしょ」

「何の話だ？」

「貴方の話ですよ」

スツと目線だけ上げれば、竜崎が恐ろしく冷たい目でこちらを見ていた。

「まだあの時の傷が癒えておりませんで……まあ、正直『よくもやってくれたな』と言う感じなのですが ……辻斬り様」

「……ほお？」

「うちの社員が顔を見たと言ったでしょう？ まさかとは思いましたが、本屋のご主人のお陰で核心しました。火を放つたのは私です。何故火を放つ必要があったかは分かりませんが、恐らくあの資料の山を消したかったのでしょう。警察に見つかったら大事になりそうなものもあるようでしたし」

「カフスは？ 死体から出てきたカフスはどうなんだ？」

「貴方にしてはつまらない小細工でしたね」

そう言えば、竜崎はクツクツと笑った。

「……………そうか」

「ご主人の依頼に貴方の清掃は含まれておりませんでした」

「……………」

「辻斬り様。貴方の清掃依頼が竜崎様から出ております。依頼に時間指定はありませんでしたが……………竜崎様は一応お得意様ですので、特別に最後の確認をさせて頂きます」

「そりゃ助かる」

「……………依頼を続行しますか？」

「その前に聞きたいことがある」

「……なんでしょう」

「アンタの過去についてだ」

「……」

「なあ、アンタ……家族が皆殺しにされてんだろ？」

「……」

「何年か前の年始。一家4人の体が100以上に解体されて家中に並べられるという猟奇的な事件が起こった。当時相当話題になったよなあ？ 家の天袋からは膝を抱えたガキが見つかったって話だ。死体は近所からの『悪臭がする』って通報で発見。犯人は殺害後もしばらく家に住んでいて、解体作業は風呂場。しかも逃走後、まだ見つかってねえ……あってるか？」

「……あの本屋……そんな昔の事件も残ってたんですか……」

「あの親父は変態だから、猟奇的な事件は後生大事に取っとくんだよ」

「……悪趣味な……それ、何の関係が……ありますか……」

「おいおい、どうした？ 顔色が悪いぞ」

「……………」

竜崎はニヤニヤと笑いながら意地悪そうにヒナを見た。

「……………今回のことと……………何の関係がありますか……………」

「ねえさ。ただの興味だ」

「私のことを探らないで下さい……………あの時……………貴方、あの時『何も聞いてない』って言ったじゃないですか……………一度そう言ったのならそれをつき通して下さいよ。それが男つてもものでしょう」

「アンタが俺に嘘をつかないなら考えてやるさ」

「どこまでも我が儘な人ですね……………女の嘘にくらい騙されて下さい」

「どうでもいい女の嘘には騙されてやるよ。俺は、アンタのことをもっと知りたい。アンタの為なら何でもしてやりてえのさ。犯人を捜し出して殺してやってもいい」

「……………犯人探しは結構です」

「ま、アンタなら自分で見つけれらるだろうよ。それともそうしたくねえ理由でも？ 思い出したくない、か……………犯人がアンタの知ってる人間か……………」

「……………」

ギリッと音を立てて歯を食いしばれば、竜崎は嬉しそうにヒナを見つめる。

「イイ顔だな」

「……依頼は、続行で構いませんね」

「いいや、キャンセルだ」

「……かしこまりました」

「アンタ深追いしないんだな。『なんで辻斬りになったんだ?』とか聞かねえのかよ」

「面倒事には巻き込まれたくありませんので」

「……なるほど。おい、飯食わねえのか?」

「結構です」

ガタつと大きな音を立てて席を立つと、竜崎がクツクツと笑い声をあげた。

「竜崎様」

「あ?」

「命を大切にされた方が良いでしょう」

「……アンタに俺が殺せるか？」

「……私は……人間でしたら誰でも殺せます……特に、貴方みたいな人間は」

「ほお？ そりゃ楽しみだ……じゃあ、ゲームをするか？」

「結構です」

「そういうな」

「結構です」

「しょうがねえな」

竜崎は大声で笑うと、苦しそうに口を押さえて肩を震わせた。

「ま、ゲームはいいや。また今度な」

「……」

ヒナは一瞬睨みつけると、それには答えず店を出た。

「……あーあ、バレたな。なーんでバレたかなあ……」

ボソボソと呟く竜崎の目は、先程とは違って変わって光を失っている。

テーブルに札束を置くと、フラッと立ち上がって店を出た。

## 第十章：転機

「……………」

病的な男は戸惑い気味にヒナを見ていた。

昨日の夜、フラフラしながら帰って来たかと思えば、「会社を潰す」と言い、続けて「何年か前に起こった事件の情報を全て消せ」と言ってきた。

指定された事件は数年前に同じことを言われてある程度消したはずだ。

当時は全て消すと不信に思われるからといくつか残しておいた気はするが、あまりに凄惨かつ陰惨な事件だったために、ネット上でかなり個人的な情報まで漏れ出していて、収集が付かなかったのを覚えてしている。

本当にやるのかと確認すれば、我に返ったように泣きそうな顔をして首を振り、奥の部屋へ閉じこもってしまった。

「……………」

そして今朝、フラッと出てきてスウェットのままTVをただ眺めている。

「……………」

それから話しかけても「ん」と軽く音を発するだけだ。

「まだ引きこもってんのか？」

「あ……お、お、おはようございます……！ ま、まだ……元気、  
出ないみたいで……」

「んだよ、ヒナの奴。昨日いきなり『会社潰す』って連絡があつた  
と思つたらコレかよ。コイツの我が儘のせいで何人の人間が路頭に  
迷うと思つてんだ？ 大体まだ仕事受けてこなし終えてねえのだつ  
てあるだろうが。予定は2年先まで詰まってるっつーのによ。どう  
せあれだろ？ 殻に閉じこもつたつたつて、しばらくすりゃケ  
口つとしてんだろ？ いいよいいよ！ 放っておきゃ！ 俺らで仕  
事回しとこうぜ」

「ちょっと……そりゃマズイっスよ」

「ああ？ だつてそうだろ？ 今さらこの仕事辞めてどうするんだ  
よ。地獄に肩足どころか全身入ってるっつーのに。一旦裏側の世界  
に入った人間はな、二度と表の世界にや出れねえんだよ。そりゃ辞  
めたつて困らねえくらい金の金はあるけどよ、散々やらかして今  
さら表に出る気なんてねえんだろ？ だつたらしばらく休業つてこ  
とで、また気が向いたらやり始めりゃいいだろうが。とにかく今あ  
る仕事は全部終わらせようぜ」

ハツと鼻で笑うと、頭の悪そうな男は部屋を出て行った。

病弱な男はそれをオロオロしながら眺め、部屋には再び沈黙が落ち  
る。

誰も見ていないテレビだけが、うるさく喋り続けていた。

\* \* \* \* \*

「いらつしゃいませえ」

100%営業スマイルのキャバ嬢が恰幅のいい男を迎える。  
恰幅のいい男は満足げに頷くと、店の奥へと進んだ。

「あ、あの！ お客様！ 初めてのの方は……」

「大丈夫だよ。俺はこのオーナーと知り合いなんだ」

「え？ でも……」

「大丈夫だつってんだろぅが」

いくらか顔をしかめて言えば、キャバ嬢はビクリと震えて困ったような表情をした。

小声で「でも……」とか「あの……」とかボソボソ言えば、恰幅のいい男はうざったそうにため息を吐く。

「あんな、嬢ちゃん。俺は……」

「おいおい、店の子いじめねえでくれねえかな」

「ああ？ おお！ 識じゃねえか。俺のことくらい店のやつらに教えとけよ」

恰幅のいい男がそう言えば、竜崎は困った顔で笑った。

「俺の嫌いな奴は客として認めねえんだ」

「ああ？」

恰幅のいい男はニヤリと笑いながら竜崎の後に続く。

竜崎は財布からお札を何枚か抜くと、キャバ嬢に渡して「悪いな」と小さく漏らして恰幅のいい男と一緒にVIPルームへと消えた。

\* \* \* \* \*

「で？ 今まで音信普通だったのに急にどうした」

「いやな？ 竜崎識って奴がやってる店ってのが評判良くてよ。俺の旧友にそんな名前の奴がいたなと思っただけだ。まさか根暗のプツツン野郎がそんな店やってるわけはねえと思いつつも、あまりに評判良いから見に来たって訳だ」

「……俺はありがたがればいいのか？」

「素直に喜べよ。いじめられっ子のテメエが、まさかこんな立派な店持ってるとはなあ？ ここいらの界隈じゃNo.1じゃねえのか？」

「いや、まだまだだよ」

「下手な謙遜してんじゃねえ」

「いや、本当に」

竜崎は苦笑しながら酒を渡した。

恰幅のいい男はそれを受け取ると一気に飲み干し、ため息を吐いた。

「で、まあ俺も様子を見てやるか、と。そう思っただけだ。あん時みたいにな。俺が様子見てやらねえと駄目だからなあ？ プツツンで根暗で変態の識ちゃんよお」

「……なんだ、また俺のことイジメに来たのか？ 勘弁してくれよヤスちゃん」

「調子こいてんじゃないぞコラア！！！」

恰幅のいい男はいきなりテーブルを蹴りあげ、竜崎の胸倉をつかむ。

「誰のおかげでここまでやれたと思ってんだ？ 誰のお陰でこんな  
厳しい世界で耐えられてんだと思ってるんだ！？ アア！？ 言うて  
みる！！！」

「……なんだよ、何が欲しいんだ？」

「ふん……分かってんじゃないか」

そう言って手を離すと、恰幅のいい男はスーツの乱れを直して椅子  
に座りなおした。

「金貸してくんねえかな？」

「……金？」

「おい、誰に向かってそんな顔してんだ？ あ？ これだけでいい  
出せ」

ため息を吐きながら指を2本立ててヒラヒラ振ると、煙草を取り出  
して火をつけた。

「……………」

竜崎は黙って部屋を出る。

しばらくして戻って来た竜崎の手には、札束が2つ握られていた。恰幅のいい男はそれを見て顔をしかめ、「おいおいおい」と言いながら煙草の火を消した。

「桁が違え」

「つつてもなあ。どうせ返さねえだろ？　ただでやれんのはこれが限度だよ」

「ああ？　テメエ……………随分偉そうな態度だな……………俺がお前を育てたのを忘れたのか？　恩を仇で返すような真似すんじゃないやねえ！！」

勢いよくグラスをつかみ、竜崎に向かって投げる。グラスは竜崎の額に当たると、床へ落ちて割れた。

「早く持ってこい」

「……………」

竜崎が無表情で部屋を出るのを確認すると、恰幅のいい男は床に唾を吐いて椅子に座りなおした。

\* \* \* \* \*

「ただ酒つてのは旨えな」

恰幅のいい男は満足げに酒を煽り、すっかりご機嫌になっていた。周りのキャバ嬢達は笑顔も無く黙々と世話を焼いて、時折無理矢理抱き寄せられるのを嫌そうに避けている。

「おい、お前ら、こいつの昔話を知ってるか？」

そう言ってゲップしながら言えば、キャバ嬢達は興味なさげに「知らない」と呟き、恰幅のいい男は満足げに竜崎を見つめた。

「こいつは昔、根暗なプツン野郎でなあ。いっつもいじめられたのを俺が助けたってわけよ。ま、プツン野郎って所から推して知るべしって感じだけど、陰ではヤバイことやってたんだぜ？ 何人が病院送りになったと思う？ 何匹の動物が死んだと思う？ こいつはとんだ変態野郎だったことさ」

「……」

竜崎は黙って柔らかな笑顔を崩さず、キャバ嬢達はオロオロと2人を交互に見つめる。

「今でもやってんのか？ 動物での生体実験つてのはよ」

「ああ。最近は人間で実験するのが楽しくてな」

「そうか！ お前もとうとうそこまで言ったか！」

下品な笑いで一蹴すると、恰幅のいい男は竜崎の肩を殴って酒を一気に飲み干した。

キャバ嬢達は「冗談だったのか」と安堵の表情を浮かべ、引きつった顔で笑った。

竜崎は目で「戻れ」と合図を出し、キャバ嬢達を退出させる。

「るせえ！ 俺に指図すんじゃないやねえ！！ 女も先に返しちまうしよ。でもま、帰るかな……最近やたら酒に弱くなつてなあ。俺も年か……ああ、そーいや。特殊……なんとか会社つて知ってるか？」

「特殊……？」

「なんでもブラックカードつてのを見せれば、人間だろうがお釈迦様だろうが掃除してくれるって話じゃねえか」

「ああ……最近噂の」

「おう。俺はあのブラックカードが欲しくてなあ。でも中々会社の奴に会う機会がねえんだ。電話かけても事務所の人間は出やしねえ。話しさえできりゃ、この拳で無理矢理にでもカードを貰うんだけどよ」

「へえ？」

「お前、カード手に入れたら俺によこせ」

「やめといたほうが良いぜ」

「……あ？」

不機嫌さを露骨に表情に出し、恰幅のいい男が顔を歪めた。

「俺の店に以前カードを不正取引した客が来ててな。関係者が翌日までに全員殺されてた。それに、あの会社の連中は恐ろしく強い」

「テメエ……知らないフリして知ってたのか？ 会ったことがあるのか？」

「……さあ」

「言え！ 知ってることを全部だ！！」

「何も知らねえさ。店にいたっただけだ」

「…………チツ…………使えねえ…………俺はブラックカードを手に入れたら、真っ先にお前を殺すぜ」

恰幅のいい男は竜崎のスーツに唾を吐きかけると、店を後にした。

「……………」

静かにグラスや散らばったフルーツをかき集める。  
グラスを握る手に力がこもり、竜崎の手の中で粉々に砕けた。

\* \* \* \* \*

『誰だアンタ。天井の出前なら下一ケタ間違ってるぜ』

「おいおいそれが客に対する態度か？ 一体どついう教育受けてんだ？」

『知らねえよ。俺は電話の出方なんて習ってねえからな。それよか用件があるならさっさと言いやがれ。出前の注文とかし出したらぶつ殺すぞ？ なんでか、さっきからやたら間違い電話がかかってくんだよ。しかも全部同じババアだ』

いつきに喋る電話口の声聞き、竜崎は「ああ、この声はあの男か」

と目星をつけて薄っすら笑った。

「そりゃ災難だな」

『災難なんてもんじゃねえよ。どこぞのババアから何度も天井の注文がくるんだ。そんな食いたきやもうテメエで作れっつてんだよな。拳句』そっちが番号を間違えてるんじゃないのか』と来たもんだ。かけてきてんのはお前だっつーの』

クツクツと押し殺した笑いを洩らしながら、竜崎は「用件なんだが」と切り出す。

「ブラックカード使えるか？」

『無理だ』

「どうして？」

『休業中だからだ。この電話は休業のお知らせと、予約分の連絡専用ダイヤルだ』

「休業？ 何かあったのか？」

『別に。飽きたからな。そろそろ慈善事業でもやろっかと思っつてよ』

「へえ」

『……やめろ！俺は嘘が苦手なんだよ！！ンな問い詰めるようなきかたしてんじゃねえよ！嫌らしい奴だなお前は！お前アしだろ！？だいぶ前に依頼頼んできたキャバクラの偉い奴！お前、ホイホイ人殺しすぎなんだよ！テメエで殺ってねえからって罪悪感なく殺しまくる金持ちがいるんだけどよ、お前は典型的なそのタイプだな！ホントに！！ゲームや漫画じゃねえんだから、そうホイホイ殺すのはやめろ！人の命の尊さを考えたことがねえのかテメエは！……あつ！オイやめろ馬鹿！！』

『大変申し訳ございません、お客様ご予約の方でしょうか？』

急に電話口の声が代わり、低く渋い声が聞こえる。

恐らくこの男の対応に業を煮やした別の人物が無理矢理変わったのだろう。

「いや、新規で頼もうと思ったんだけど、駄目らしいな」

『ああ、はい。弊社はしばらく休業することになりました、現在ご予約頂いているお客様しか対応できない状況なんですよ。大変申し訳ないのですが』

「なるほどな……まあいいさ。ところで社長は元気か？」

『社長？……ああ、もしかして竜崎様ですか？』

「おう、よく分かったな」

『気付くのが遅れましたが、お得意様ですので。失礼致しました。』

うちの社員の躰がなくなってなくて』

「いや、いいさ……ま、そんなわけだ。仕事が頼めねえなら仕方ねえな」

『申し訳ございません。再開する際はご連絡させて頂きますので』

「ああ、頼むよ」

『はい、かしこまりました』

電話を切ると竜崎は深くため息を吐いた。

「なるほどなあ。聞きたいことがあったんだが……直接出向くしかねえか」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8101t/>

---

特殊表裏清掃株式会社

2011年6月5日09時00分発行